

み や ぼ き
宮 崎 遺 跡

—長原地区団体営土地改良総合
整備事業に伴う発掘調査報告書—

1988・3

長 野 市 教 育 委 員 会
川 田 土 地 改 良 区

序

文化の向上発展は、本質的には常に前進し琢磨し創造するなかにこそ育てられるものと考えます。先人の残した埋蔵文化財は、長い歴史の過程のなかで様々な生活ドラマを描き、常に新しい開花を繰り返しながら時代の流れとともに真の文化的価値観が今日まで伝承されてきたものと確信いたすものであります。法の精神によりますと「文化財は、我が国の歴史文化等の正しい理解のために欠くことのできないものであり、且つ、将来の文化の向上発展の基礎をなす」と明記されております。

このたび、発掘調査いたしました宮崎遺跡は、長野市若穂上和田地籍に位置し、保科扇状地の西端の地にあります。また、背後には上信越高原国立公園の菅平高原を控え、眼下には市内中央部を流れる千曲川・犀川の二大河川の合流地点をはじめ長野市街地、遠くは北信五岳を一瞥におさめる風光明麗なところであります。

この宮崎遺跡は、昭和23年に表土下20cm程度のところから敷石住居址様の遺構が検出された以降は、本格的な調査を受けないうまま現在に至っております。今回の調査は、リング・ブドウ園等の畑灌漑用散水パイプ埋設工事に起因する一部の調査でありましたが、遺跡の規模・内容はともに市内を代表する縄文時代後期から晩期に亘る重要な大規模集落遺跡であることが再確認されたわけであります。

ここに、長野市の埋蔵文化財第28集を刊行いたしましたので広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する歴史、文化等の正しいご理解をいただければ大変幸甚に存じます。終りに、本遺跡の調査から整理報告書に至るまで、ご指導ご協力を賜りました関係者各位に心から感謝を申し上げる次第であります。

昭和63年3月

長野市教育長 奥村 秀雄

例 言

- 1 本書は、長野市若穂保科学上和田地籍宮崎遺跡の「長原地区団体営土地改良総合整備事業」にともない実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 調査は、昭和60年度・62年度の二次にわたって実施され、国庫・県費補助を受けた。
- 3 本書では、調査によって確認された遺構・遺物を中心に、その基本資料を提示することに主眼を置いた。資料掲載の要領は次のとおりである。
 - ・検出した遺構・遺物の概要はIII章において記述し、出土遺物の数量等を出土地点別に表にまとめた。
 - ・検出した全ての遺構については、IV章において実測図・写真により解説した。遺構図中水糸線にともなう数字は標高BM(374.84m)からの±cmをあらわしている。遺構内出土遺物に関しては可能な限り図化し写真を掲載した。遺構出土遺物中、土製品・骨角製品に関してはV章に掲載した。
 - ・遺構を確認するに至らず、遺物包含層中出土とした遺物に関してはV章に掲載した。
 - 土器 出土量が膨大であるため、出土地点・層位別に台帳作成作業・復元作業を実施したのみであり、分類検討作業には着手していない。代表的なものを無作為に抽出し、写真のみで掲載した。
 - 石器 出土した全資料の分析結果をもとに、その様相について記述し、必要に応じて実測図・写真を掲載した。
 - 土製品・骨角製品 出土した全資料を抽出し、例外を除いて全てを図化し、あわせて写真を掲載した。
- 4 本書作成に至る調査員の分担は次のとおりである。
 - 遺構 土壙墓 矢口忠良
石棺墓・住居址・他 青木和明
なお、遺構図作成には倉田佳世子が加わった。
 - 遺物 土製品・骨角製品 矢口忠良
土器 横山かよ子 古岩井久仁 清水隆寿 青木和明
石器 鶴田典昭
- 5 石棺墓・土壙墓より出土した人骨、遺物包含層より出土した獣骨に関しては、その取り扱い指導・鑑定を西沢寿晃先生(信州大学医学部)にお願ひし、V章-5として玉稿をいただいた。また、遺跡周辺の環境II章-1・2に関しては和田博先生(長野市立博物館)にご執筆頂いた。記して感謝申し上げたい。
- 6 調査によって得られた諸資料は長野市埋蔵文化財センターが保管しているが、長野市立博物館に移管される予定となっている。

目 次

序	
例 言	
I 調査経過	
1 調査に至る経過	1
2 発掘調査の経過	1
3 調査体制	4
II 遺跡周辺の環境	
1 地理的環境	6
2 歴史的環境	8
3 和田東山古墳群の前方後円墳について	9
III 調査概要	
1 調査範囲と遺構・遺物	10
2 遺跡の広がりと内容	14
IV 遺 構	
1 住居址 1～3号	16
2 石 棺 墓 1～8号	35
3 土 壇 墓 1～11号	50
4 埋 葬 1～3号	54
5 その他の遺構	58
V 遺 物	
1 土 器	64
2 石 器	68
3 土 製 品	80
4 骨角製品	92
5 宮崎遺跡出土人骨および動物骨について	94

おわりに

I 調査経過

1 調査に至る経過

長野市若穂保科地区では、広い扇状地を利用して果樹栽培が盛んであり、過水対策として灌漑用施設の整備が計画された。事業は川田土地改良区が担当し「長原地区団体営土地改良総合整備事業」として昭和58年度より着手された。事業は南北2km・東西500mの対象地内において、送水管（幹支線）とそれに接続するスプリンクラ一用散水線の埋設を主体とし、幹支線の総延長だけで3,300mに達するものである。この事業対象地には、本遺跡をはじめとする認知の埋蔵文化財が多数存在するため、昭和59年度にその保護につき川田土地改良区と長野市教育委員会とが協議し、60年度をもって分布調査を含めた確認調査を実施する運びとなった。対象となる遺跡は、長原・白塚古墳群、宮崎・塚本・けいし場遺跡である。分布調査の結果、濃密な遺物の散布が認められた宮崎遺跡に関しては、送水管埋設に先立って記録保存のための発掘調査を実施することとした。なお、塚本・けいし場遺跡については送水管埋設の際に立ち会い調査を実施することとし、古墳群については埋設路線にかかる古墳が存在しないものと確認された。



土地改良総合整備事業 送水管の埋設

2 発掘調査の経過

昭和60年度調査は5月7日の分布調査より開始された。分布調査の結果から宮崎遺跡の仮の範囲を設定したうえで、その施工路線を確認しながら発掘に着手することとした。発掘調査は5月13日に開始され、工事における掘削に先駆けて調査坑（以下トレンチ）の掘削を行った。トレンチ名は1号より順次番号を付け、28日までに7号トレンチまでの掘削を終えた。トレンチの掘削には大小の礫が大半を占める表土層を抜くために、通常の発掘作業には使用しないツルハシを用いることとなった。当初掘削したトレンチは埋め戻すこととしたが、埋め戻しの労力が大きく、工事の再掘削において路線が変更となる可能性もあったため、5号トレンチ以降は発掘調査用トレンチをそのままパイプ



事業対象地での分布調査



ぶどう畑での発掘調査（14～17号トレンチ）

埋設坑として利用していただくよう関係者に協力をお願いした。1号トレンチからは1号住居址を検出した。このトレンチ付近では、耕作土直下に遺構が発見され、あまりの堆積の薄さに驚かされた。かつて、一帯が麦畑であった時代には、敷石のある部分での麦の発育が悪く、麦秋の時期には敷石の点在状況が顕著に観察されたという。地表下20cmに1号住居址が存在することも納得できる。7号トレンチからは2号住居址が確認された。トレンチ内に明確な黒色土の落込が検出され、整穴住居址であることが確定となったため、地権者へお願いして可能な限り拡張調査させていただいた。縄文時代晩期の住居址は全国的にみても稀少であり、一部が工事により破壊される以上全面を記録する必要性を認めた事による。この2号住居址の調査を完了し、拡張部分の埋め戻しが終わった6月2日をもって1次調査を終了した。

2次調査は、62年10月26日より着手した。前回が特殊パイプの埋設であったのに対して、今回は散水用の枝線接続埋設によるため、調査面積は大幅に増大することとなった。1次調査における教訓もあり、施工業者や地元区民の協力体制も整い、調査自体は順調に進行した。8号トレンチより掘削を開始し29号トレンチまでを掘削の予定とした。8・9号トレンチでの獣骨や骨角器の出土を経て、11月10日の15号トレンチでの縄文晩期人の発見により大いに耳目を集めることとなった。12月2日初めての積雪に見舞われて以降、急速に寒さを増すなか、22号トレンチでは石棺墓が続々と検出され、その調査方法と保存について大いに苦慮することとなったが、幸いにも施工業者の協力により遺構埋め戻しのうえ上部にパイプを埋設する工法等が採用されるなど、1基を除き全てを保存できる成果を得た。また地権者の方々の埋蔵文化財保存についての深いご理解も、調査における大きな励みとなった。14日には、石棺墓群の埋め戻しが完了し、2か月近く及んだ2次調査の現地における作業を全て終了した。

ここで調査と遺物整理の方法についてふれておきたい。基本的にはトレンチ調査、それも遺物包含層の検出が主な作業となるため、各トレンチを大きな単位として土層別に遺物を採取することに留意した。トレンチが長くなるものに関しては、適宜小区画割を施した。採取した遺物に関しては、可能な限り現場での取り上げ単位を尊重し、単位を崩さないで保管できるように整理した。整理の過程については遺物台帳にまとめられており研究者活用の便宜がはかられている。今後、調査成果が大いに活用されることを期待したい。



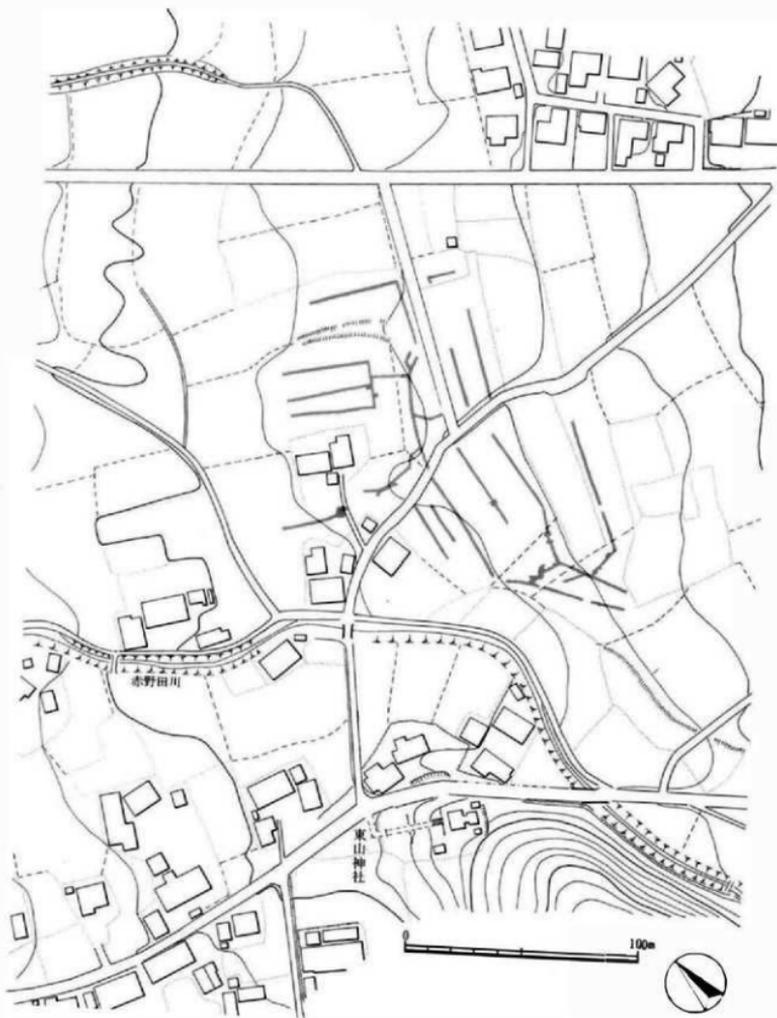
石を多く含む宮崎遺跡の表土(20号トレンチ)



調査区を拡張した住居址の発掘(2号住居址)



石棺墓の検出(3号石棺墓)



遺跡周辺の地形図（1：2,000） スクリーン部分は調査位置を示す

3 調査の体制

(1) 昭和60年度の調査体制

第1次調査は、長野市と川田土地改良区との契約に基づいて、長野市教育委員会が設置した長野市遺跡調査会が組織する発掘調査団によって実施された。

長野市遺跡調査会の組織

会 長	奥村秀雄	(長野市教育委員会教育長)
委 員	米山一致	(長野市文化財保護審議会長)
	桐原 健	(長野市文化財保護審議会委員)
	清水宮一	(長野市教育委員会教育次長)
	関川千代丸	(長野市教育委員会文化財専門主事)
	矢口忠良	(調査団長)
監 事	高野 覚	(長野市教育委員会総務課長)
事務局長	戸津幸雄	(長野市教育委員会社会教育課長)
局 員	吉池弘忠	(長野市教育委員会社会教育課主幹)
	山崎博三	(長野市教育委員会社会教育課主査)

調査団の組織

団 長	矢口忠良	(長野市立博物館主査)
調 査 員	山口 明	(長野市立博物館主事)
	青木和明	(長野市立博物館主事)
	中殿章子	(長野県考古学会員)
	横山かよ子	(長野県考古学会員)
	出河裕典	(信州大学生)
	古岩井久仁	(信州大学生)
参 加 者	脇坂忠雄	坂口とし 畑とよい 川原邦子 黒井充子 青木胡子 藤沢月子 丸山たまき
	大井悦夫	島田靖子 雪入洋一 井出つたえ 中沢麗子 丸山悦子 諏訪秀雄
	岡沢治子	徳成奈子



雪のなかでの発掘作業(21号トレンチ)



写真撮影前の清掃作業(1・2号石棺墓)

(2) 昭和62年度の調査

今年度の発掘調査から長野市教育委員会が直接事業を実施することになった。組織・業務分担は以下のとおりである。

調査主体者	長野市教育委員会教育長	奥村秀雄
総括責任者	長野市埋蔵文化財センター所長	小木曾敏
庶務係	〃	所長補佐 小山 正
	〃	職員 倉田佳世子
調査係	〃	調査係長 矢口忠良
	〃	主事 青木和明
	〃	主事 千野 浩
	〃	職員 中殿章子
	〃	職員 横山かよ子
調査員	鶴田典昭 (明治大学大学院生)	
	古岩井久仁 (信州大学生)	
	清水隆寿 (立正大学生)	
	賛田 明 (国学院大学生)	
特別調査員	西沢寿晃 (信州大学医学部助手)	
	和田 博 (長野市立博物館専門員)	
調査参加者	橋爪孝次 宮下孝一 中沢文子 坂口和子 雪入智恵子 川原正敏 丸山美恵子 川島邦子	
	丸山悦子 荒木保 峯村けさみ 永井権次 永井百合子 堀内ます子 親松恒人 峯村文則	
	藤沢月子 篠沢きよ 大井マツ子 中牧己喜子 小林守 刺持つる子 大井兵治 上林けさ子	
	滝沢宇子	
整理参加者	岡沢治子 徳成奈於子	

以上の調査関係者のほかに、百瀬長秀氏(長野県埋蔵文化財センター)、宮下健司氏(長野県史刊行会)には遺構・遺物についてご教示を頂いた。また、調査に際して雪入敬一氏には天幕設置地等の提供で、土地改良組合の組合長雪入礼司氏をはじめとし、地主の諏訪秀雄氏・坂口いち枝氏・堀和美氏・丸山潔氏・島田実氏には全面的にご協力を頂き、そして川田土地改良区及び施工業者の東洋スプリンクラー(株)の皆様から多大なご援助を頂いた。記して感謝申し上げます。



遺構の実測作業(6号石棺墓)



遺構の埋め戻し保存(8号石棺墓)

II 遺跡周辺の環境

1 地理的環境

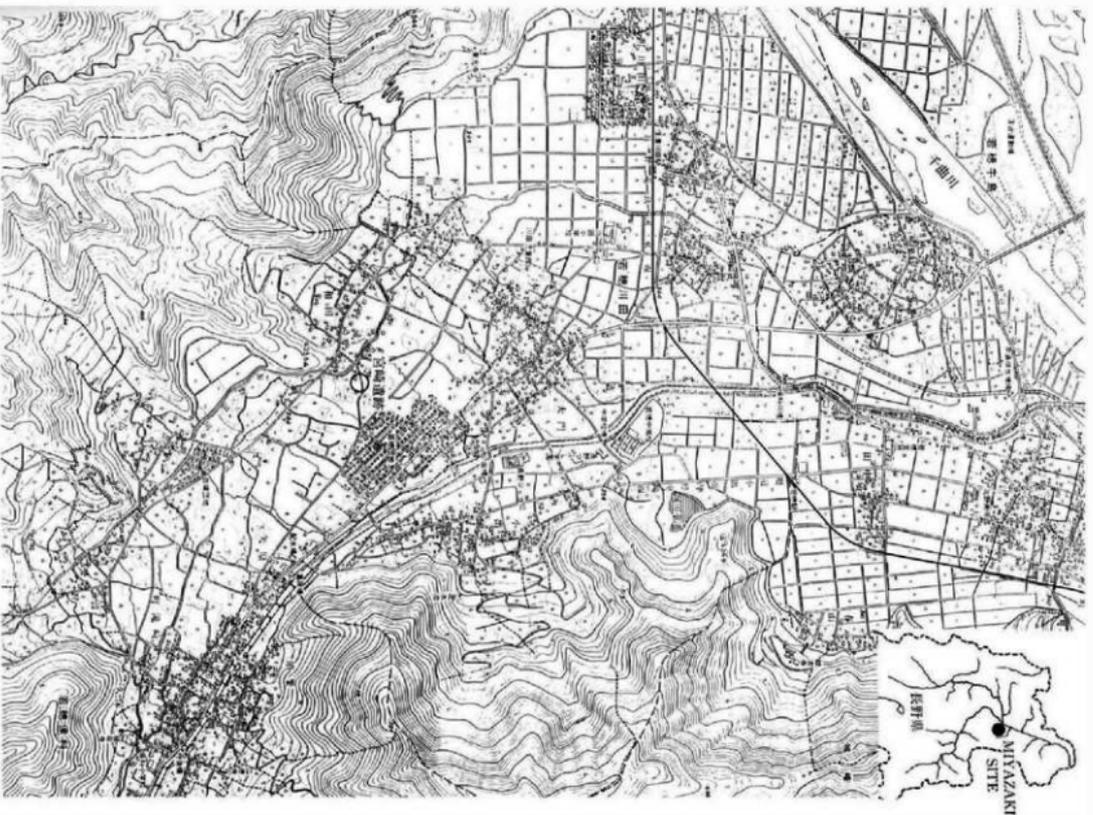
長野盆地以西に広がる水内西部山地は700~800mの切峰面を形成する低い山地で、盆地西縁を限る山麓線は比較的単調である。それに対して東部山地は壯年期の山容を呈し、山脚は極めて出入りに富み、急峻な尾根が盆地に突出する間隙には深く刻み込んだ谷間があり、典型的な崖錐や扇状地がその下部に発達している。

この東西の対比的相違は、両山地の成因に起因するもので、西部山地が新第三紀中新世中期以降の比較的新しい堆積層を主体としているのに対して、東部山地はそれ以前の海底火山活動期におけるグリーンタフ地向斜の海中におきた激しい火山活動（グリーンタフ活動）を成因とし、緑色火山岩類（古期火山岩）を中心としている。本遺跡をめぐる環境も全くその例に漏れない。本遺跡が所在する保科扇状地と若穂北部地区との間には、変質玄武岩の太郎山（996.9m）山塊が500~300mの比高差をもって北風をさえぎる。南方には古期火山岩からなる奇妙山（1099.5m）を主峰として西北にのびる大星山塊が、枯れた山容を示して200~300mの高さで大室谷を隔て、その先端は千曲川畔に至って開崎の険となり、古來人々の往來を妨げてきた。大星山塊北側の高下~下和田付近には、和田東山などの低い丘陵が主軸と直角方向に扇状地に突出しており、これらは中新世中期に堆積した清野層（青本層）が侵食された残丘で、松代・更埴市へと南下するほど堆積が顕著になる。

保基谷山（1529.1m）北斜面を集水した保科川が、笹平沢・高岡沢の清流を合わせて西北に流下する。谷口の外山部落付近から久保辺りに至る約1.5kmの間では、崖錐を侵食して河岸段丘地形を形成したのち、以下2.5kmにお



保科扇状地をのぞむ 左手東山丘陵前面が宮崎遺跡



選線周辺の地形図 (1:20,000)

たって平均1/10もの強い傾斜の扇状地となり、北山麓に近寄るほど傾度が顕著になる。扇状地には急流が運んだ転石が至る所に認められ、小礫が耕地を埋めつくしている。扇端は若穂中学校一塚本一下和田を連ねた地帯で清洲で豊富な伏流水が湧出し、以西に展開する湿地帯の水源地となって豊かな水田地帯を形成し、そこに条里制遺構も検出されている。この後背湿地の先端には千曲川自然堤防が発達し、町川田・領家・牛島・古屋などの集落が連なっている。

当該扇状地は保料扇状地と呼ばれるが、赤野田川との複合扇状地でもある。この川は標高1157.4mの樺切山北斜面の水を集めて赤野田崖線を流下し、優勢な保料川の堆積に押されて南方よりに流路をとり、本遺跡もその堆積流域に展開する。この付近は比較的緩傾斜地で赤野田川も平素は水量の乏しい枯れ川ではあるが、保料川同様相当の暴れ川で、貫流している後背湿地帯や牛島など下流ではしばしば水害をもたらし、輪中堤構築の一因ともなっていた。

本遺跡が和田東山丘陵に接する地にあるのと同様、扇端以外では集落は古くから山麓に発達し、そこにさまざまな歴史の春秋を重ねている。転石や礫の多い扇状地の開拓は比較的新しいと見られ、現在では住宅地が造成されてもいるが、大部分は本遺跡と同様果樹園になっている。

2 歴史的環境

この扇状地に所在する遺跡は、数多い積石塚古墳を除いてはそれほど規模の大きいものは従来認められなかったが、原始時代以降各時代の人々の痕跡は残されている。

旧石器関係では谷口近くの高岡小山平の有舌尖頭器が報じられている。縄文遺跡は笹平川源流及び持巻・高岡などの山間地と本遺跡の所在する南山地帯りに限定され、特に後期は本遺跡と川上隣接地の藪在家遺跡のみで両者は一連のものとも見られる。

弥生期も確認されているのは扇端とその両脇の山麓崖線付近及び自然堤防南端で、縄文遺跡よりも標高の低い地域即ち後背湿地帯周辺に所在する傾向があり、弥生後期がほとんどを占める。

この地域は河東方面において大室古墳群について古墳が多く、大室山麓の大室北山支群もあわせると88基も確認された。扇状地の長原古墳群（32基）と北山麓の須釜古墳（4基）以外は全て扇状地南平から南山地にかけて分布する。大室北山支群の大室山前方後円墳及び前方後円墳かとの所見もある塚本王子塚を除くと、ほとんどが径10m内外の積石塚古墳でニカゴ塚のみ合掌型石室が認められた。長原古墳群は現在消滅（7号墳は現存）しているが、昭和42年団地造成の際に7基が発掘された。既に盗掘を受けていたが、金銀環・玉類・馬具・刀子その他の副葬品が検出された。なお昨秋、本遺跡南隣の和田東山丘陵上に中世の城塞遺構とともに東山古墳群中に前方後円墳も混在するとの見解も出されており、拳手人面土器等で広く知られている片山祭祀遺跡及び霧環頭大刀・内反大刀出土地もその西側崖線地で本遺跡から数百mと離れず、本遺跡付近一帯が当時の中心的地域であったと推定される。

和名抄に記載された穂科舞をはじめ長田御厨・鉄線形など歴史時代の資料・遺跡遺物は枚挙にいとまなく個々に関しては省略するも、それらはいずれも南部山麓から北山麓方面に移行している。なお、本稿に関しては長野市の埋蔵文化財第13集の『川田条里的遺構』報告を併読されたい。

（参考文献）『長野地域の地質』 『上高井誌』 『長野県町誌』 『長野県史』 『長野県の地名』

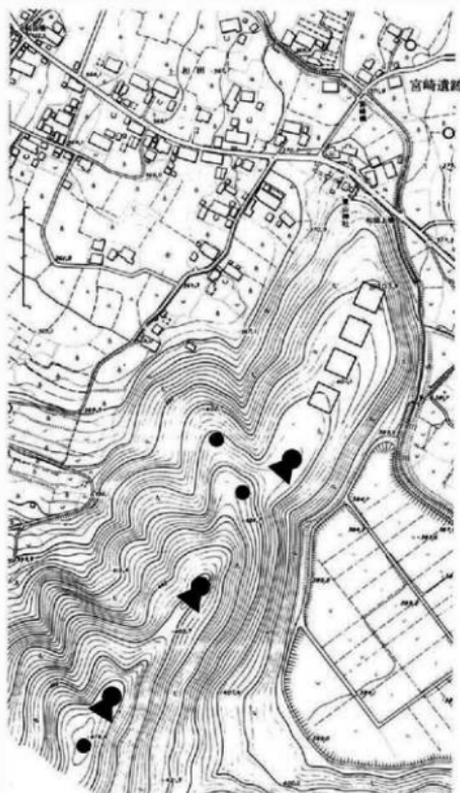
『若穂の文化財』 『長野市の埋蔵文化財第13集』

3 和田東山古墳群の前方後円墳について

和田東山は、宮崎道跡の南に隣接しており、本道跡に残された縄文時代の人々と食糧確保等で密接に結び付いていたことは確かであろう。そしてこの尾根は、大室山系から北に突出する支脈のうちで最も勾配がなる長いものである。この付近を通過するたびに、気持の良い山懐だと思いつつ今秋まで登る機会がなかった。ところで、宮崎道跡の調査を控えた9月、発掘調査の下見を兼ねながらこの山を踏査することにした。従来からこの山稜上には、和田東山古墳群として7基の円墳が存在することが知られていた。しかし登り始めて以来驚愕するばかりの遺構と次々にでくわした。まず尾根先端部に迷郭型の山城が4基の郭をもって整然と並んでおり、その残存形態も一辺10数mの方形を呈し、ほぼ旧態のままの状態を残しているものと思われる。また土塁もしかり。しかし今のところいつ・誰が構築したのか判然としない。次に標高414m付近のやや尾根上に至ると、前方部が変形を受けているもの全長約30mほどの前方後円墳が、更に標高450mの所に全長約40mほどの完形に近い前方後円墳を発見した。この時の踏査はここまで打ち切り、また測量もしていない状況であったのでこれらの古墳は前方後円墳の可能性が高いという表現を用いた。

ところで今冬、1月に来長された明治大学大塚初重教授、小林三郎教授、熊野正也講師の先生方に現地を視察のうえご助言頂く機会を得た。その結果、正式な判定は測量の成果を待つべきではあるが、前記した2基の古墳は前方後円墳の可能性が極めて高いこと、更に登り詰めた標高472mの山頂部には、全長40mに及ぶ完形を保つ前方後円墳と円墳があること、また山城も古墳の墳丘を再利用している可能性もあることなどを確認した。

今まで若穂地域の最も古い古墳は、大室古墳群18号以外にはないものと考えられてきた。それが今日、5世紀代にさかのぼりうる前方後円墳が小さな尾根上に3基も存在することが判明しつつあり、県下でも他に見られない在り方を示しており、驚きをもって新発見の事実と対面している。いずれにせよ他に類のない遺構であり、古代史解明の記念物として永久に保存する必要がある。

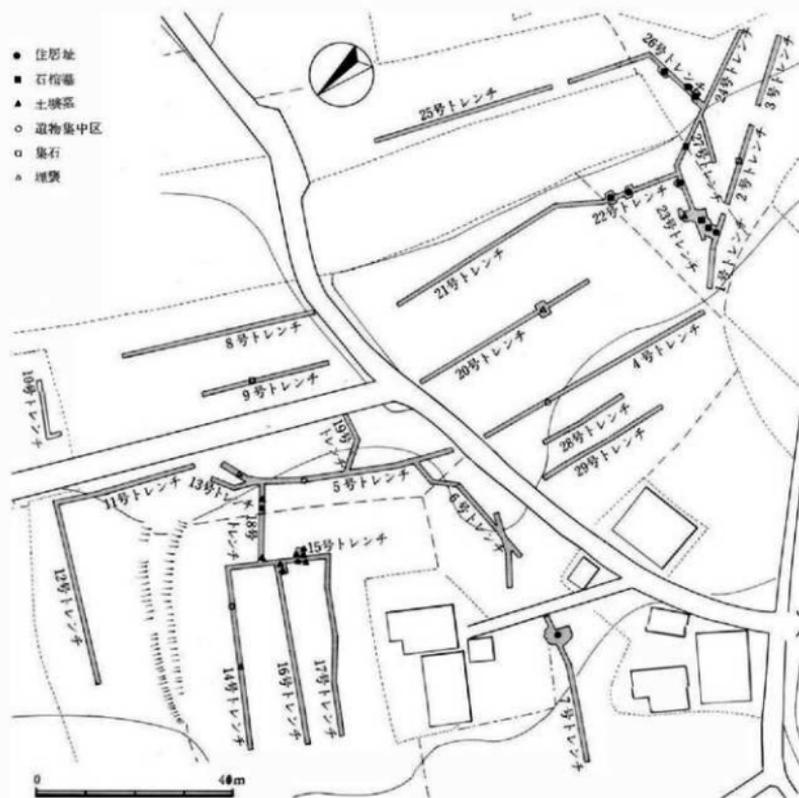


和田東山尾根上の遺構分布図 (1:5,000)

III 調査概要

1 調査範囲と遺構・遺物

発掘調査の範囲は幅1m以内の散水パイプ埋設部分に限られ、掘削したトレンチの総延長は823mを測る。ただし、遺構が確認され、施工により影響が及ぶ恐れのある部分については調査範囲を拡張している。確認された遺構は、住居址3軒・石棺墓8基・土塋墓11基・埋嚢3基・集石遺構4か所・遺物集中地点3か所である。各トレンチ番号と遺構番号は図に示した。遺構として確認はされなかったものの、各トレンチ内からは多量の遺物出土をみている。それらの遺物については出土状況を表としてまとめた。土器については数量化することができなかったが、各トレンチ別の出土比率は石器のそれにはほぼ対応するものと理解されたい。



調査坑（トレンチ）の配置と遺構の分布（1：1,000）



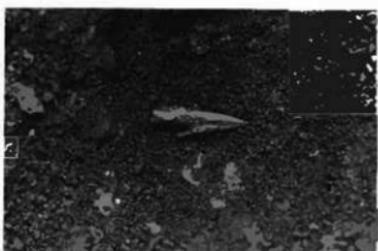
20号トレンチ 石棒出土状態



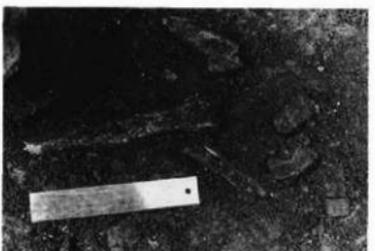
5号トレンチ 土器出土状態



5号トレンチ 土器出土状態



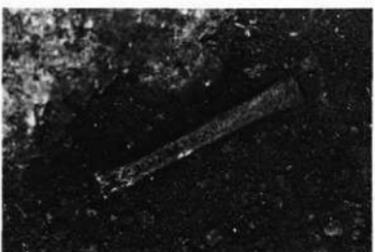
5号トレンチ 鹿角製結頭出土状態



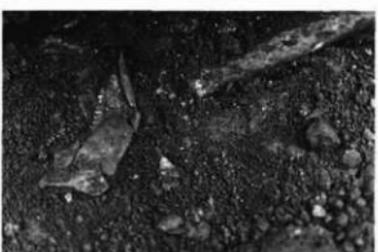
5号トレンチ 獣骨出土状態



5号トレンチ 獣骨出土状態



8号トレンチ 獣骨出土状態



8号トレンチ 獣骨出土状態

トレンチ・遺構別遺物出土状況表

遺構外の出土遺物

トレンチ番号	出土遺物				石 鏃	石 斧	打 製 石 器	横 刃 形 石 器	磨 石 ・ 凹 石	石 皿	磨 製 石 斧	石 鏃	ビ エ ス エ ス キ ー ユ	二 次 加 工 の あ る 剥 片	石 鏃 の 未 整 品	砥 石	石 槌	原 石
	中 期	後 期	晩 期	晩 期														
1	○	○	○		12								3	8		1	1	
2	○	○			5									6				
3					1													2
4	○	○			12	1				2	1			8	2		3	
5			●	○	171		8		1	5	24	13	117	31	3	24	2	
6								1										
7		○	○		9							2		22	2	1	2	
8			●	●	82	3	8		1	1	6		29	13	3	5	6	
9			○	○	11			1			1	3		6	1		1	1
10																		
11			○	○								1	1	3			7	
12																		
13			●	○	13							3	1	19	5	1	8	6
14			○	●	14	1		4	2			7		32	2		3	1
15			●	●	40		1	3	6		2	4	2	54	10	3	9	
16				○				1	3									
17			○		5							1		9				
18			●	●	19				3		2	8	1	19	6	4	8	
19			○		10			1			2	1		7			2	
20				●	10			3	5		2	2	1	13	2		2	1
21				○	28		3	3	3			3		21	3			
22		○	○	○	1									2				
23		○	○		4		1	2						4	1	1	1	
24		○	○	○	9		1	3	1			2		9				
25																		
26			○	○	18				2		1	3		8	1		6	1
27			○		2								2					
28			○	○	11		1						1	4				
29		○	○	○	9			1	3		1	1		12	2	1	1	
表採・不明					8										1			

遺構内の出土遺物

遺構名	出土遺物				石 鏃	石 斧	打 製 石 器	横 刃 形 石 器	磨 石 ・ 凹 石	石 皿	磨 製 石 斧	石 鏃	ビ エ ス エ ス キ ー ユ	二 次 加 工 の あ る 剥 片	石 鏃 の 未 整 品	砥 石	石 槌	原 石
	中 期	後 期	晩 期	晩 期														
1号 住居址	○	○			22		4							2				11
2号 "		○	●		39	2		2	2		2	9	3	31	4	1	11	4
3号 "	○	○																
2号 石棺墓	○	○			1													
3号 "		○																
5号 "		○	○		1													
6号 "			○		1													
7号 "		○	○		3													
8号 "		○			2													
1号 土壌墓				○														
5号 "																		

土器類●は多量出土を示す。

注) 2~4・6~11号土壌墓(SK)、1・4号石棺墓(SZ)は、土器

石 剣 石 棒	玉 類	骨 角 製 品	土 偶	土 製 耳 飾	土 製 門 板	そ の 他 土 製 品	備 考	台 帳 番 号 (注記)
								1-1-2
								2
				1				3
					1			4 S、4 M、4 N、4
2	1	8	3	34	5			5 S-1~5I、5 MS-1~4、5 N-1~24
			1					6-1-2
			1					7-1~6
1		5			4	4	雄銘石1	8-1~2I
1		2		3	1		土師器出土	9-1~14
								10
				2			土師器出土	11-1~14
								12
1				17		i		13-1~2I
				7	13	2	甕石1	14-1~4I
4				29	10	1		15-1~12、15A-1~7、15B-1~4、15C-1~4、15D-1~3、15E-1~3、15F・G、15H-1~14、15I-1~3
				6	19			16-1~11、16A-1~11、16B・C
			1		3		弥生土器出土	17
1				11	6		甕石1	18・18A-G
1					9		土師器出土	19-1~5
2			1	4	9			20-1~2I
3	1				8	1		21-1~11、21A-1~16
								22A-1~3、22A-1~4
								23B-1~3、23C-1・2
2				10	4	1		24A-1・2、24B-1~3、24C-1~5、24D-1~4、24E
								25
			2	9				26-1~2I
								27-1・2
				2	2			28-1~12
18				1	6	1		29-1~15
				1	2			

石 剣 ・ 石 棒	玉 類	骨 角 製 品	土 偶	土 製 耳 飾	土 製 門 板	そ の 他 土 製 品	備 考	台 帳 番 号 (注記)
								S B 1-1~6
				1	4	2		S B 2-1~53
								S B 3
								S Z 2
				1				S Z 3
				2				S Z 5
				1				S Z 6-1~4
								S Z 7-1・2
								S Z 8-1・2
								S K 1
		4						S K 5-1・2
				1			耳飾は椎骨製	

以外の出土遺物がなため掲載していない。

2 遺跡の広がりりと内容

調査で統一的に使用した土層序は次のとおりである。

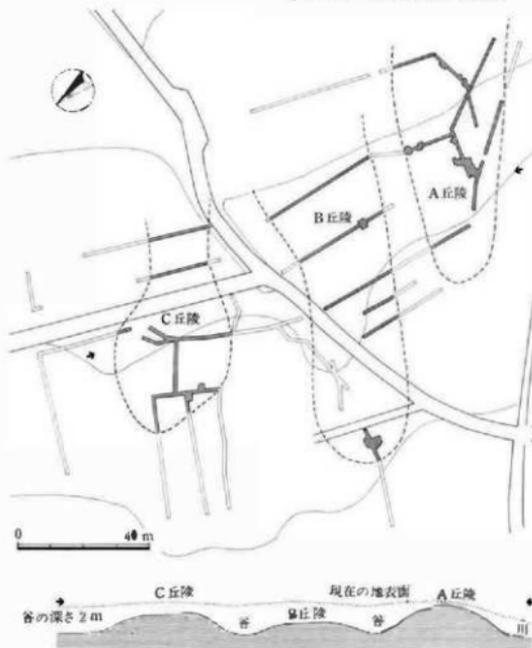
- 第1層 表土耕作土層
- 第2層 耕作土下の黒褐色土層、砂礫を多く包含する
- 第3層 黄褐色の強い砂礫層、部分的にシルト質
- 第4層 黒色土層、砂礫を含む
- 第5層 黄褐色の砂礫層、遺物を含まない基盤層

このうち、遺物包含層として認定されるのが第3・4土層である。第3層下部から第4層上部にかけて縄文晩期米式土器が出土し、第4層からは縄文中期～晩期の土器が出土する。第3層の形成は縄文時代晩期末葉に近い時期と推定されるが、注意されるのは第4層の地表からの深さとそれに比例した第3層の厚さとの関係である。調査地南側では第4層が浅い位置にあり第3層の堆積はほとんど認められない。逆に、第4層が深い位置に有ればあるほど第3層の

堆積が厚くなり、同じトレンチであっても1m以内で第4層に至る部分と1mをはるかに越える深さでもそれに至らない部分とが出てくる。このことから現在見られる緩やかな傾斜をもった扇状地平坦面の形成が、第3層の急激な堆積による結果であり、それ以前の地形は第4層の深さが示す起伏に富んだものであった可能性が考えられる。この推定から発掘調査範囲(1.2mを越える深さで第4層に至らない場合には掘削を中止している)で確認された第4層の分布状況と、埋没地形の関係を図に示した。図中トレンチにスクリーンを張り込んだ部分が第4層の分布状況を示している。それを結んだ破線は埋没丘陵の外郭を表わすことになる。

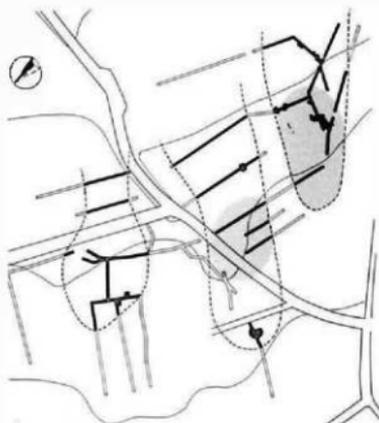


9号トレンチ集石道構の土層断面



遺物包含層の分布と縄文時代埋没地形の推定 (1:1,500)

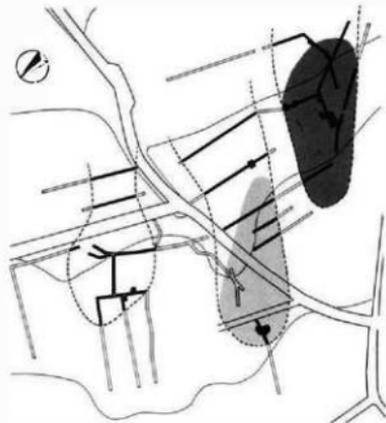
出土遺物の時代別分布と埋没丘陵との関係から、宮崎道跡の変遷を想定してみた。



1 縄文中期末～後期初頃

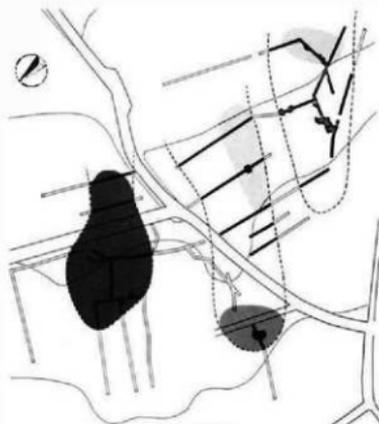
A・B丘陵の先端部に遺物の分布がみられ、居住域であったことが分かる。特に3つの丘陵中一番高い位置のA丘陵からの遺物の出土が多い。

A丘陵の1号住居は該期の所産。



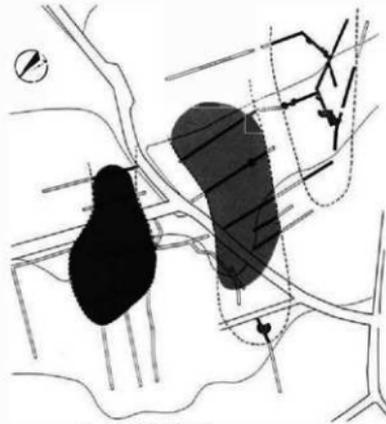
2 縄文後期

遺物の分布状況は1と重なるが、その範囲は広がる傾向にある。A丘陵においては石棺墓が構築されはじめ、居住域と墓域とが近接していた様子が認められる。



3 縄文晩期前半

遺物量は飛躍的に多くなりC丘陵に集中的分布をみせる。B丘陵では先端部から2号住居が検出されている。一番高いA丘陵が居住域から外れた点か99微的で、墓域として利用が考えられる。



4 縄文晩期後半

B・C丘陵に遺物が集中する。最も低いB丘陵は晩期も終りに近く居住域となっている。C丘陵の先端部に土嚢墓が構築されるほか、A丘陵も墓域に利用されたらしい。

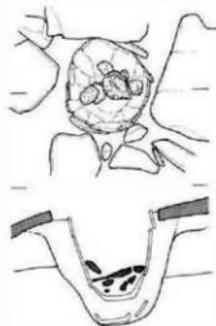
IV 遺 構

1 住 居 址

〈1号住居址〉

1号トレンチにおいて発見され、燧石住居址の一部と考えられる。東側は1号石棺墓によって切り取られている。また、地表からの深さが20数cmと浅い位置に存在するため、農作業などにより燧石が除去されたらしく、わずかに1m四方の燧石を残すのみとなり、全体の形状・規模等は不明である。埋嚢は、やや浮いた状態の一枚の燧石を蓋にして埋め込まれ、埋嚢の下には別の土器底部が存在していた。新しい埋嚢に付け替える際、古いものの底部を取り忘れたものかもしれない。埋嚢の中には、黒曜石の塊が10点収納されていた。黒曜石の下には頁岩の砕片が堆積しており、石器製作との関連が予想される。縄文時代中期末の所産と考えられる。

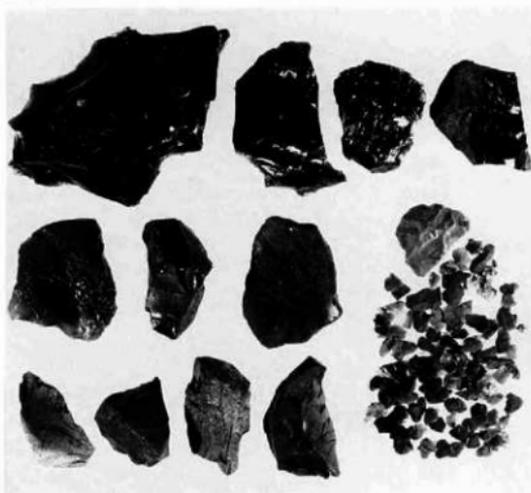
保護措置 記録保存



埋嚢部分の実測図 (1:15)

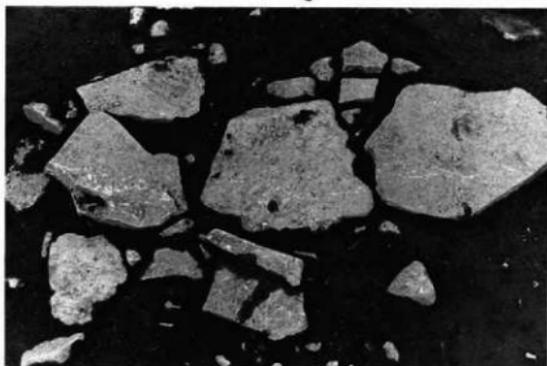


1号住居址実測図 (1:30)

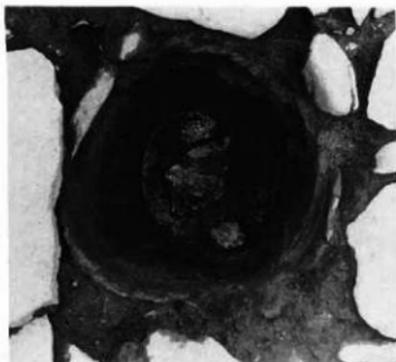


埋嚢に収納された黒曜石（石器の原料）と底にたまっていた砕片（石器を作るときに出る細かい石の屑）

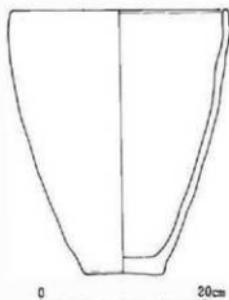
住居跡より一段低く見えるのが1号石棺墓。石棺墓を作る際、既に地中に埋まっていた住居跡を掘り込んでいる。住居の床に敷かれていた石しいい、抜き取られた様子で、残っている敷石はわずかである。周辺には敷石と同様の扁平石が散見されたが、住居址の形状・規模は不明である。



扁平な大きな石の間に小さな石を詰め込み敷石を安定させている。敷石の一枚を割ると埋篋があらわれる。



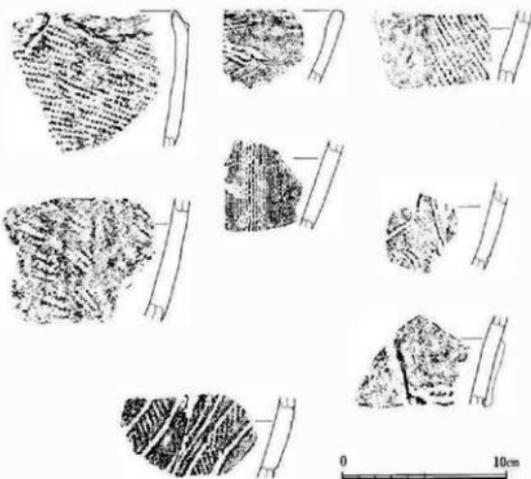
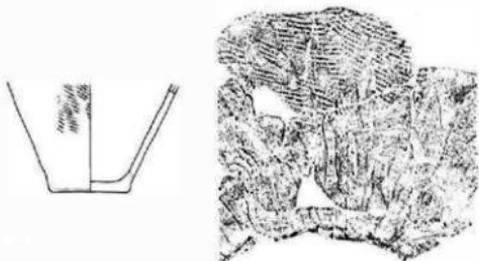
埋篋の底部近くに収納された状態の黒曜石塊。大きいものは200gをはかり自然面を残したままのものが多。



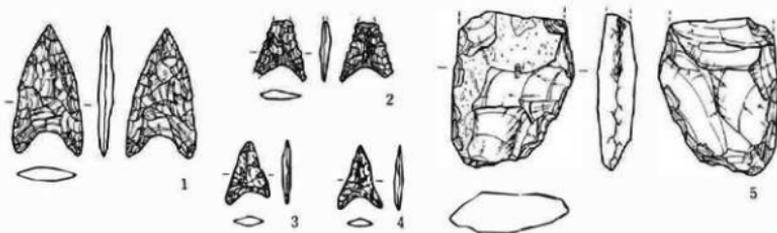
埋篋実測図 (1 : 6)

出土した埋篋は極めて脆弱な状態にある。無文で口縁部を一部に残すのみである。埋篋下の個体には細かい網文が施文されている。このほかの出土土器は破片で量も少ない。後期の土器も混じって見られる。

石器のうち石鏃(1)は埋篋の下に張り付いた状態で出土した。そのほかは散石の上面から検出された。石鏃は20点出土しており、有茎のものは1点もない。



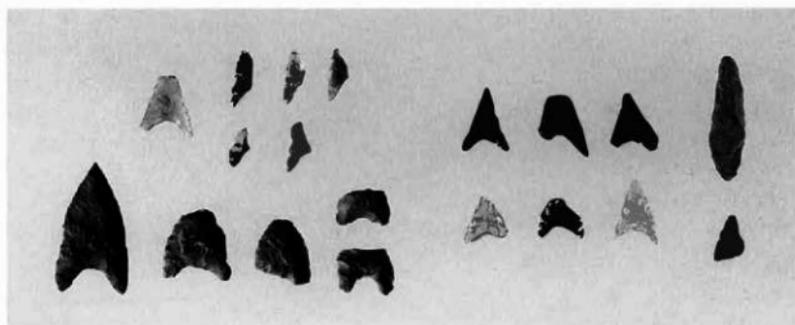
1号住居址出土土器拓影 (1 : 3)



1号住居址出土石器実測図 1~4 石鏃 (2 : 3)、5 打製石斧 (1 : 2)



罐 左が黒曜石を収納したもの、右がその下から発見のもの。いずれも煮炊きに用いた痕跡が認められる。



黒曜石製凹基盤には基部を磨った製品が5点ある。本遺跡では中期末の特徴的畜産としてとらえられる。

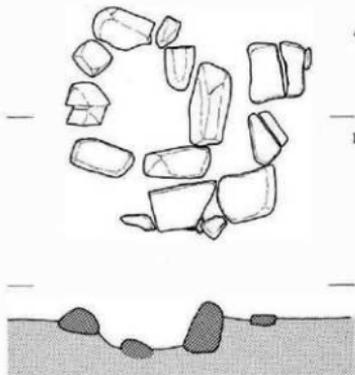


石鏃 (約 2 : 3)
打製石斧 (約 1 : 3)

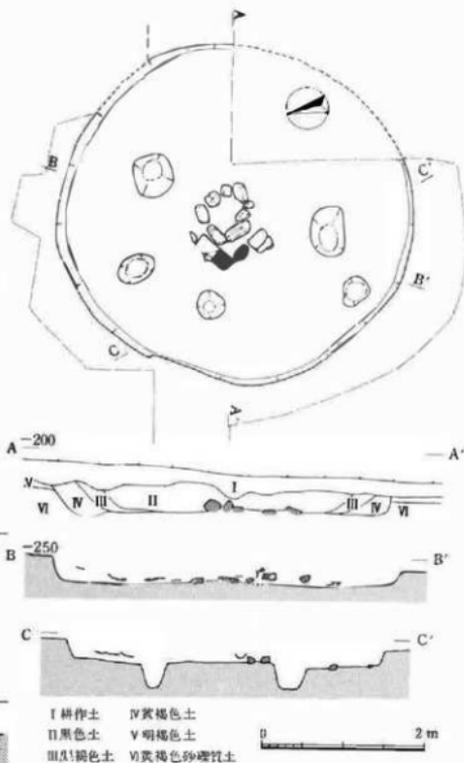
〈2号住居址〉

本遺跡ではほぼ全面を確認できた唯一の
 竪穴住居址であり、7号トレンチにおい
 て検出した。径4.3mほどの円形を呈し、
 中央に石囲炉を設置する。柱穴は5個確
 認されているが、炉を取り巻く4個が主
 柱穴であろう。未調査部分を念めて想定
 すると5～6個の配列になる。遺物の出
 土量は極めて多く、土器と石器に混じっ
 て、炉の中から炭化したクルミの出土も
 見ている。また炉の周辺には石器製作の
 痕跡を示す多量の碎片が集積していた。
 縄文時代晩期前半の所産。

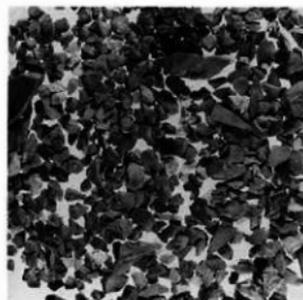
保護措置 一部破壊、埋め戻し保存



炉部分 (1:20)



2号住居址実測図 (1:60)



炉のまわりに集積していた頁岩碎片



炉の中から出土した炭化クルミ(現代のものよりかなり小さい)。

住居址の掘り込みは検出面から20~30cmの深さをはかる。覆土の下部には自然礫とともに多量の土器が投げ込まれたような状態で発見された。特に住居址北側に集中している。これに対して、住居址床面からの遺物出土は少ない。

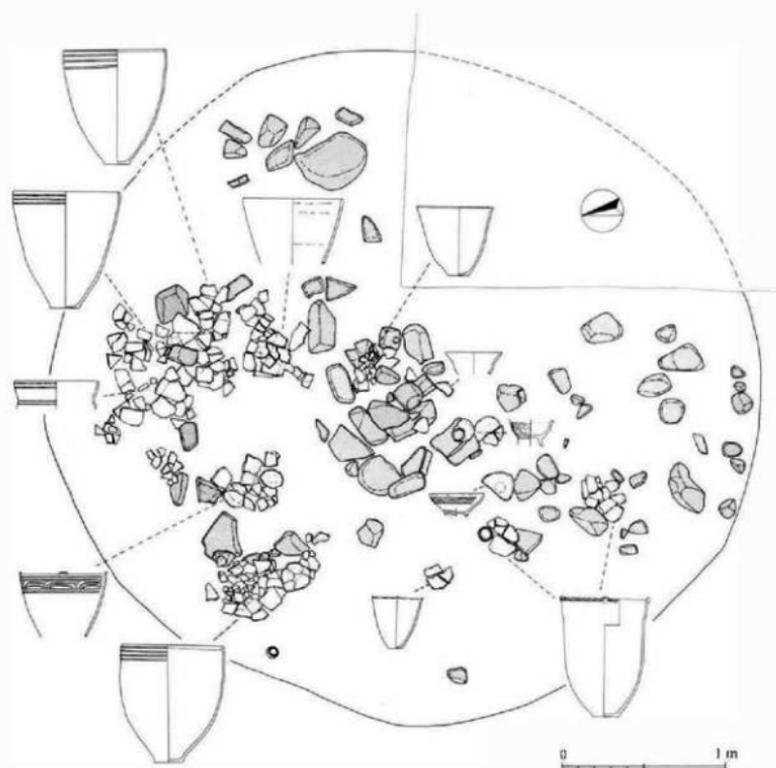


自然礫及び遺物を取り上げたあとの住居址。床面は軟弱で基礎の自然層中の礫が露を出している。掘り込まれている土層が砂礫質であることも影響していると思われる。

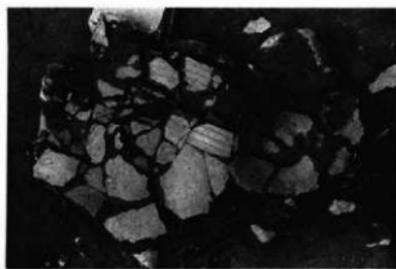


石囲炉はそれほど丁寧には組まれていない。炉の周りには扁平な石をし字形に敷いており、壺石住居の名残りを思わせる。炉の内部には炭化物を多く含んだ黒色土が充填しており、水洗いしたところクシミのかけらが検出された。この他にも種子等が混じっている可能性が高く、正式な鑑定に期待がかけられる。

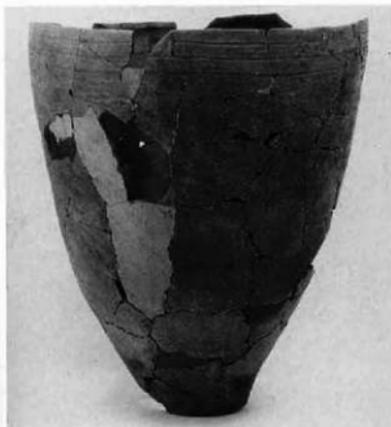




2号住居内の遺物出土状態 (1:30) スクリーン部分は石をあらわしている。



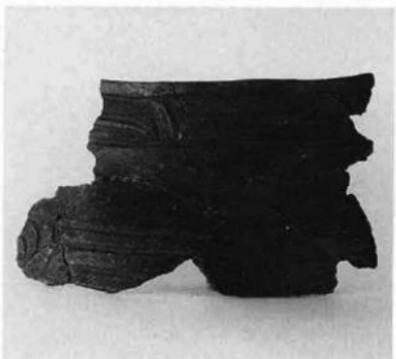
出土土器は床面から少し浮いた位置で完形に近いものがつぶれた状況にあたり、比較的形を残した大きな破片として単独で存在したり一定ではない。そのほとんどは住居址の埋没過程で投棄されたものといえる。

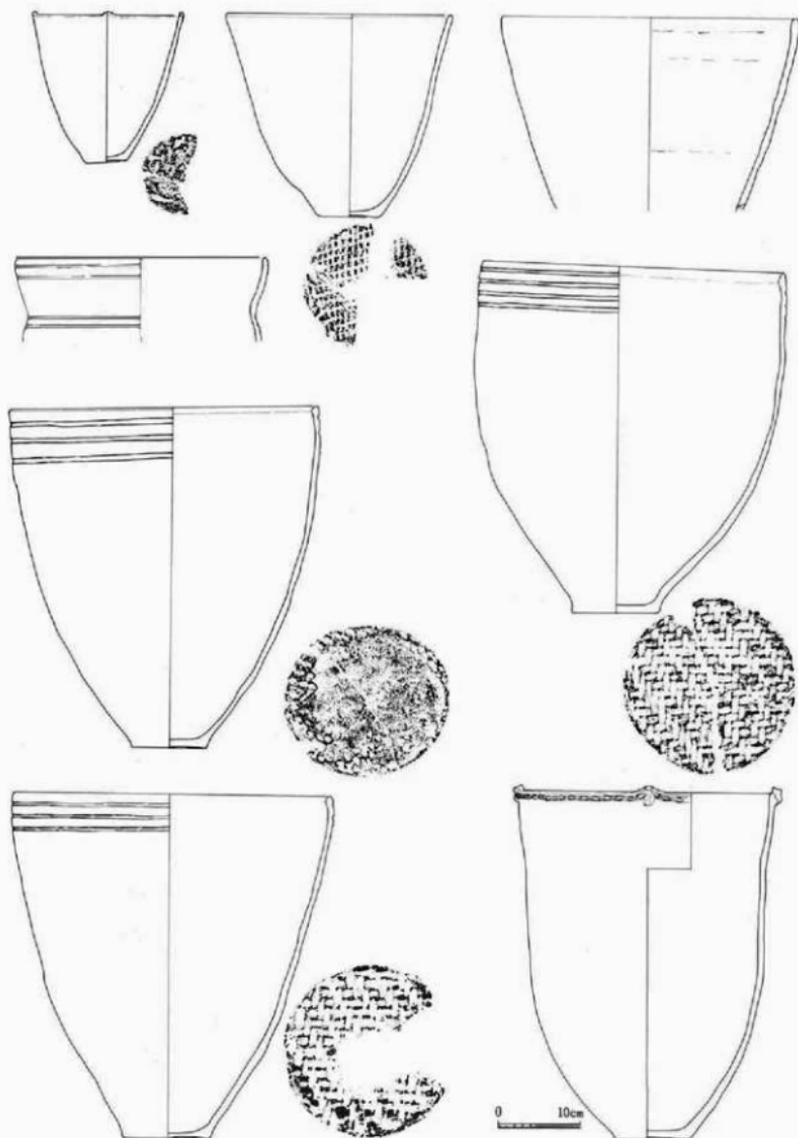




2号住居址出土精製土器実測図(1:6、拓影は1:3)

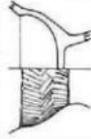
縄文や沈線で飾られる土器で、煮炊きに用いる深鉢の他に、食物を盛り付ける台付浅鉢や大皿などがある。



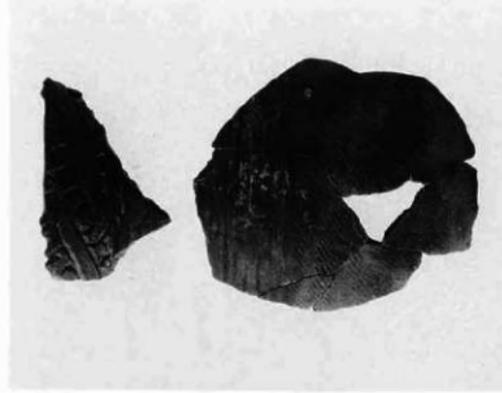


2号館居址出土粗製土器実測図（1：6、底部拓影は1：3）

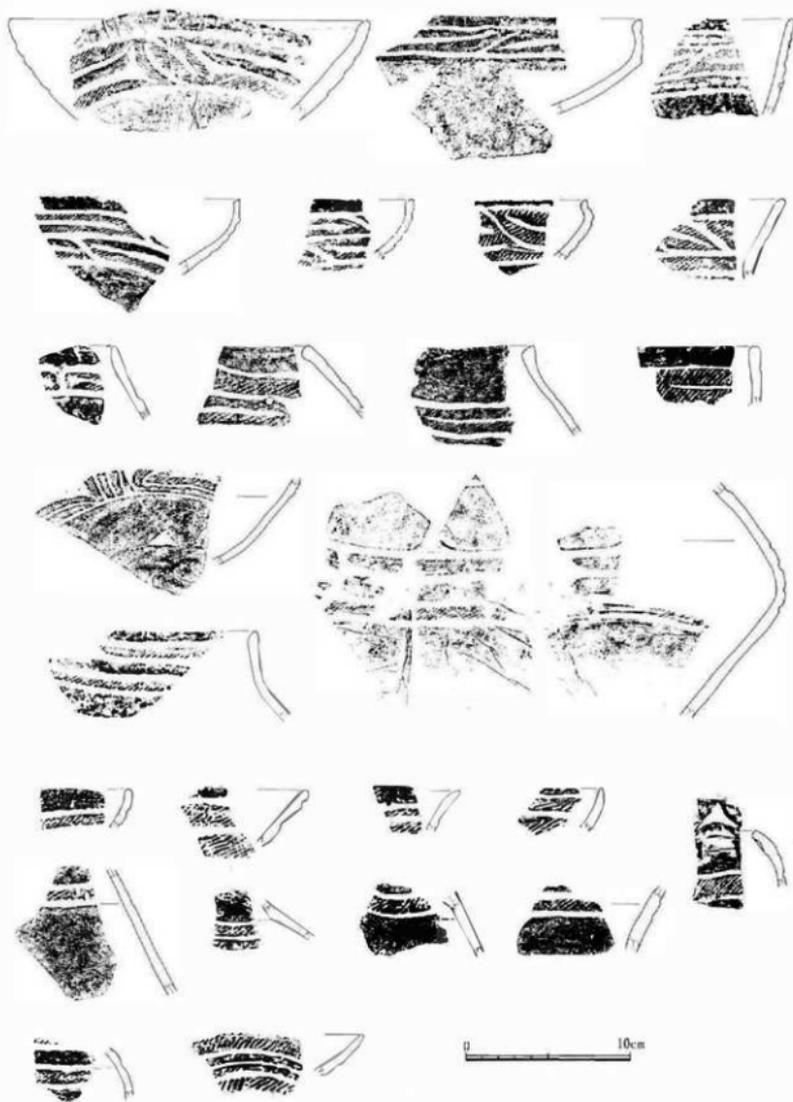
ほとんど装飾を持たず、専ら日常の煮炊きに用いられた土器。用途により大小が使い分けられる。



0 10cm

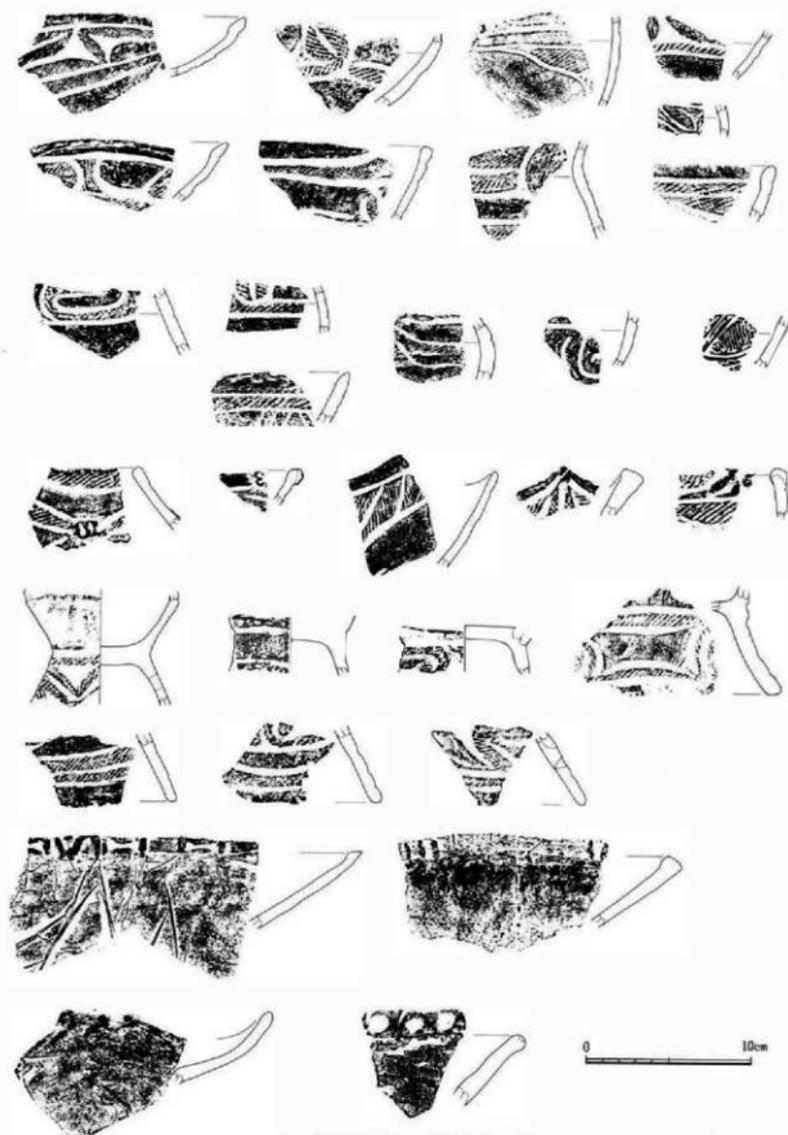


2号住居出土土器群断面図(1:6、拓影は1:3)
文様から縄文後期の土器に位置付けられるが、他の土器と同じ状態で出土した。



2号住居址出土精製土器拓影（1：3）

三叉文とその変形した文様により単純な横帯文が構成される。出土土器のなかで最も一般的に認められる。

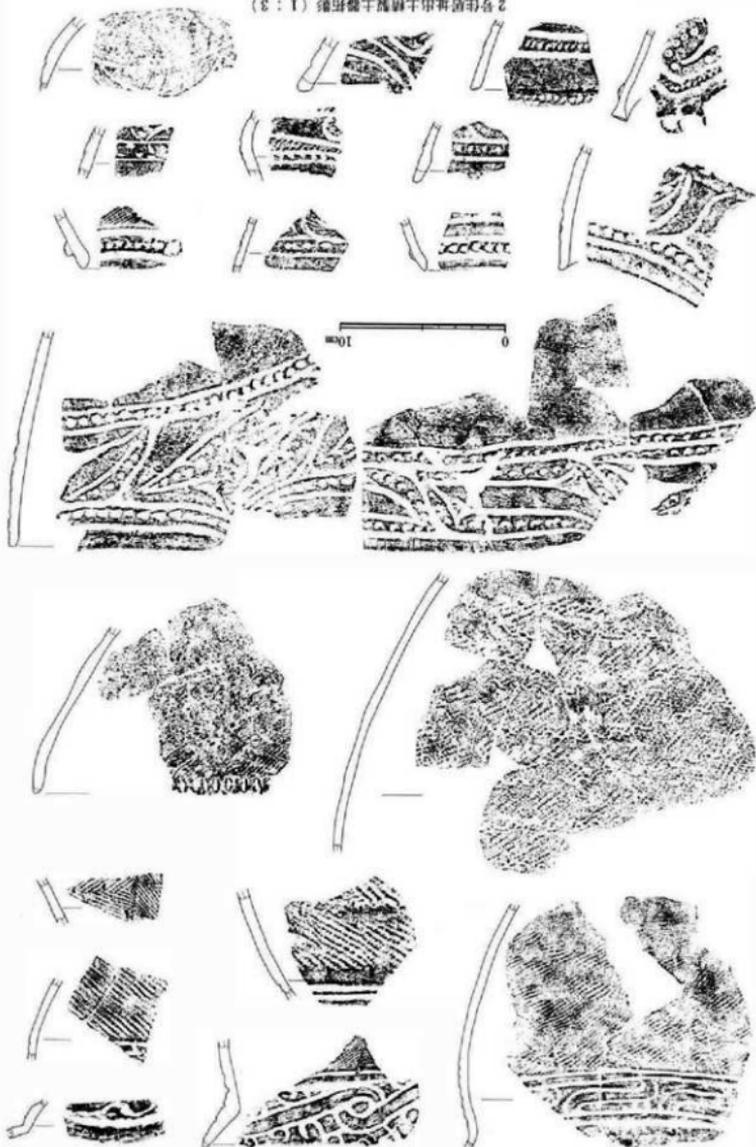


2号住居址出土精製土器拓影(1:3)

単純な横帯文とは異質の複雑な組み合わせ文様・浅鉢の脚台部分・口縁端部のみに文様をもつ浅鉢

大冨B-C式の半線状文・沈線と斜交による三叉文・凸帯と斜交や縦文の組み合わせ文、いずれも帯状の文様

2号住居址出土陶製土器拓影(1:3)

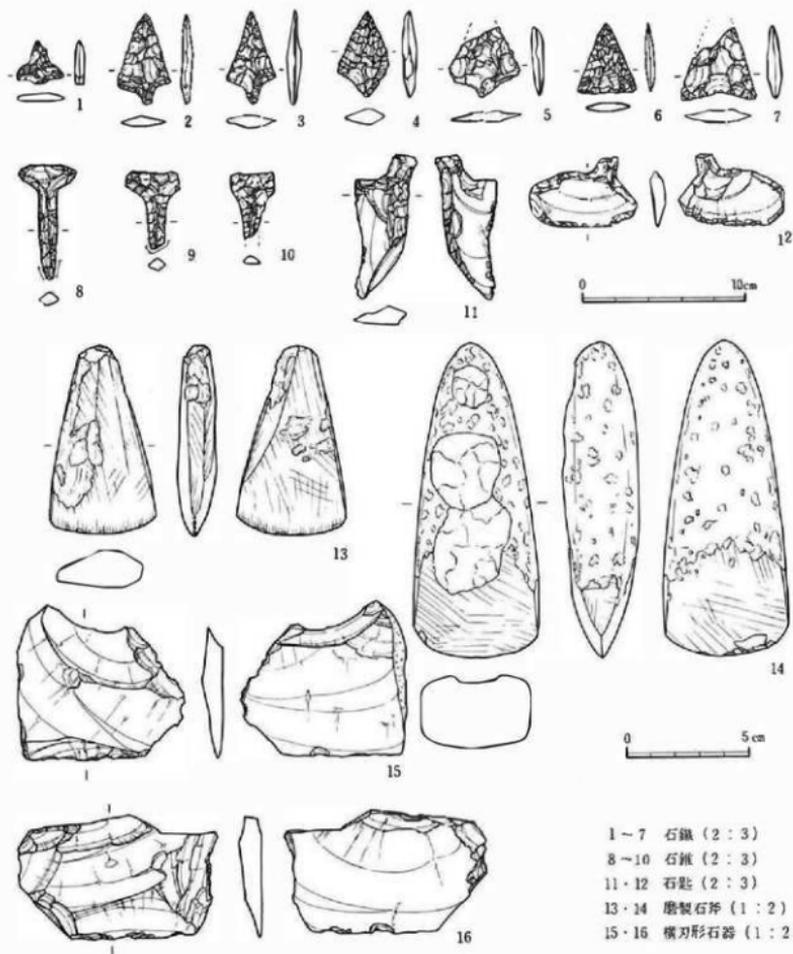




2号住居址出土粗製土器拓影(1:3)

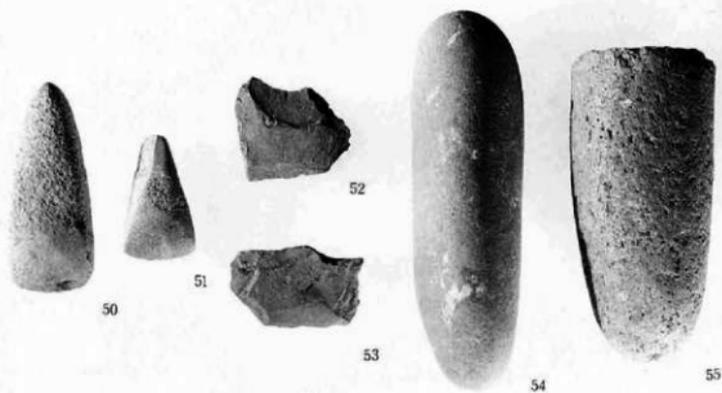
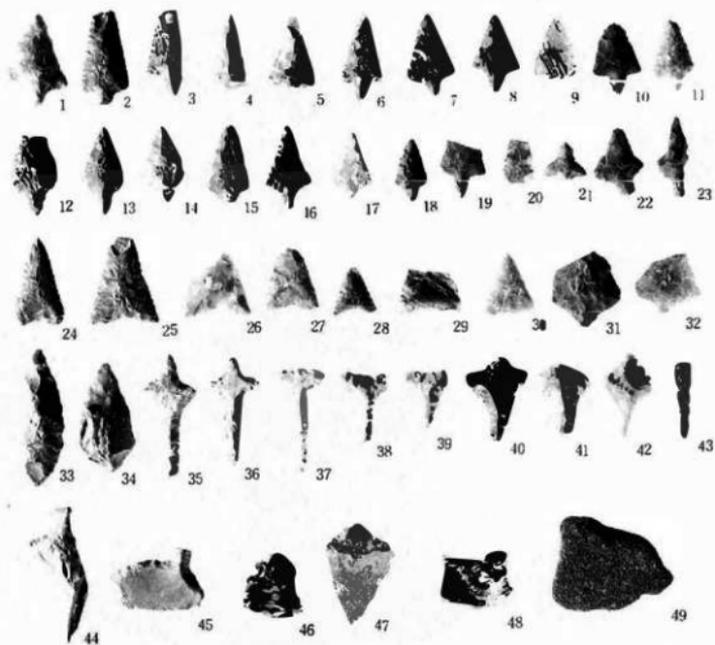
口縁部に沈線のみを施す深鉢は出土土器中最も個体数が多い。口縁部凸帯の深鉢は中南信地方の影響?

石器 石鏃は、有茎23点（1～23）、無茎11点（24～34）である。石材は頁岩とチャートが31点、黒曜石7点、安山岩3点である。35・38は下端部に摩耗痕が認められるチャートの石鏃である。44・45は頁岩の小形の石匙である。49は砂岩の砥石である。50・51は安山岩の磨製石斧で50は先端部のみ磨製で他は敲打による成形のみである。52・53は玄武岩の横刃形石器で刃部に刃こぼれがみられる。54・55は、端部に敲打痕をもつ砥石である。



- 1～7 石鏃（2：3）
- 8～10 石鏃（2：3）
- 11・12 石匙（2：3）
- 13・14 磨製石斧（1：2）
- 15・16 横刃形石器（1：2）

2号住居址出土石器実測図



2号住居址出土の石器（上段約2：3、下段約1：3）

〈3号住居址〉

22号トレンチで検出され、石棺墓群に近接した位置にある。全面を露呈することができなかったため、形状については断定し得ないが、敷石の形態から方形に近いものを推定する。敷石の東側には大小の礫が集積された状態を示すため、住居址ではなく祭祀的な遺構となる可能性も高い。敷石が大形であることからここでは住居址としておく。縄文時代後期の所産。

保護措置 埋め戻し保存



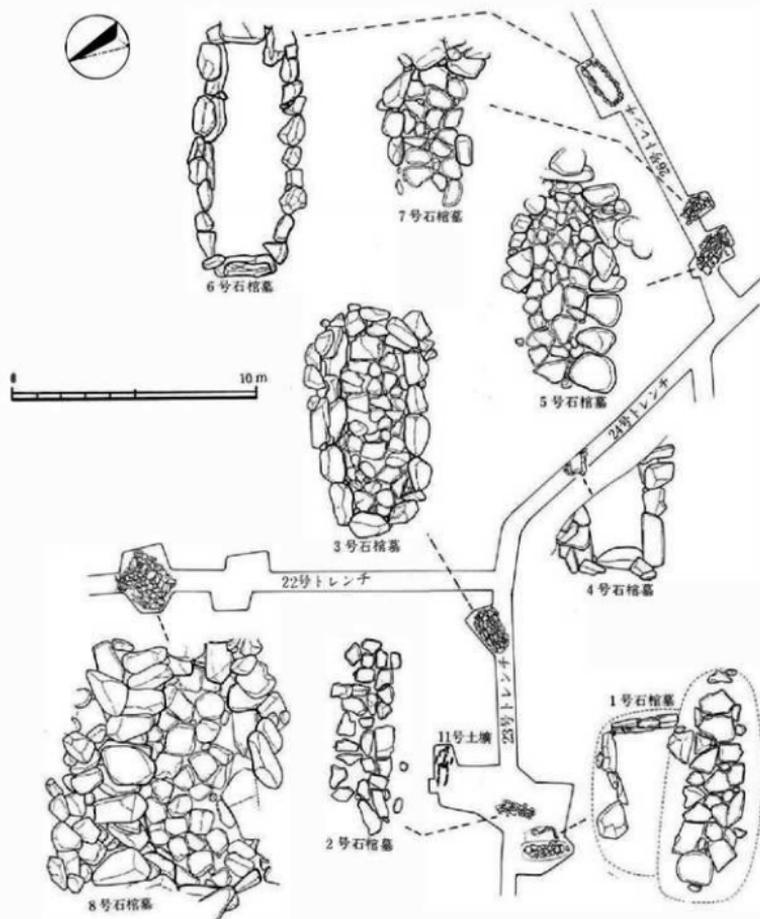
3号住居址出土土器拓影(1:3)



3号住居址実測図(1:30)

2 石 棺 墓

石棺墓の分布は遺跡南側のA丘陵上に限られる。1号石棺墓がAとB号の重複による以外それぞれ単独で検出された。石棺墓上面の埋没位置が表土から20~30cmと浅いため、耕作により石が抜き取られている例がほとんどであり、上部の構造には不明な点が多い。底面や側壁の構造から見ると、石棺墓としての型式差が抽出されるが、詳細は今後の検討に譲りたい。また、石棺墓に混じって11号土壇墓が検出されていることも注意される。



石棺墓分布図 (1:200)

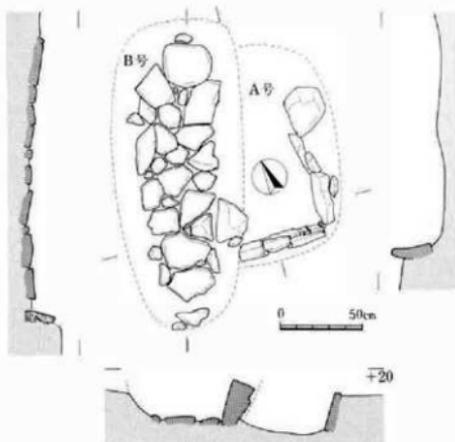
＜1号石棺墓＞

1次調査の際に1号住居址の一部と誤認されていたものであるが、2次調査において再調査しA・B号の2基が重複するものと認定された。1号住居址を掘り込んで構築され、さらにA号を切り込んでB号が構築される。2つの石棺の前後関係が明らかである。

保護措置 埋め戻し保存



1号石棺墓出土土器拓影(1:3)



1号石棺墓実測図(1:20)



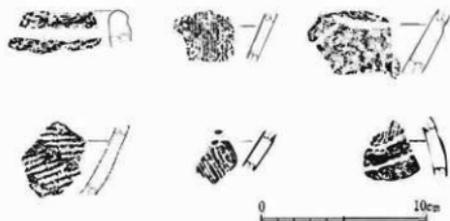
A号の覆土には石が含まれていないがB号の上にはかなりの礫が堆積している。

A号は板状の石を方形に組んで側壁とするのに対して、B号は扁平な川原石を敷石として側壁は楕円形の川原石を縦に並べた構造をとる。ただし側壁のほとんどは失われた状態にある。

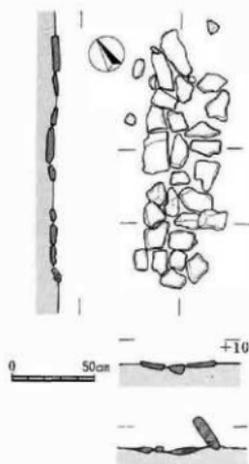
〈2号石棺墓〉

底面に扁平な川原石を用いて敷石を施している。かろうじて1個の立石が残存し、縦長の川原石を立て並べて側壁としたことを推測させる。敷石の形状から頭部に当たる部分を幅広く設計していることが分かる。

保護措置 記録保存 敷石取り上げ



2号石棺墓敷石下出土土器拓影 (1:3)



2号石棺墓矢測図 (1:30)

2号石棺墓は1号の東側に接近している。石棺墓のなかでも最も浅い位置にあり、敷石面まで地表下20cmの深さをはかるに過ぎない。石棺墓が地下に掘り込まれて構築されている以上、現在の地表面より上に縄文時代の地表面を考えないと理屈に合わない。この地域が当時小高い丘であり、今日まで土砂の堆積よりも流出の方が活発であった状況を予想させる。

敷石の下から出土した土器片には縄文中期のものに混じって縄文後期の所産と思われるものが認められる。石棺墓の構築年代を判定する重要な所見となる。



〈3号石棺墓〉

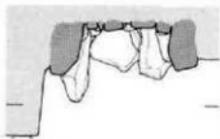
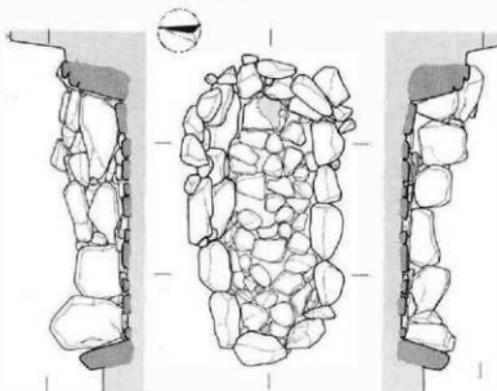
石棺墓群で最も旧態を残している遺構で、地表下20cmから検出された。大きな自然礫の長軸を上下にして墓壁に据え、その底面にくまなく小礫を配置し敷石とする。

保護措置 埋め戻し保存



0 10cm

3号石棺墓出土土器拓影 (1:3)



3号石棺墓実測図 (1:30)



からうじて遺存した人骨頭部に挿して土製耳飾が出土した。表には渦巻文様、裏は無文、重さは78g

手前が3号石棺墓で、
上方に2号石棺墓の敷石
が見える。

3号石棺墓の石組と上
部を覆う礫層がわかる。



規模は、長軸上端内法
1.72m・幅0.64m・深さ
0.46mになる。底面は長
軸1.50m・幅0.42mを測
る。頭位は東向き。

側壁の上端部の高さを
そろえるために、小さめ
の礫を積み重ねている様
子が頭部付近の東側で観
察される。

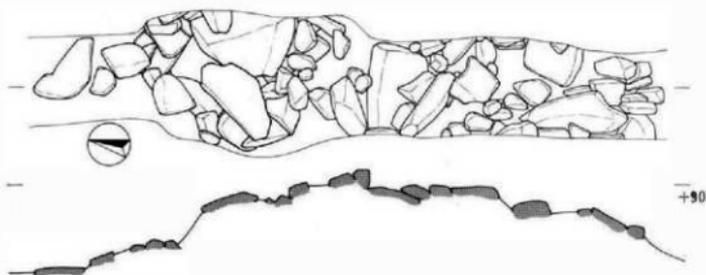


長軸東端から人骨が検
出され、その左耳近くに
土製耳飾があった。耳飾
の着装を示す珍しい例で
ある。また人骨は石棺と
ぎりぎりの位置にあり、
身長に応じて作られたも
のと思われる。さらに頭
部下の敷石のみに、他と
は異質の大きな板石が用
いられている点注意され
る。

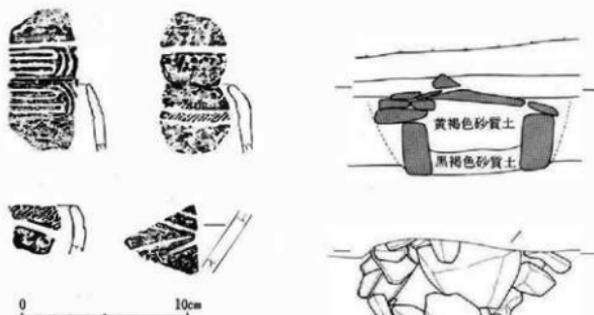


〈4号石棺墓〉

この石棺墓周辺には、大小の礫が幅約4mにわたって集中していた。当初単なる集石と考えていたが、周辺から石棺墓が発見されるに至り、これらをていねいに取り外したところ、大きな板状の角礫の下に石棺墓を発見した。この大きな角礫は石棺上部を覆う蓋石であることがわかった。石棺は方形の川原石を箱形に組んだもので、調査では北端付近を検出したにすぎない。底面の敷石は認められない。石棺内の埋土は2層に分離でき、上層は黄褐色砂質土、下層は黒褐色砂質土になる。礫の混入は少ない。保護措置 埋め戻し保存

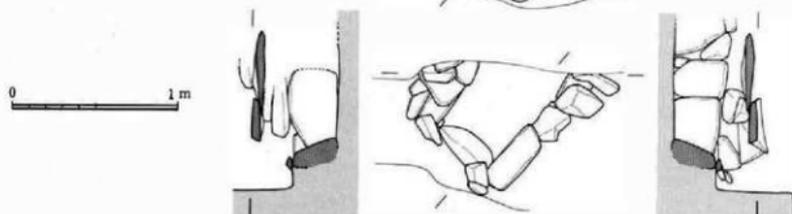


4号石棺墓上部の集石実測図(1:30)



0 10cm

4号石棺墓出土土器拓影(1:3)



4号石棺墓実測図(1:30)

4号石棺墓付近の集石

中央付近の2個の大きな角礫が蓋石となり、その下に石棺墓がある。



石棺と蓋石

蓋石がかけられたまま発見されたのはこの遺構だけである。蓋石は扁平で、石棺組石の上部に礫を小口積みした上に置かれる。



表土下22cmに蓋石があり、これを取り除くと深さ32cmの石棺が現われる。長軸の長さは不明であるが、幅内法上面で60cm、底面で54cmを測る。長軸方位は東西方向である。



〈5号石棺墓〉

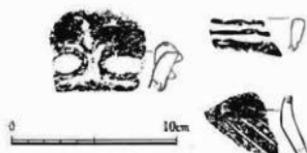
地表下20cmからの検出である。側壁がだいたい抜き取られているが扁平な川原石を立て並べた状態が観察される。その傾斜は北側ほど大きく、石材も大きくなる。敷石にも北側ほど大きな川原石を用いていることが観察される。石棺の覆土は黄褐色土で上部には礫の集石が認められる。

保護措置 埋め戻し保存

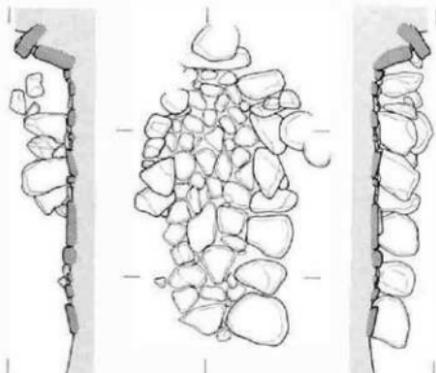
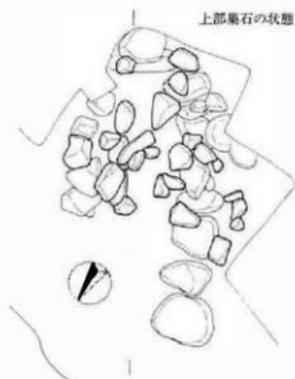
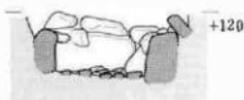


5号石棺墓と7号石棺墓の位置関係

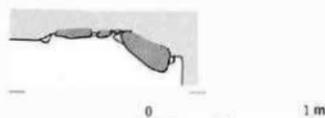
1m隔てた東側には7号石棺墓が存在する。長軸の方位が共に南北方向をとり、底面の深さも同じ程度である。その構築の際に、互いの存在を意識しながら作られた可能性が考えられ、近接した時期の所産といえよう。



5号石棺墓出土土器拓影(1:3)



5号石棺墓断面図



5号石棺墓実測図(1:30)

石棺墓上部の状態

覆土の上面に拳大以上の礫を包含している。周辺土層にこのような在り方が認められないことから、意識的な集石である可能性が考えられる。



側壁の北側は大きく傾斜してほとんど寝たような形となっている。南側のそれが直立に近いことを考えれば、土圧により押し潰された結果、傾斜したものと理解される。構築の際側壁の裏詰めが不足していたものか。



底面の敷石はいいいに敷き詰められている。底面はほぼ平坦であるが、南から北へ傾斜を有する。

長軸上面内法は不明であるが、幅は60cm・深さ20cm程になる。

敷石の形状はやや網が張った隅丸長方形を呈している。



〈6号石棺墓〉

地表下22cmのところ、石棺墓上面がある。石棺は綱張りの隅丸長方形を呈し、縦長の川原石を立て並べて側壁とし、一部には隙に据えつけた状態が見られる。底面には敷石が存在せず、規模が大きい点で他の遺構とは趣が異なる。石棺の覆土は2層に分けることができる。上層は黒色土で、拳大の礫が集石状態で確認された。下層は黒褐色土であり、礫をさほど包含していない。石棺墓上面での集石状況を示す好例である。

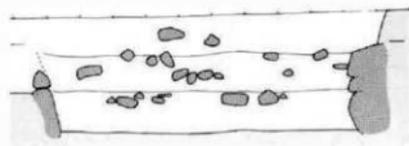
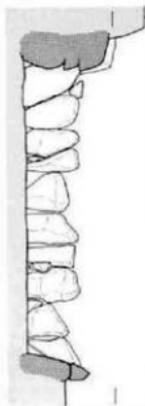
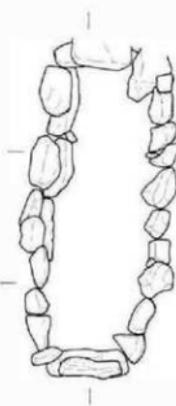
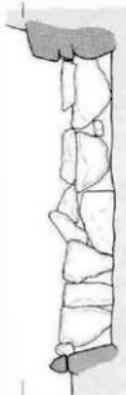
保護措置 埋め戻し保存



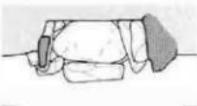
6号石棺墓上面の集石



上部集石の状態



6号石棺墓断面図



6号石棺墓実測図 (1:30)



石棺墓底面内法の規模は、長軸が1.72m・幅0.46mになる。

北側の側壁には、上端の高さをそろえるかのように、2段の積石が残る。東側の奥壁部分には3段の積石が認められる。この部分での壁高は50cm以上をはかり、構築された当初の石棺墓の深さを推定することができる。現在残されている側壁よりもかなり高くまで積石が施されたものであろう。また、上端部の高さをそろえる目的として、当然蓋石の架設が予想される。天井部があったと仮定した場合の上部集石との関係が問題となる。





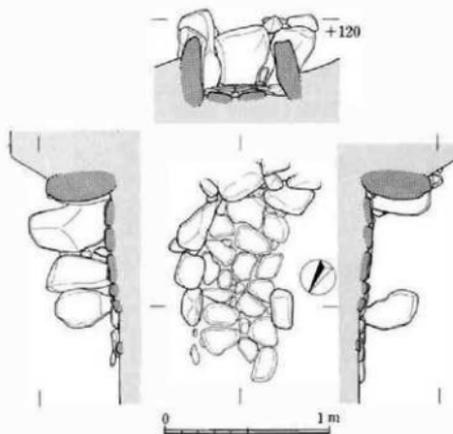
6号石棺墓出土土器拓影(1:3)

石棺墓群の覆土内に含まれた土器には縄文後期の所産と考えられるものが多い。6号石棺墓に限って縄文晩期前半の土器片が多い。図示した資料は底面近くから出土したものであり、石棺墓の年代とさほどの隔りはないものと判断される。ここでは石棺墓の一部が縄文晩期にも構築されていた可能性を指摘しておくたい。

〈7号石棺墓〉

5号石棺墓と6号石棺墓の中間に位置する。検出面が地表から20cmと浅い位置にあり、北側と西側の側壁が抜き取られ、調査時では5個の立石を確認したにすぎなかった。検出された底面の敷石は長さ1m足らずであり、他にくらべて小規模である。ただし北側が失われている可能性もあり検討を要する。

保護措置 埋め戻し保存



7号石棺墓実測図(1:30)



〈8号石棺墓〉

石棺墓群の北端に位置し、丘陵の縁辺部に構築されている。規模が大きく、側壁が控え積をもった小口積であることなど、石棺の構造に古墳の石室を思わせるものがあり、他の石棺墓と相違する点が多い。

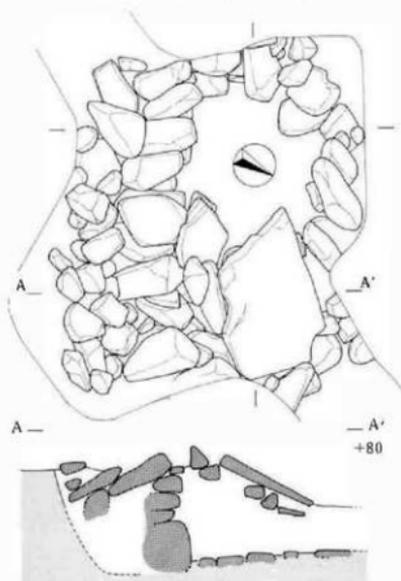
保護措置 埋め戻し保存



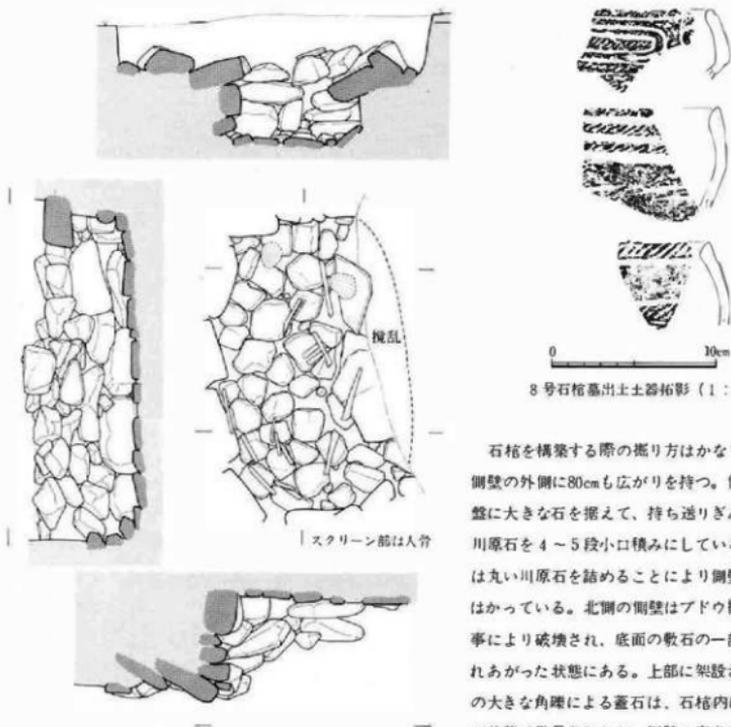
石棺墓内には蓋石が転落している。



蓋石を取り除くと敷石の床があらわれる。



8号石棺墓実測図(1:30)



8号石棺墓出土土器拓影(1:3)

石棺を構築する際の掘り方はかなり大きく、側壁の外側に80cmも広がりを持つ。側壁は、基盤に大きな石を据えて、持ち送りぎみに長細い川原石を4～5段小口積みしている。裏側には丸い川原石を詰めることにより側壁の安定をはかっている。北側の側壁はブドウ棚の埋設工事により破壊され、底面の敷石の一部分がめくれあがった状態にある。上部に架設された板状の大きな角礫による蓋石は、石棺内に落ち込んだ状態で発見されたが、側壁の高さはほぼ70cmと考えるとよい。

8号石棺墓実測図(1:30)

底面の敷石には扁平な川原石と板状の角礫とが用いられている。平面形は小判形を呈し、長さ1.8m・幅1mを測る。

出土した人骨から2遺体の埋葬が判明したが、その出土状態が不自然であり、埋葬後に人為的に動かしたような位置関係を示す。詳細については97頁を参照されたい。



8号石棺墓上面の状態

左側の板状の角礫が石棺内に落ち込んだ蓋石。上面の検出面は地表下約20cmである。

内部には黄褐色の砂質土が充填しており、底面付近がしだいに黒褐色土となる。



石棺内の土砂を取り除いた状態

側壁の小口積と裏積の状態がよく分かる。蓋石が掛かっていた部分は構築時の石棺側壁の状態をそのまま残していると判断される。蓋石を架設するためにその高さをそろえた様子が観察される。



側壁上部の小口積の石材はやや持ち過ぎみに張り出している。石棺蓋の幅を上部で狭くして蓋を架設しやすようにしたことも考えられる。

底面出土の人骨は、敷石からやや浮いた状態にあり、埋葬後の2次的な移動を物語る。一部のものは側壁際に片付けられた様な形を示す。



3 土 塚 墓

遺跡北側の15・16・18号トレンチから10基、南側の石棺墓群内に1基の計11基を検出確認した。北側の土塚墓群は、南北約9m、東西約15mの範囲にあり、遺物包含層のあり方等から更に範囲を推定するとC丘陵微高地全域にあるものと思われる。東西・南北間ともにおよそ30mの規模になる。土塚墓の掘り込みは第III層の大小円礫を多く混入する黒褐色砂質土層からで、地山の黄褐色砂利層にまで及ぶものもある。ただ11号土塚墓においては、検出面が表土から20cmと浅かったため墓塚が確認できなかったが、埋葬人骨が同様のあり方を示していたのでこの名称を用いた。覆土は黒褐色砂質土を基本とし、拳大以上の礫は含まれない。墓塚の形状は隅丸長方形を呈し、埋葬人骨の身長に合わせて掘られている。残存人骨から伸展葬の埋納方法であることがうかがわれる。人骨の検出は単体であるのに対し、3～6号は重複し合う。ここでは番号の多いほど新しい。副・着装品をみると1号の胸部から筒形土器と骨角器、5号からは鯨の椎骨と思われる赤色塗彩された耳飾が右耳部より出土し、3号には抱石が認められた。また鹿骨の半出も注意されよう。尚、これらは縄文時代晩期後半に比定されよう。

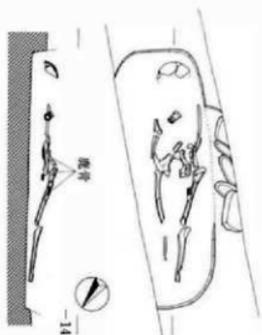


土塚墓分布図

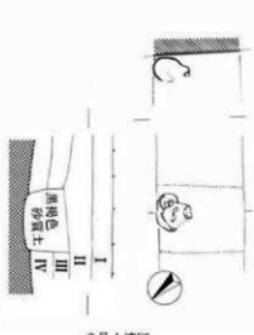
土塚墓一覽表

東西・南北の()は推定値、深さ()は検出数値

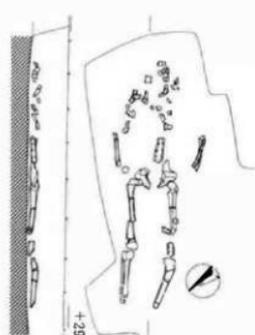
番号	規模(東西×南北×深さcm)	頭部方位	着・副葬品等	その他
1号	165 × (60) × (9)	N-143°-E	筒形土器	鹿骨・骨角器
2号	? × 62 × 28	N-40°-E		
3号	(150) × 74 × 21	N-92°-E	抱石	鹿骨
4号	? × (50) × (6)	(N-100°-E)		
5号	? × (55) × 25	N-127°-E	魚骨製耳飾	抜歯
6号	? × 60 × 20	5号と同方位か		
7号	85 × ? × 20	N-32°-E		小ピット
8号	? × ? × (4)	N-210°-E		鹿骨
9号	(50) × ? × 18	(N-164°-E)		鹿骨
10号	? × ? × ?	?		
11号	? × ? × 表土26cm	N-116°-E		



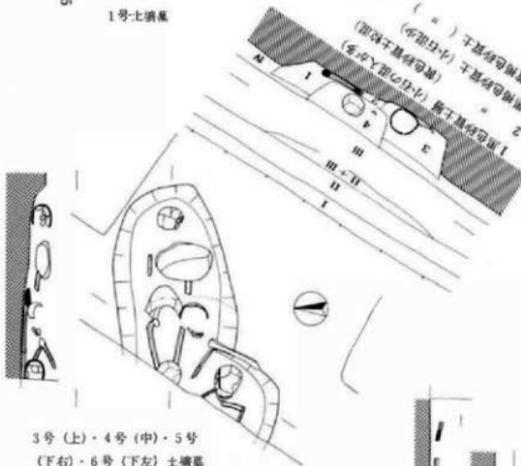
1号土坑墓



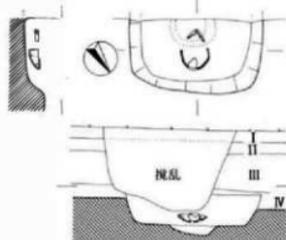
2号土坑墓



11号土坑墓



3号(上)·4号(中)·5号(下右)·6号(下左)土坑墓



7号土坑墓 土坑墓实测图(1:30)



9号土坑墓



8号(右)·10号(左)土坑墓

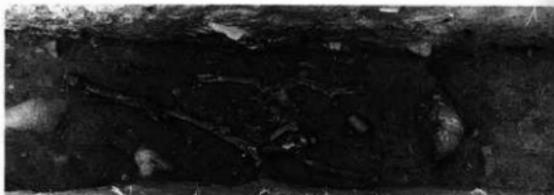


- 土層 I 表土(耕作土)
- II 黑褐色砂質土層(閃礫含)
- III 黑色砂質土層(大小閃礫多含)
- IV * 粘質土層()

1~11号土坑墓实测图(1:30)

1号土壙墓人骨

地表下50cmから検出された。残存人骨長は140cmである。西壁下に楕円扁平石3個を伴う集石がある。土壙墓より古い遺構である。



1号土壙墓人骨部分

左大腿部と骨盤付近に鹿骨が密集している。骨盤中央に骨針があり、胸部に筒形土器が横転していた。



3号土壙墓 (左)

胸部に長軸35cm程の円礎を抱かしている。



4号土壙墓 (中)

5号土壙墓 (右上)

6号土壙墓 (右下)

3～6号土壙墓

5号土壙墓の頭部上と横の人骨は4号のものであろう。右耳下から鯨(?)の椎骨を利用した耳飾が出土した。またこの人骨には技能痕がある。



7号土墳墓(左)

顎から頸部にかけて意味不明の
径30cm・深さ5cm程の小ピ
ットがある。

3～6号土墳墓(上)

埋葬方向がそれぞれ異なる。



8号土墳墓人骨(下)

頭部付近のみ残存する。こ
の遺構にも鹿骨が密着して出
土している。

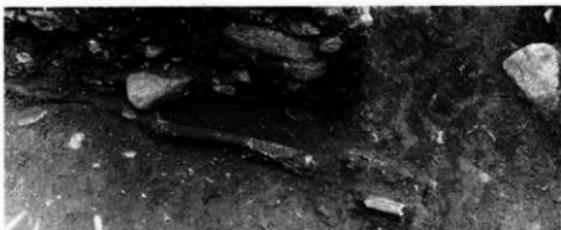
10号土墳墓人骨(上)

脛部のみを検出である。8
号とほぼ同じレベルにある。



9号土墳墓人骨

脛部のみを検出である。墓
壙幅は土層断面より約50cmと
推定される。写真の大雑は覆
土上面にある。



11号土墳墓人骨

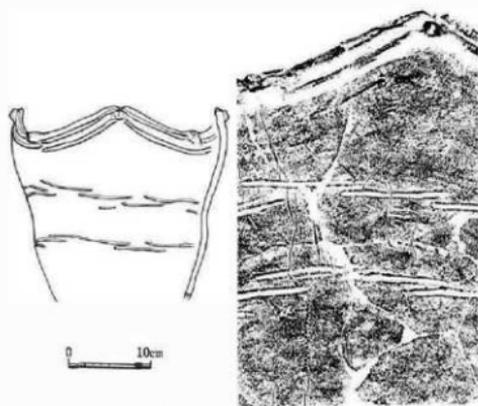
表土下20cmから検出された。



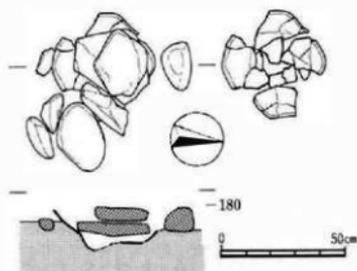
4 埋 甕

〈1号埋甕〉

5号トレンチの北端から発見された。掘り込みが何れとしないが埋甕として把握しておく。上面に2枚の扁平な川原石が蓋のように覆いかぶさり、埋甕はそれに押し潰された状態を示す。出土層位は第4層最下部である。埋甕は底部の抜けた深鉢であり、口縁部の一部が欠損するほかは完形である。内部からの出土遺物はない。



1号埋甕実測図（1：6、拓影1：3）



1号埋甕出土状況（1：20）

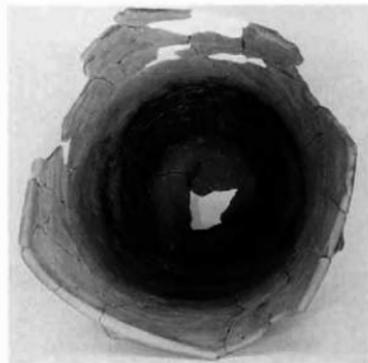


上部扁平石を取り除くと押し潰された状態が観察できる。

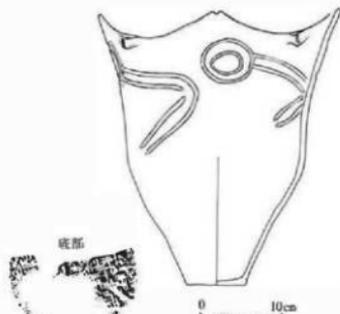


〈2号埋甕〉

14号トレン子の中央付近第3層から、完形のまま埋め込まれた状態で発見された。内部からの出土遺物は認められない。埋甕は波状口縁を呈する深鉢で同心円の沈線文が施される。出土層位としては縄文晩期末葉の時期を示すが、土器の型式的な検討と年代がこれに合致するか問題が残される。大方のご教示をお願いしたい。



内面には煮炊きに用いた痕跡が良好に残る。



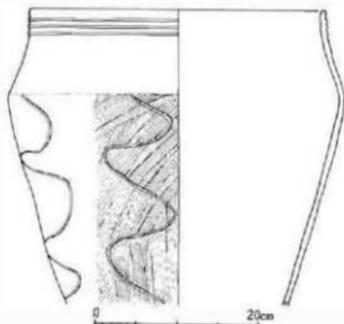
2号埋甕実測図（1：6、拓影は1：3）



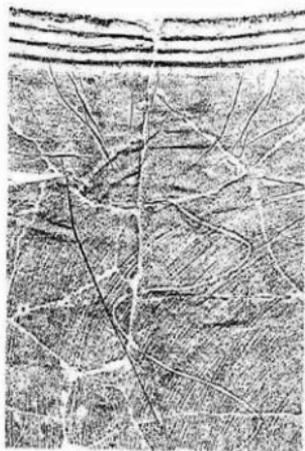
埋め込まれた掘り込みは判然としない。

〈3号埋壘〉

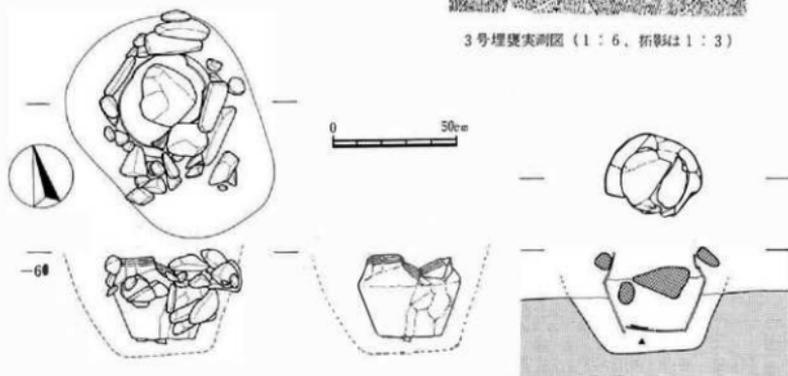
20号トレンチの南寄りから単独で発見された。第4層を掘り込んで埋め込まれており、楕円形の掘り込みの内部には第3層と思われる黄褐色土が混入していた。埋壘口縁部の回りを意識的に確で囲んだような状況が認められ、内部には20cm大の礫が転落している。埋壘は底部の抜けた大型品を用いており、底面に別の個体の土器破片を敷き詰めて底としている。内部から若干の骨片が検出され、底面の下から歯列だけを残した人骨下顎部分が確認された。人骨の詳細については99頁を参照されたい。



3号埋壘周辺 トレンチ拡張区



3号埋壘実測図 (1:6, 折断は1:3)



3号埋壘出土状態 (1:20) 上部には大小の礫が詰め込まれたような状態にある。三角印は南の出土位置。



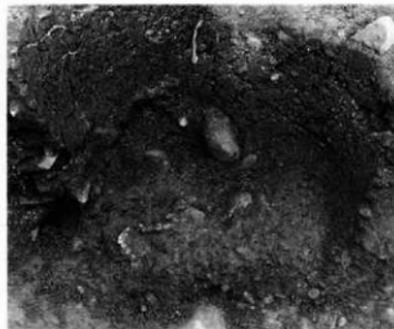
埋甕上部の状態と覆り込みの範囲。



埋甕の底には別の個体の土器片を敷いている。



埋甕覆り込みの半分を覆り下げた状態。



埋甕の下から検出された南列は下顎の軌跡。

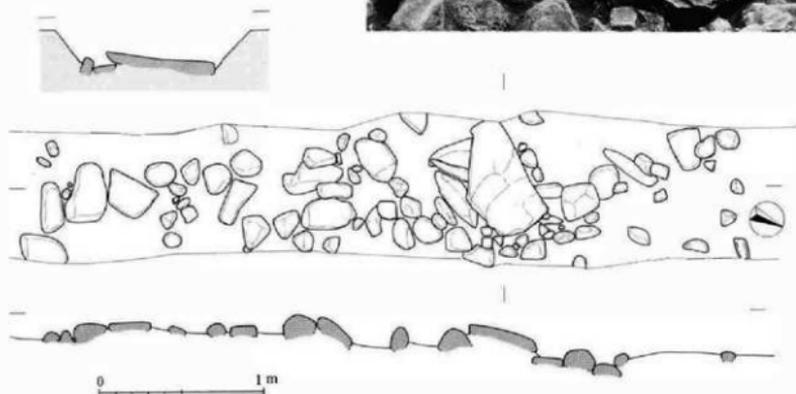


埋甕を半載した状態。大きな礫が落ち込んでいる。

5 その他の遺構

〈2号トレンチ集石〉

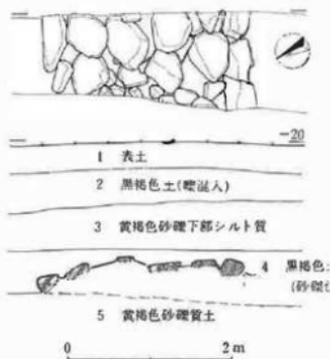
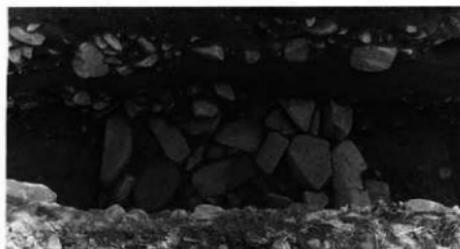
板状の角礫を混えて大小の礫が充填された状況を示している。4号石棺墓上部の集石と近似し、石棺墓に伴う可能性が高いが、残念ながら未確認のまま破壊してしまった。



2号トレンチ集石実測図(1:30) 1次調査の段階では、集石下部の調査が不十分であった。

〈8号トレンチ集石〉

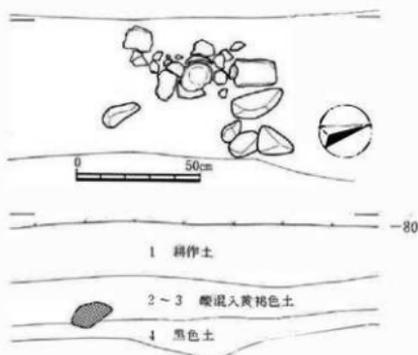
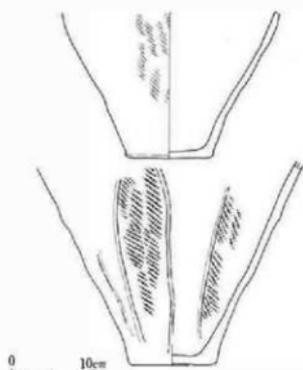
割縁は自然礫の長軸を縦に並べて範囲を限定し、中に大小の礫を敷き詰める。埋め戻し保存したため下部の状況は不明であるが、集石住居址の一部と推定される。あるいは石棺墓か。



8号トレンチ集石実測図(1:30)

〈4号トレンチ遺物集中区〉

第4層の最下部から大小の礫に混じて比較的原形を保ち出土した。縄文中期末の深鉢底部2点が重なるような形にあり、周辺にその破片が散らばった状態である。



4号トレンチ遺物集中出土状態 (1:20)

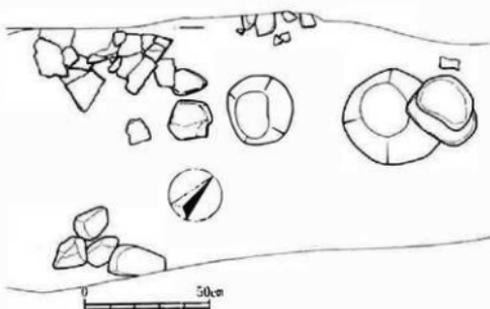
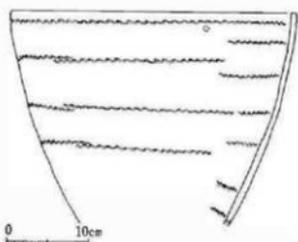


出土土器実測図 (1:6)



〈5号トレンチ遺物集中区〉

第4層中位から縄文晩期深鉢1個体が
分がつぶれた状態で出土した。下部に
は柱穴らしき小穴が2つ検出されたた
め、竪穴住居に伴う可能性も考えられ
る。土層の断面からはそれらしき破跡
は確認できなかった。他に別個体の土
器破片が若干出土している。



5号トレンチ遺物集中出土状態 (1:20)

- 1 横作土
- 2 黒褐色土砂礫含
- 3 黄褐色土大礫含
- 4 黒色土
- 5 黄褐色砂礫質土



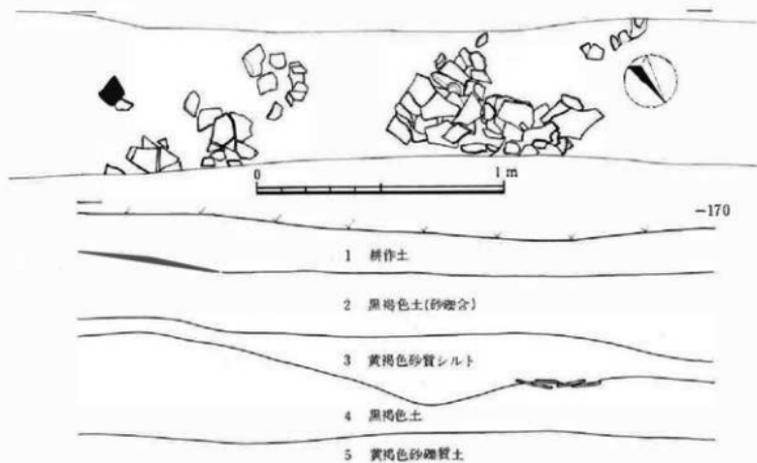
出土土器実測図 (1:6)

拓影 (1:3)

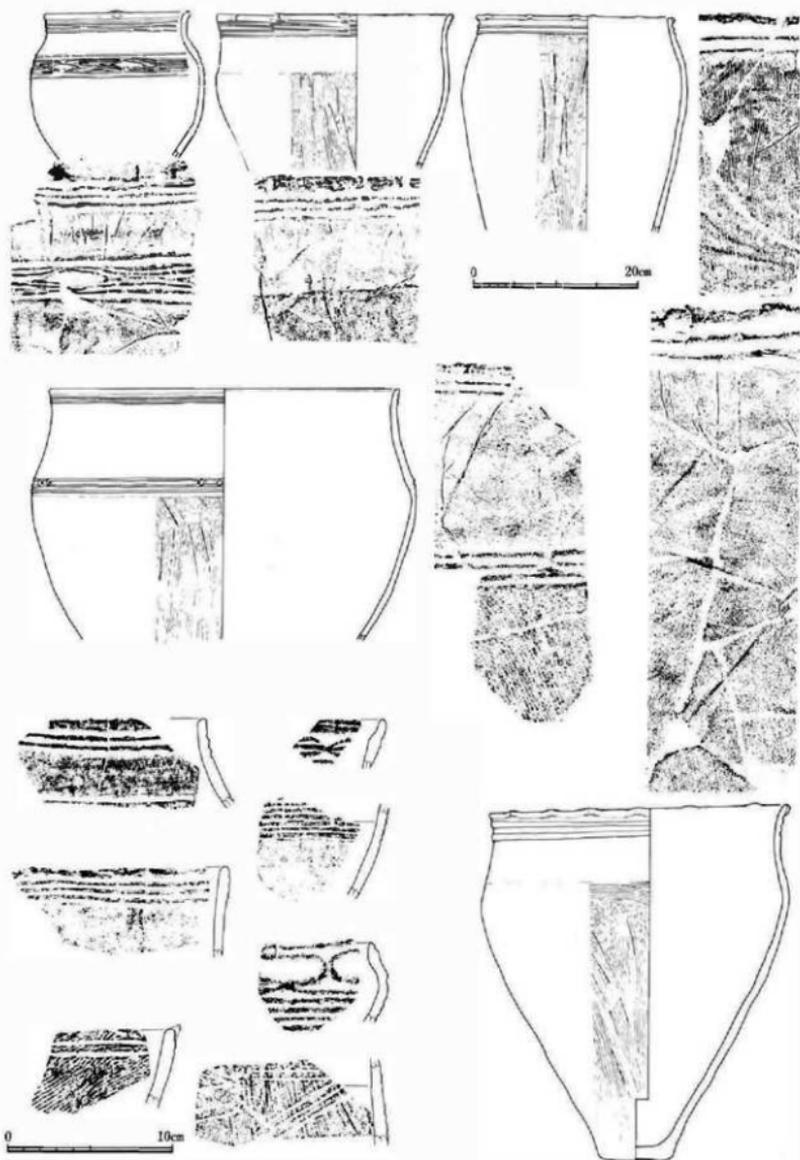


〈14号トレンチ遺物集中区〉

第3層下位の黄褐色砂質土層中に、つぶれた深鉢を中心としてかなりの量の土器片が散在していた。出土レベルはほぼ同一で、その平面分布は3.5mの範囲におさまる。遺構としての掘り込みは確認できなかったが、住居址床面に廃棄された土器とみてよいだろう。図示した土器のうち、復元が可能であったものは深鉢4個体分である。



14号トレンチ遺物集中出土状態(1:20)



14号トレンチ遺物集中区出土土器実測図(1:6、拓影は1:3)



V 遺 物

1 土 器



台帳番号 7-6 口径19cm 後期深鉢



台帳番号 15B-1~3 口径18.5cm 晚期深鉢



台帳番号 5M-50 口径20cm 晚期蓋



台帳番号 5N-10 口径8cm 晚期把手付浅鉢



台帳番号 15C-2 口径12cm 晚期蓋



台帳番号5M-20 口径22cm 晩期蓋?



台帳番号13-17 口径8cm 晩期台付鉢



台帳番号15A-C 口径32cm 晩期深鉢



台帳番号16-3 晩期深鉢



台帳番号15B-1~3 口径25cm 晩期深鉢



台帳番号13-6・19 口径19cm 晩期深鉢



台帐番号5 N-20 胴径20cm 晚期壶



台帐番号13-4 口径17cm 晚期深鉢



台帐番号13-25 口径19cm 晚期深鉢



台帐番号5 N-15・17 胴径11.5cm 晚期壶



台帐番号5 M-13 口径24cm 晚期深鉢



台帐番号29-13 口径28cm 晚期深鉢



台帳番号21A-1 高さ11cm 晩期滑円口縁浅鉢



台帳番号15-3 口径10.5cm 晩期浅鉢



台帳番号15I-1・2 口径17.5cm 晩期浅鉢



台帳番号21A-2 口径24cm 晩期深鉢



台帳番号15I-1 口径21.5cm 晩期浅鉢

注) 台帳番号については12・13頁表を参照
口径・胴径は一部を除き復元推定値

2 石 器

(鶴田典昭)

遺構内の石器も含めて、石鏃571点、石錐81点、ピエスエスキーユ28点、打製石斧15点、横刃形石器41点、磨石類30点、石皿2点、磨製石斧21点、砥石29点、石棒・石刺18点、独結石1点、玉類2点、その他石製品3点が出土している。(12・13頁表を参照)

石鏃 (69頁-1~67) いわゆる石鏃、石槍を一括して石鏃とした。基部形状により有茎石鏃(1~48)と無茎石鏃(49~67)に分類され、それぞれ凹基、平基、凸基のものがある。有茎石鏃380点、無茎石鏃131点、基部欠損により分類不可能なもの62点である。縄文時代晩期に特徴的といわれる飛行機鏃(40~48)もみられる。石材は、珪質頁岩44.8%、チャート24.1%、黒曜石16.7%、安山岩14.3%で、頁岩とチャートが全体の7割を占める。

石錐 (70頁-1~30) 棒状の先端部(錐部)をもつものを石錐とした。全体の形状が棒状のもの(1~12)、つまみ(鋏部)をもつもの(13~30)、と2種類に大別される。3~10・15~18の先端に摩耗痕が認められる。石材は珪質頁岩54.3%、チャート30.9%、黒曜石2.5%、安山岩他が12.3%で、頁岩とチャートが全体の8割を占める。

石匙 (70頁-31) 玄武岩製で、調整加工によりつまみ部を作りだし、刃部に使用痕と思われる小さな剥離痕が認められる。刃部の調整加工は見られない。

二次加工のある剥片 (70頁-32~36) 加工が施された剥片を一括した。定形的な石器の分類からはずれる不定形石器、定形的な石器の未製品などが含まれる。珪質頁岩・チャートが多い。

ピエスエスキーユ(楔形石器) (70頁-37~43) 剥片を台石のうえに置き、上からそれをハンマーで敲く、という両面打法により、対峙する刃につぶれたような剥離痕(階段状剥離)をもつものを楔形石器とした。2点の珪質頁岩の他は、全て黒曜石である。

打製石斧 (71頁-1~9) 1は砂岩礫を素材としている。他は、剥片を素材とした短冊形打製石斧で、2・9以外は欠損品である。石材は砂岩と安山岩である。

横刃形石器 (71頁-10~21) 大形剥片の鋭利な縁辺に、調整加工、または使用による刃こぼれが認められるものを横刃形石器とした。直刃と曲刃のものがある。大部分が安山岩・玄武岩であるが、頁岩・チャートのもの(11・17・19)もみられる。

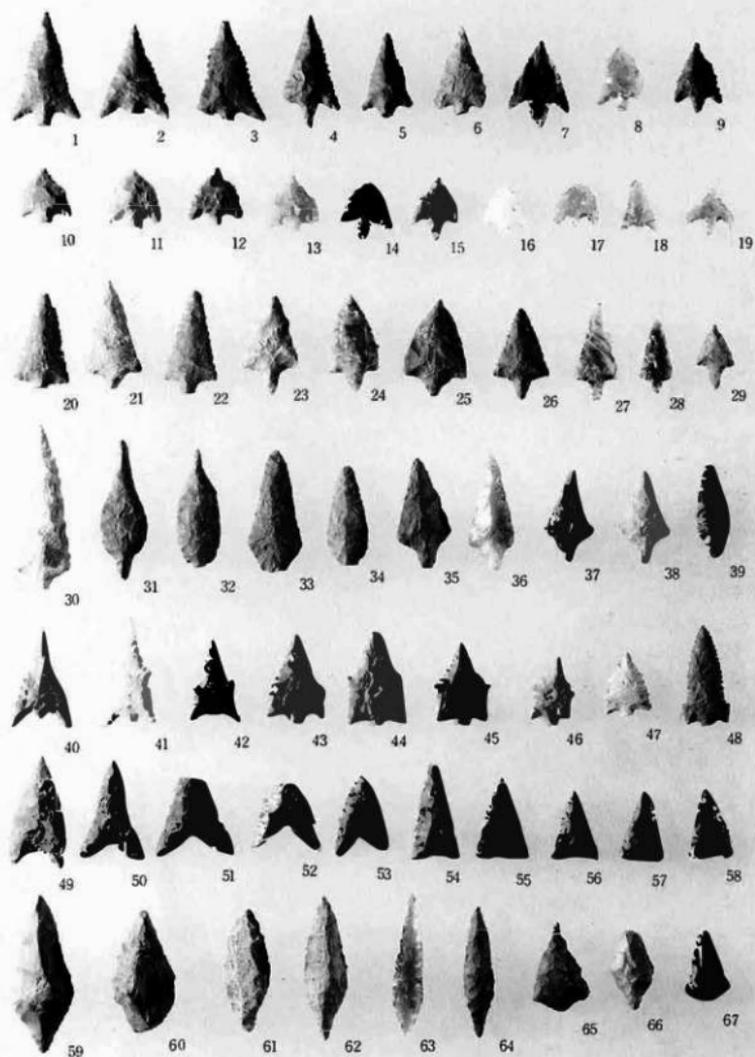
磨石・凹石・敲石 (72頁-1~16) 磨痕・凹痕・敲痕のいずれかを有する石器をまとめた。1~4・6~10は凹痕をもち、特に1~4は形の整った凹みが楕円礫の端部にあり、特異な感じを受ける。11・12は先端に敲痕をもつ敲石である。13~16は表裏両面に磨痕があり、14・15は火を受けている。

石皿 (71頁-22・23) 22は中心に向かい窪み、縁をもたない。裏面には数個の窪み痕を有する。23は有縁の方形の石皿である。裏面は中心に向かい窪んでおり、両面が機能面であると思われる。ともに安山岩である。

磨製石斧 (73頁-1~15) 小形の14以外は全て定角式磨製石斧である。2は、2号住居址出土のものと同様に、先端部のみ磨かれている。石材は、蛇紋岩、安山岩、砂岩、泥岩などである。

砥石 (73頁-16~23) 23以外は、厚さ0.5~1.5cmの板状のもので、17・18・20~22は有溝砥石である。全て砂岩である。

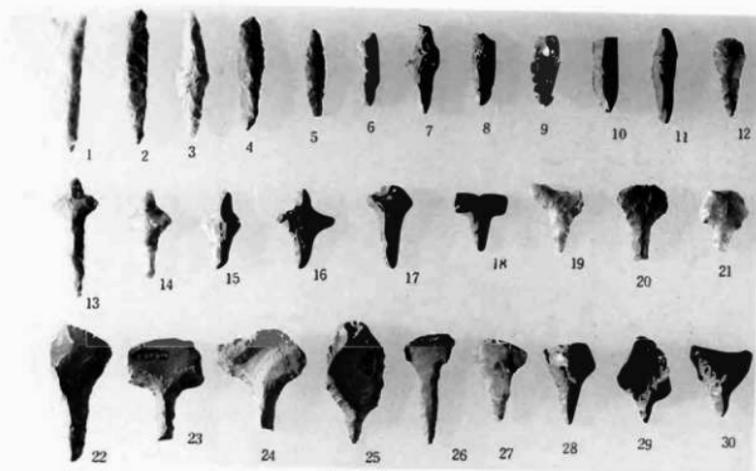
石核 (70頁-44~48) 大部分が残核である。出土した96点のうち、大部分は黒曜石であり、頁岩・チャートのものは8点だけである。



石鏃 (約 2 : 3)

1~19・40~48有莖凹基石鏃、20~29有莖平基石鏃

49~53無莖凹基石鏃、54~58無莖平基石鏃、59~67無莖凹基石鏃



石鏃 (約 2 : 3)



石匙

二次加工のある剥片 (約 2 : 3)



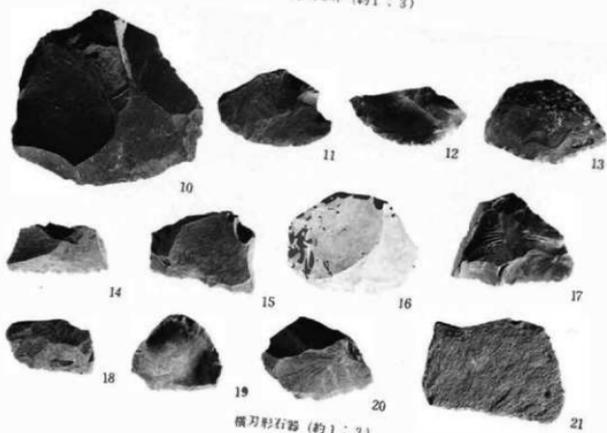
ビエスエスキュー (約 2 : 3)



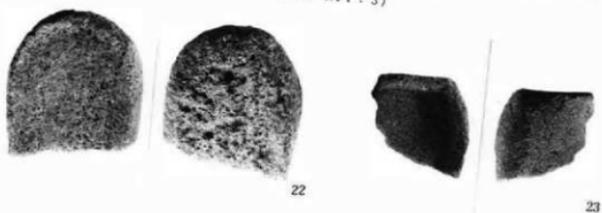
石核 (約 2 : 3)



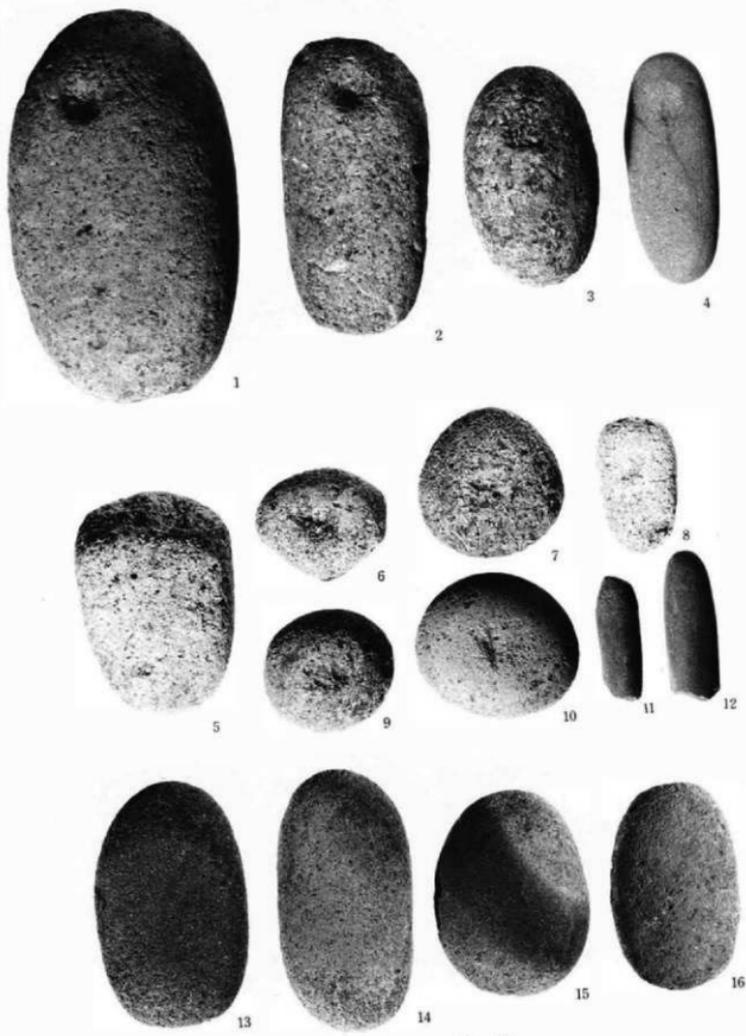
打製石斧 (約1:3)



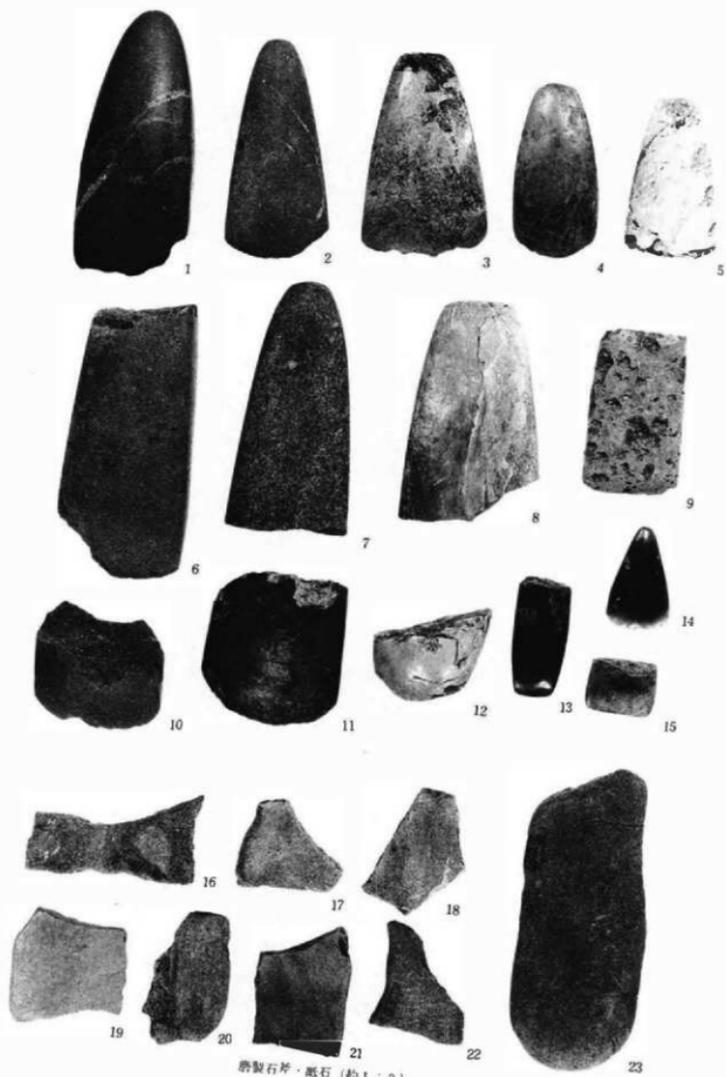
横刃形石器 (約1:3)



石皿 (約1:6)



磨石・凹石・敲石 (約 1 : 3)



磨製石斧、砥石 (約 1 : 2)



石制·石棒·錘跡石·石冠(約1:2)

宮崎遺跡の石器組成 (12・13頁の表参照)

本遺跡の出土石器は、縄文時代中期末・後期・晩期のものがみられるが、その主体は晩期のものである。石器も大半が晩期のもと考えられる。さらに、各トレンチの伴出土器の時期をみると、5号トレンチ4層は晩期前半、20・21号トレンチは晩期後半、さらに1号住居址は中期末、2号住居址は晩期前半(佐野I式期)の石器が、比較的純粋にとらえることができるとと思われる。そこで本遺跡の各時期の石器を概観してみたい。

1号住居址出土の石器は中期末～後期のもと考えられる。石器数は石鏃22、打製石斧4点のみで、該期の石器組成を語ることはできないが、石鏃・打製石斧が石器組成の大きな部分を占めることが予想される。5号トレンチ4層と2号住居址出土の石器は、晩期前半のもと考えられる。前者は225点、後者は60点の石器が出土しており、両者とも石鏃が7割近くを占める。他に石匙・横刃形石器・磨石・凹石・石皿・磨製石斧・石鏟・砥石などがみられる。1号住居址に比べ石器の出土点数はかなり多いにもかかわらず、打製石斧が1点も出土していないことが注目される。20・21号トレンチ出土の石器は、晩期後半のもと考えられる。63点の石器が出土し、6割が石鏃で占められ、磨石・凹石・横刃形石器・石鏟・打製石斧・磨製石斧などがある。石器組成が晩期前半と大きく変わらないうものと思われる。以上のことから、後期の石器組成は不明であるが、晩期前半・後半は、石鏃を主体とし、横刃形石器・磨石・凹石・石皿・磨製石斧・石鏟などをもつ石器組成が変化することなく続いた、と考えておきたい。

次に、宮崎遺跡と県内の晩期の遺跡と比較し、宮崎遺跡の石器組成を検討してみたい。県内の晩期の石器組成については、和田博秋氏が御社宮司遺跡の報告のなかでふれている。和田氏は特に石鏃と打製石斧の比較から、御社宮司遺跡の石器組成は、多量の石鏃が存在するという東日本の様相と、多量の打製石斧が存在するという西日本の様な様相が混在している状況にある、としている。以上の観点から宮崎遺跡の石器組成をみると、多量の石鏃が存在するという東日本の様相を示しているとしてよいであろう。さらに、縄文晩期の西と東の特徴としてとらえた石鏃と打製石斧をとりあげて、県内の晩期の遺跡を比較してみると、打製石斧を主体とし、石鏃も比較的多い遺跡と、石鏃が石器全体の半数以上を占め、打製石斧が極めて少ない、または1点も存在しない遺跡、という2種類の遺跡に分けることができる。この違いは、地形環境によるものではなく、地域差としてとらえることができそうである。すなわち、前者が南信地方に存在し、後者が北信地方に存在している。打製石斧を植物採集のための土掘り具であると考えられるならば、生業活動において、南信地方と北信地方では大きな地域差が生じていた、という仮説が設定できよう。打製石斧の存否が、具体的にどのような生業活動の違いであるかは不明であるが、今後の研究課題である。

長野県内晩期遺跡の石器組成

遺跡名	宮崎	山ノ神A	茶臼山	伏野	トチダ原	御社宮司	経塚	うどん坂B	荒神沢	女鳥羽川
所在地	長野市	山ノ内町	年礼村	山ノ内町	大町市	茅野市	岡谷市	飯島町	駒ヶ根市	松本市
立地	扇状地	扇状地	山	扇状地	沖積地	扇状地	扇状地	河原段丘上	河原段丘上	沖積地
主体時期	晩期全葉	晩期前葉	晩期前葉	晩期前葉	晩期後葉	晩期後葉	晩期後葉	晩期後葉	晩期後葉	後期晩中～後葉
石鏃	571	46	107	1000以上	4	422	20	11	21	50
石鏟	81	8	?	80	0	63	6	1	1	3
石匙	3	0	1	3	0	1	0	0	0	0
打製石斧	15	0	2	0	25	423	64	36	135	7
磨製石斧	21	2	9	6	1	21	5	1	7	1
磨・凹石類	30	1	4	11	0	113	4	4	24	20
石皿	2	2	0	4	0	5	0	0	0	0
石鏟	0	0	0	0	0	1	0	0	10	0
文献No	本報	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	No.7	No.8	No.9

宮崎・山ノ神・茶臼山以外の遺跡は、和田他1982より転載した。

定形的な石器のみをとりあげた。

宮崎遺跡の石鏝について

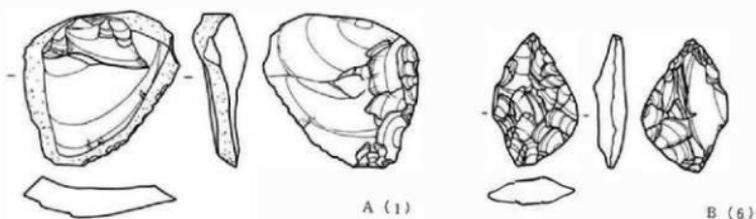
今回の調査で出土した石鏝は571点で、有茎石鏝380点、無茎石鏝131点で、分類可能なもののうち74%が有茎石鏝である。有茎・無茎ともに、凹基・平基・凸基のものがみられ、有茎凹基91点、同平基208点、同凸基81点、無茎凹基44点、同平基64点、同凸基23点である。各時期の特徴を抽出することはできなかったが、前述した比較的純粋に時期をとらえることができる1号住居址、2号住居址、5号トレンチ4層、20・21号トレンチの石鏝を比較してみると、晩期では前半にくらべて、後半に有茎凹基鏝が多い、という傾向があると思われる。後期のものについては不明であるが、中部地方では、後期初頭から中葉に有茎石鏝が流入してくるといわれている。本遺跡の場合も、中期末の石鏝と考えられる1号住居址のものには有茎石鏝はなく、黒曜石製の無茎凹基鏝に、部分磨製のものも5点みられるのが特徴的である。他の地点から部分磨製石鏝が1点も出土していないことから、本遺跡において、部分磨製石鏝は、中期末に特徴的なものであると考えられる。全点に対する詳細な観察ができず、上記のトレンチ出土の石鏝の計測表を掲載するにとどめた。

次に二次加工のある剥片と分類したものの中に、自然面を打面にし、輪切状に剥離されたものが多くみられた。これらは、頁岩・チャートであり、同石材を用いた石器の多くは石鏝であることを考えると、この輪切状の剥片が、石鏝の素材剥片となると思われる。そこで、その過程を設定してみた。A自然礫より輪切状剥片をとり、B調整加工を加え、尖頭部を作り出す。Cさらに形を整え基部が明確に作り出され、D完成品となる。13・14の例をみると、最低8mm以上の素材剥片を使用していることが観察される。石鏝の完成品の中には、素材剥片が剥離されたときの面が残っており、素材剥片がかなり薄いものもあり、全ての石鏝が輪切状剥片から作られているとはいえない。さらに佐野遺跡では、5～12の類は尖頭器と報告されており、必ずしもこれらが未製品であるとはいえない。本報告では石鏝の未製品として数えたものがこの類にあたる。

5～12の類を製品として認識するならば、石器組成の中で、石鏝に対して大形の尖頭器が安定して存在しており、狩猟活動の解釈に大きく影響してくると思われる。本類が製品か未製品かは、解決しないままに終わってしまったが、今後の課題としたい。縄文時代の生活を考える上で、考古資料に対する資料批判の必要性を痛切に感じた。

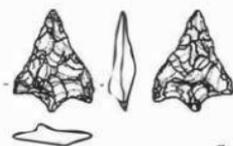
引用文献

- 1 大原正義 1982「山ノ神遺跡」『長野県史 考古資料編（北東巻）』
- 2 幸社村教育委員会 1980『明尊寺・茶白山遺跡』
- 3 長野県考古学会 1967『佐野』
- 4 大町市教育委員会 1981「トチガ原遺跡立ち会い調査」『信馬遺跡II』
- 5 長野県教育委員会 1982『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告一茅野市その5ー』
- 6 長野県教育委員会 1980『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告一岡谷市その4ー』
- 7 長野県教育委員会 1973『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告一飯島町その3ー』
- 8 駒ヶ根市教育委員会 1979『荒神沢遺跡』
- 9 松本市教育委員会 1972『長野県松本市女鳥羽川遺跡緊急発掘調査報告書』



A (1)

B (6)

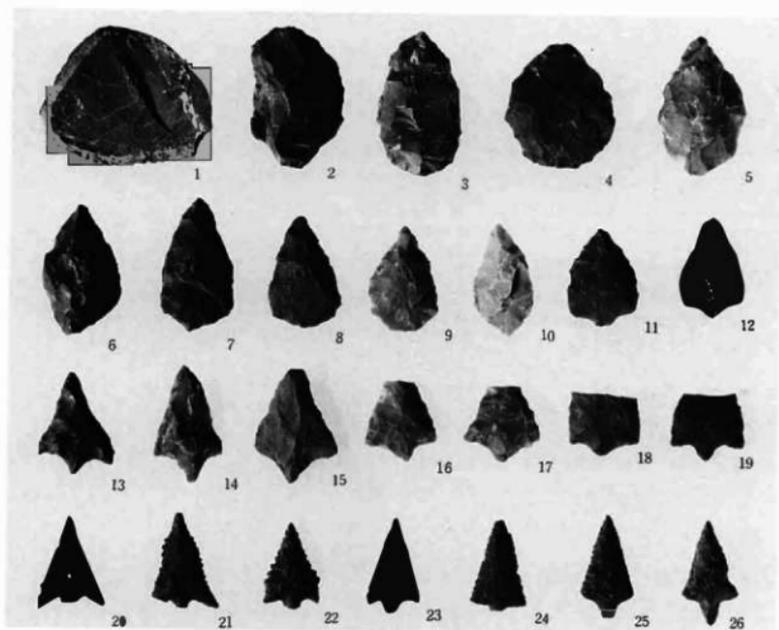


C (13)



D (20)

宮崎遺跡の石軸の想定製作過程 (2 : 3)



石碓の計画表

写真No	出土地点 層位	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ mm	重さ g	分類
	1号住 煙壁	安	3.9	2.2	4.0	3.3	B1
	" 床	黒	2.3	1.6	3.2	0.7	"
	" 礎土	"	1.9	1.4	2.7	0.5	"
	" 床	チャ	1.9	1.4	2.8	0.5	"
	" 礎土	黒	1.5	1.4	2.2	0.4	"
	" 礎	チャ	1.5	1.4	2.6	0.5	B2
	" 礎	安	3.7	1.1	3.6	1.8	B3
	" 礎	頁	1.8	1.5	2.6	0.6	B1
	" 礎	チャ	1.4	(1.4)	2.5	0.5	"
	" 礎	"	(2.4)	(1.6)	2.1	"	"
	" 礎	"	(2.5)	2.1	3.7	1.6	"
	" 礎	"	(2.4)	1.7	3.3	1.4	"
P33-1	2号住 IV	チャ	2.5	2.1	5.3	2.6	A2
" 2	" I	頁	(3.5)	1.6	5.2	2.6	"
" 3	" "	"	"	(1.8)	4.3	"	"
" 4	" IV	チャ	2.6	1.5	3.8	1.4	"
" 5	" "	"	2.4	1.6	3.6	1.4	"
" 6	" I	"	2.4	1.4	4.0	1.3	"
" 7	" IV	頁	2.2	1.7	3.1	1.1	"
" 8	" I	"	1.8	1.6	4.6	1.5	"
" 9	" "	黒	2.1	1.4	2.8	0.8	"
" 10	" II・III	頁	2.1	1.7	3.6	1.3	"
" 11	" IV	チャ	2.2	1.4	4.2	1.2	"
" 12	" "	安	"	1.5	6.5	"	A3
" 13	" "	頁	2.3	1.4	3.9	1.5	"
" 14	" "	チャ	2.0	1.6	4.4	1.5	"
" 15	" I	安	2.2	1.4	3.7	1.3	"
" 16	" IV	頁	2.2	1.5	4.5	1.2	"
" 17	" II・III	チャ	1.8	1.4	3.2	0.9	"
" 18	" IV	頁	1.7	1.1	3.7	0.8	"
" 19	" "	"	"	1.5	3.7	"	A2
" 20	" I	黒	"	1.1	3.2	"	A3
" 21	" IV	チャ	1.3	1.4	3.2	0.5	A1
" 22	" I	頁	1.8	1.7	3.8	1.1	A3
" 23	" II・III	"	"	"	6.0	"	"
" 24	" IV	"	3.0	1.8	4.1	1.9	B1
" 25	" I	"	(3.6)	2.4	3.9	2.4	"
" 26	" IV	チャ	(3.1)	2.3	4.1	"	"
" 27	" II・III	"	2.3	1.8	3.7	1.5	"
" 28	" "	黒	1.7	1.4	4.0	0.6	"
" 29	" I	"	"	2.0	4.1	"	B2
" 30	" II・III	チャ	2.1	1.8	2.3	0.8	"
" 31	" IV	頁	"	2.2	5.9	"	B3
" 32	" "	黒	"	2.2	3.6	"	"
" 33	" "	頁	4.6	1.8	9.3	7.1	"
" 34	" "	チャ	3.7	1.9	8.5	5.6	"
" "	" "	"	(2.6)	1.7	5.5	2.1	"
" "	" "	黒	2.2	1.4	6.4	2.4	"
P69-14	" I	"	"	1.6	3.2	0.7	A2
	5トレンチ 4	?	"	1.6	4.6	"	A2
	" "	?	"	1.9	4.5	"	"
	" "	黒	1.3	1.2	4.0	0.5	A1
P69-4	" "	頁	2.9	(2.3)	3.4	1.8	"
	" "	"	2.4	1.4	4.3	1.1	"
	" "	"	"	1.7	6.3	"	A2
	" "	チャ	"	1.6	4.0	"	"
	" "	頁	2.9	(1.7)	3.8	1.7	"
	" "	"	(2.4)	1.5	3.5	1.1	"
	" "	"	1.9	1.5	4.1	1.2	"

写真No	出土地点 層位	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ mm	重さ g	分類
P69-1	5トレンチ 4	頁	1.8	1.4	2.8	0.7	A2
	" "	"	3.4	2.2	3.8	2.0	A1
	" "	?	(2.8)	2.6	7.3	5.2	A2
	" "	頁	2.6	1.9	4.0	1.5	"
P69-35	" "	安	2.5	1.7	5.6	2.4	A3
	" "	?	"	2.2	5.4	"	A2
	" "	?	(2.6)	(1.5)	4.8	1.6	A1
	" "	安	"	1.2	2.8	"	A2
	" "	?	1.7	"	4.5	"	"
	" "	頁	"	2.0	4.5	"	"
	" "	"	"	1.9	2.8	"	B1
	" "	"	2.3	1.5	3.2	1.0	A2
	" "	"	2.7	1.8	3.2	1.2	B1
P69-53	" "	"	2.5	1.7	4.6	1.6	"
P69-51	" "	"	"	2.4	3.3	1.7	"
P69-50	" "	"	3.0	2.1	3.4	1.4	"
	" "	"	1.8	1.4	4.0	1.0	A2
	" "	チャ	3.4	(2.0)	3.0	"	B2
	" "	"	"	(1.3)	3.0	"	"
	" "	黒	1.7	1.3	4.0	0.7	"
P69-56	" "	チャ	2.2	1.4	4.0	0.9	"
P69-54	" "	頁	2.9	1.5	4.1	1.3	"
	" "	"	2.4	1.4	3.0	1.2	"
	" "	安	"	1.2	4.5	"	B3
	" "	チャ	2.1	1.3	5.3	1.8	A3
P69-61	" "	安	"	1.5	5.2	3.0	B3
	" "	頁	"	1.2	6.7	1.7	A3
	" "	"	2.2	1.3	7.4	2.2	B3
	" "	チャ	1.4	1.2	6.0	1.4	A3
P69-62	" "	安	3.0	1.3	5.5	3.0	B3
	" "	チャ	2.3	1.7	5.2	1.3	B2
P69-57	" "	"	2.1	1.4	3.5	0.9	"
	" "	黒	1.9	1.6	4.1	0.9	"
	" "	チャ	1.9	1.1	3.2	0.5	"
	" "	頁	"	1.5	4.3	1.2	A2
	" "	"	2.7	1.5	4.0	2.0	"
	" "	"	"	1.5	3.5	"	A3
	" "	"	1.9	1.5	3.0	1.1	"
	" "	"	"	2.4	5.5	"	A2
	" "	"	(2.2)	1.4	4.8	1.5	"
	" "	"	"	"	1.9	4.1	"
	" "	"	2.7	1.5	6.5	2.5	"
	" "	?	"	1.4	4.4	"	A3
P69-46	" "	チャ	2.0	1.4	4.0	1.0	A1
	" "	"	1.7	"	3.2	"	A1
P69-24	" "	"	2.4	1.5	6.6	2.6	A2
	" "	"	(2.2)	(1.6)	4.3	"	A1
	" "	"	(1.5)	1.2	2.3	4.0	A1
	" "	頁	(2.2)	1.8	4.3	"	A3
	" "	黒	1.6	(1.5)	3.1	0.6	A1
	" "	"	"	1.3	4.0	"	A2
P69-15	" "	"	1.5	1.4	3.5	0.6	A1
	" "	"	"	1.6	4.4	"	A2
	" "	"	1.9	"	3.3	"	"
	" "	"	"	1.8	4.0	"	"
P69-21	" "	安	(3.4)	1.7	3.7	1.7	"
	" "	?	2.4	1.7	4.2	1.9	"
P69-13	" "	?	1.7	1.6	3.3	0.8	"
	" "	安	"	1.7	3.9	"	"
P69-29	" "	安	1.3	1.1	3.2	0.6	"
	" "	?	"	1.4	4.1	"	"

写真No	出土地点 部位	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ mm	重さ g	分類	写真No	出土地点 部位	石材	長さ cm	幅 cm	厚さ mm	重さ g	分類				
P69-47	5トレンチ 4	?	1.9	1.4	3.3	0.8	A 2		5トレンチ 4	頁	1.7	1.2	4.5	1.0	B 2				
		頁	—	1.9	4.3	—	—			安	—	1.0	4.5	1.2	B 3				
		?	—	1.8	4.4	—	—			チャ	(1.6)	1.3	5.8	—	B 1				
		?	2.2	1.2	3.7	1.1	—	P69-66		黒	(3.0)	1.5	4.2	1.5	B 1				
P69-41		?	3.3	1.8	4.3	1.8	A 1			頁	(3.0)	(2.6)	6.8	—	—				
		?	(2.2)	—	4.9	—	A 2			?	2.9	1.6	7.0	3.4	B 2				
		?	(1.8)	1.6	3.5	1.0	—			?	3.3	2.0	5.5	2.5	—				
		安	2.2	1.6	2.4	0.8	—			頁	—	1.3	5.8	—	B 3				
		—	—	1.8	3.8	—	—			チャ	—	1.8	5.3	—	B 1				
		安	—	1.9	4.3	—	—			頁	—	1.7	4.8	—	B 2				
		—	2.3	1.5	4.0	—	—			チャ	2.3	(2.8)	7.0	—	—				
P69-11		チャ	1.8	1.6	4.5	1.3	A 1			頁	—	(2.0)	5.0	—	—				
		頁	—	1.9	4.3	—	A 2	P69-67		?	1.8	1.4	4.0	—	B 3				
		—	—	1.8	3.6	—	—			?	—	1.5	3.7	—	—				
		チャ	1.6	1.5	5.0	1.1	—	P69-64		頁	3.0	1.0	5.4	1.8	—				
P69-34		頁	3.0	1.2	4.1	1.7	A 3												
		チャ	—	2.5	6.3	(3.1)	A 2		20トレンチ 2・3	頁	2.6	1.6	3.2	1.0	A 1				
P69-27		黒	2.4	1.4	3.8	1.0	—			—	—	1.8	4.3	1.5	A 2				
		頁	—	1.6	—	—	A 3			?	2.6	1.7	4.0	2.0	—				
		—	2.6	1.6	4.6	1.9	A 2			黒	1.7	1.3	4.6	0.9	—				
		チャ	(2.0)	1.6	3.8	1.1	—			チャ	1.2	1.1	2.4	0.3	—				
P69-26		頁	2.1	1.7	4.9	1.5	—			4	黒	1.9	1.5	3.0	0.6	A 1			
		チャ	1.6	1.3	4.1	1.0	—			?	黒	2.8	1.5	4.5	1.9	—			
		—	—	1.7	1.4	4.0	0.9	—		?	—	1.7	3.8	1.7	A 2				
P69-37		頁	2.0	1.6	4.4	1.3	A 3			?	—	1.9	4.0	—	—				
		—	—	2.1	1.2	4.4	1.0	A 2			?	1.5	1.7	3.9	0.7	A 1			
		黒	2.1	1.1	4.0	0.9	—			?	黒	1.8	1.3	3.2	0.6	—			
		チャ	(2.6)	1.2	3.4	1.2	A 3			?	チャ	2.0	1.5	4.0	1.0	B 2			
		頁	1.9	1.3	4.0	1.1	—												
		—	—	1.6	3.6	—	A 2			21トレンチ 3	頁	—	1.8	3.9	1.7	A 2			
		—	2.9	2.1	5.0	2.2	A 1				?	2.5	1.2	5.0	1.7	A 3			
P69-48		?	3.0	1.5	3.5	1.4	—			?	黒	2.3	1.5	3.6	1.0	A 1			
		チャ	1.8	1.2	5.2	1.2	A 3			4	チャ	2.4	1.9	6.0	2.4	A 2			
P69-38		安	1.9	1.6	4.3	1.5	—			?	頁	2.4	1.6	3.0	1.2	A 1			
		頁	2.2	1.3	4.4	1.3	—			?	黒	1.7	1.6	3.1	0.9	—			
		チャ	1.3	1.3	5.0	1.0	—			?	?	1.9	1.5	3.6	0.9	—			
		—	—	1.6	2.6	—	A 2			?	3	頁	2.8	(1.8)	5.1	1.9	A 2		
P69-33		安	2.9	1.6	4.0	2.3	A 3			?	安	1.9	1.4	3.7	1.0	A 1			
		頁	—	1.8	4.9	—	A 2			?	頁	—	1.6	3.0	—	—			
		(2.3)	1.5	4.6	1.5	—	—			?	チャ	2.1	1.3	3.5	0.9	—			
P69-25		?	2.4	1.9	5.0	2.0	—			4	頁	—	2.5	3.5	—	A 2			
		?	3.0	2.2	6.0	2.9	—			?	安	2.0	2.9	3.8	2.0	A 1			
		?	1.8	1.3	3.8	0.9	—			?	頁	2.2	1.5	4.0	1.2	A 2			
P69-9		?	1.9	1.5	3.1	0.8	A 1			?	?	2.2	1.6	3.4	1.3	—			
		?	2.0	1.5	3.9	1.2	A 2			?	安	2.4	1.6	4.0	1.4	A 3			
		(1.7)	1.4	4.4	1.1	—	—			?	黒	1.4	1.3	3.5	0.8	A 1			
		?	1.7	1.8	3.4	1.1	—			?	頁	—	2.0	2.7	—	A 2			
		—	—	1.6	5.1	—	—			?	黒	—	1.3	2.8	—	A 1			
P69-22		?	3.0	1.7	4.5	1.8	—			?	?	1.6	1.2	5.3	1.1	A 2			
		頁	2.0	1.1	3.6	0.8	A 3			?	頁	1.7	1.6	3.8	0.9	A 1			
		安	2.5	(1.7)	5.0	1.5	A 2			?	黒	—	1.7	3.1	—	—			
P69-12		頁	1.8	1.6	3.3	0.8	A 1	P69-8		?	1.8	1.5	3.5	0.8	—				
		?	1.8	1.2	2.7	0.5	A 2	P69-17		?	3	?	1.4	1.4	2.5	0.4	—		
		?	1.9	1.2	4.0	1	—	P69-18		?	1.5	1.1	2.3	0.3	—				
		—	—	1.8	3.9	—	A 3												
		?	2.3	1.6	4.9	2.0	—			石材	頁	頁岩	チャ	チャート	黒	黒曜石	安	安山岩	
		(1.9)	1.6	5.2	1.3	A 1													
		—	—	1.8	3.4	1.2	—												
		—	—	1.7	4.5	—	A 3												
		玄	2.0	1.4	2.0	0.8	A 2												
		チャ	2.9	2.0	5.0	2.4	B 1												

石材：頁：頁岩、チャ：チャート、黒：黒曜石、安：安山岩
玄：玄武岩

分類：A：有茎、B：無茎、1：凹基、2：平基、3：凸基
() 内は推定値

3 土 製 品 (魚骨製品・石製品)

特殊土器

通常の容器として用いられずに祭服用又は特異な器形を有するものを扱う。1は、1号土墳墓埋葬人骨の胸の位置から出土し、副葬品と考えられるもので、佐野式土器の文様を踏襲している。口径3.9cm、底径5.2cm、器高7.8cmを測る。2の頸部器形は隅丸方形になる。3は杓子形を呈するものと思われる。文様帯に赤色顔料が残る。口径10.0cm。

土製耳飾

全体で138点出土している。その分布状態をみると、土墳墓と石棺墓が確認された地域周辺から圧倒的に多くの出土例をみる。特に5・13・16・18トレンチからの出土は、全体の75%強に及ぶ反面、遺構からの出土数は少なく、2号住居址(2・17~20)・5号土墳墓(1)・3号石棺墓(11)・5号石棺墓(14・15)・6号石棺墓(16)にすぎない。この中で特に注目されるのは5号土墳墓の耳飾は、土製ではなく、大型魚類(鮫?)の椎骨を利用したもので、全面に赤色塗彩され、人骨頸部右耳付近より出土し、更に3号石棺墓のそれは、頸部と推定される左側の耳部付近からの出土したことである。

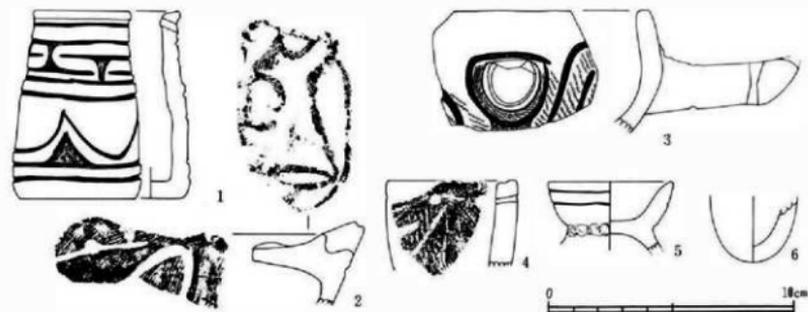
遺し彫りのあるもの(2~8)は、2号住居址(2)と5・13トレンチ(3・5・7・8)、24トレンチ(4)・28トレンチ(6)から出土している。作りは精巧で、赤色塗彩される。三叉文様が表現され、2号住居址と同じ晩期前葉の所産と思われる。

12・13の抉り込みは深く、12の表面は重円文と刺突文で飾る。

21~45は白彩を呈する。21~31は雑な作りのものが多く、単に両端を凹めた形態になるのに対し、37~45は偏平で、断面形の均整がとれており、ていねいに作られる。そのうち41~45の中心に小円孔がうかがわれる。この類には無文のものが多い中で、26だけが有文になる。

46~67・134~137は環形を呈し、内面の側線が外縁とはほぼ平行関係にある。小形のものから大形のものまで各種あり、そして有文のものと無文のものがある。有文のものは、沈線をめぐらすもの、それに列点文を加飾するものを主体とするが、54には半円弧文が見られる。以下もそうであるが有文のものには赤色塗彩の痕跡が認められる。無文のものは凹凸がないため脱色しやすいのかもしれない。

68~104・138は、前記したものより内面の側線が張り出し、86~104の断面形は、三角形に近くなる。この厚さ



特殊土器(1:2)



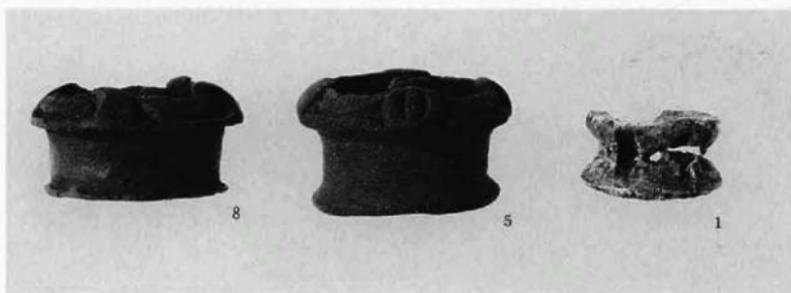
トレンチ別土製品出土分布図

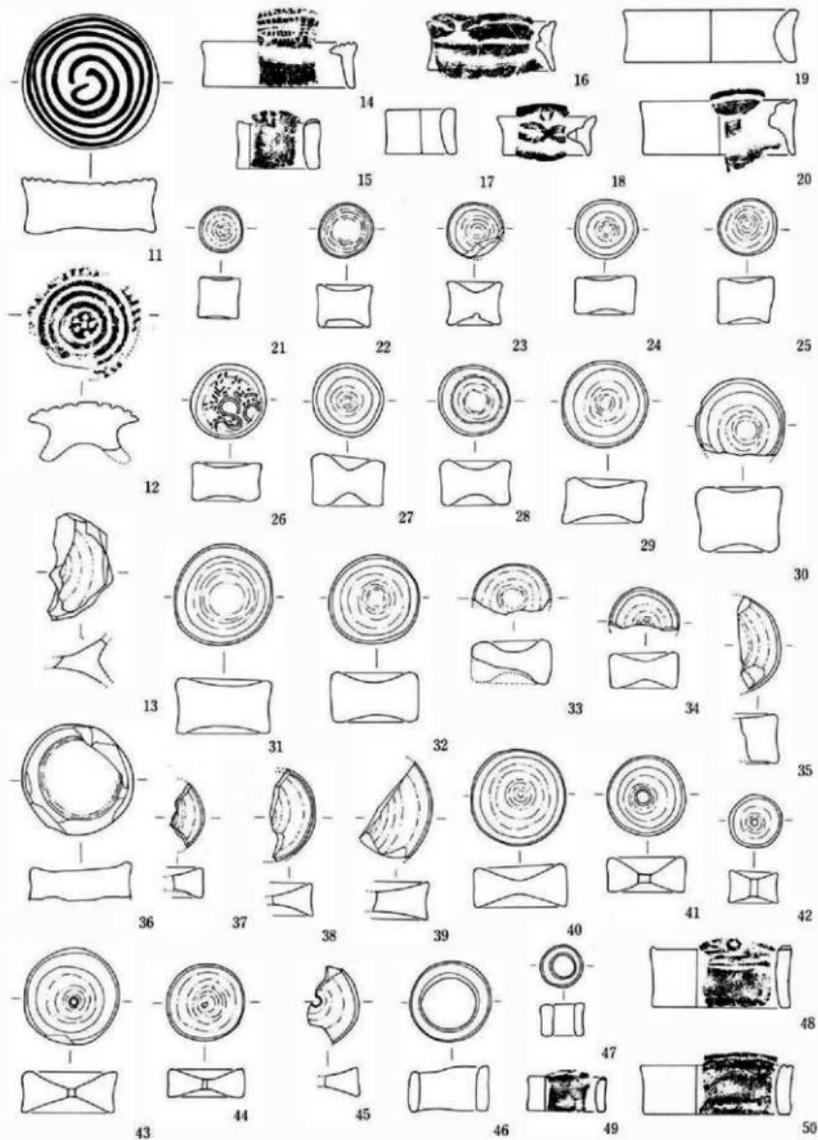




土製耳陶①(1:1)

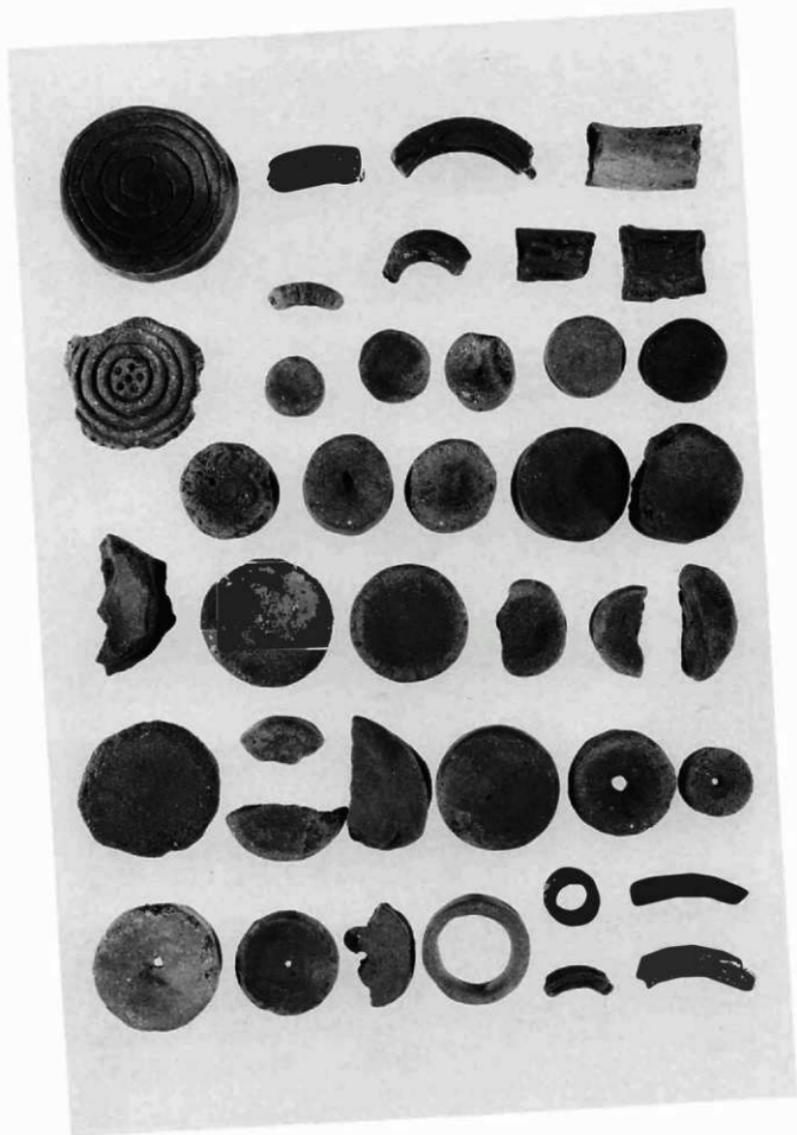
1は魚骨製

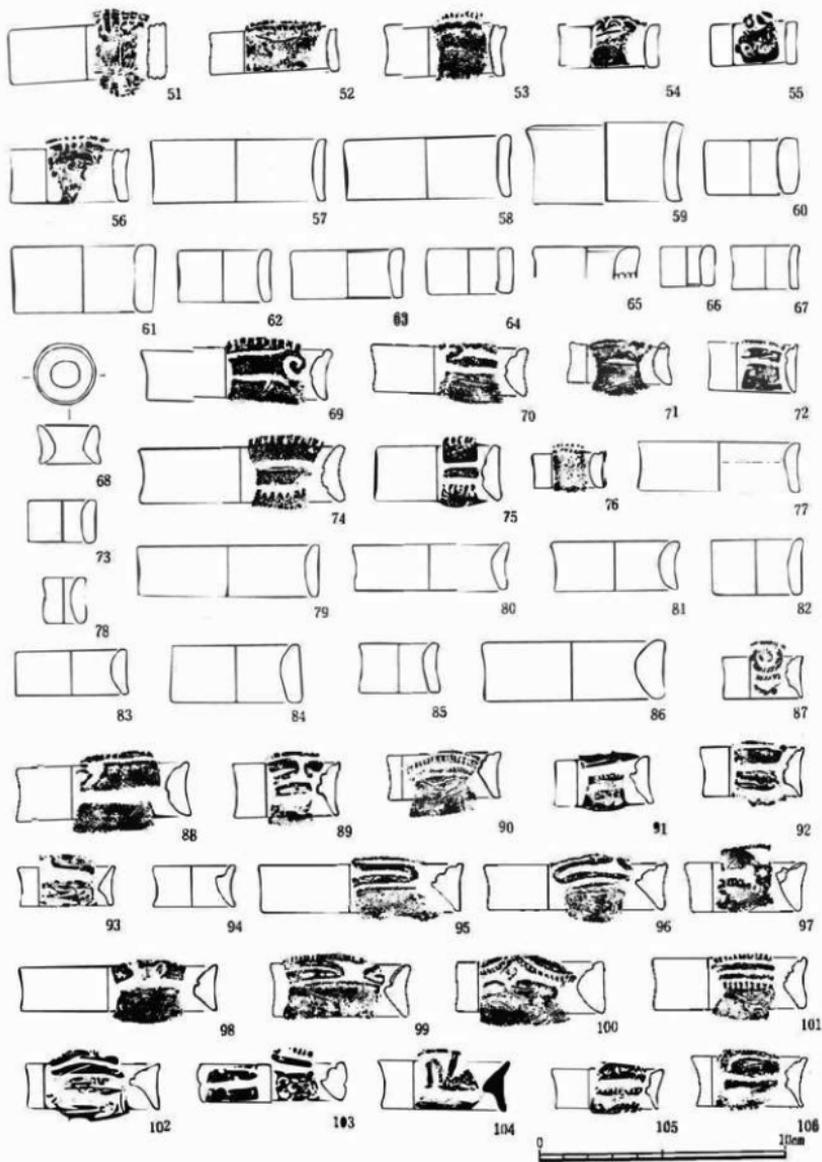




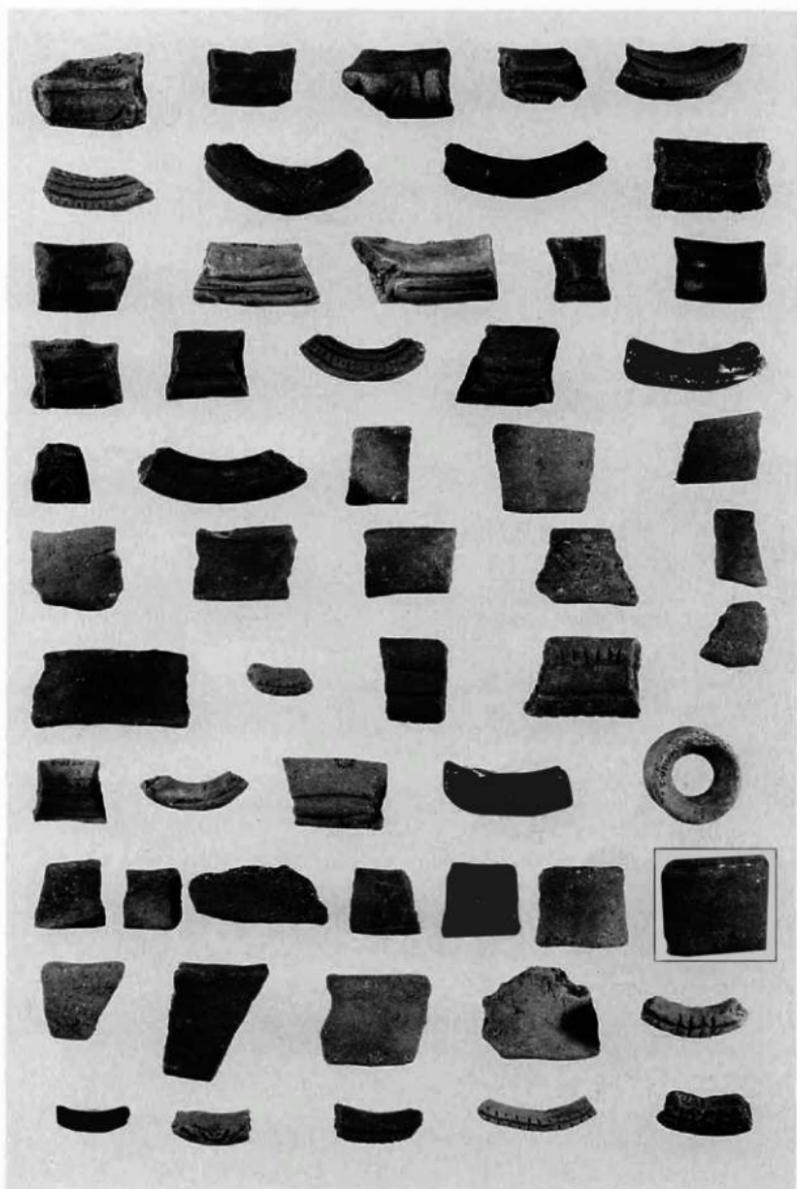
土製耳飾② (1 : 2)

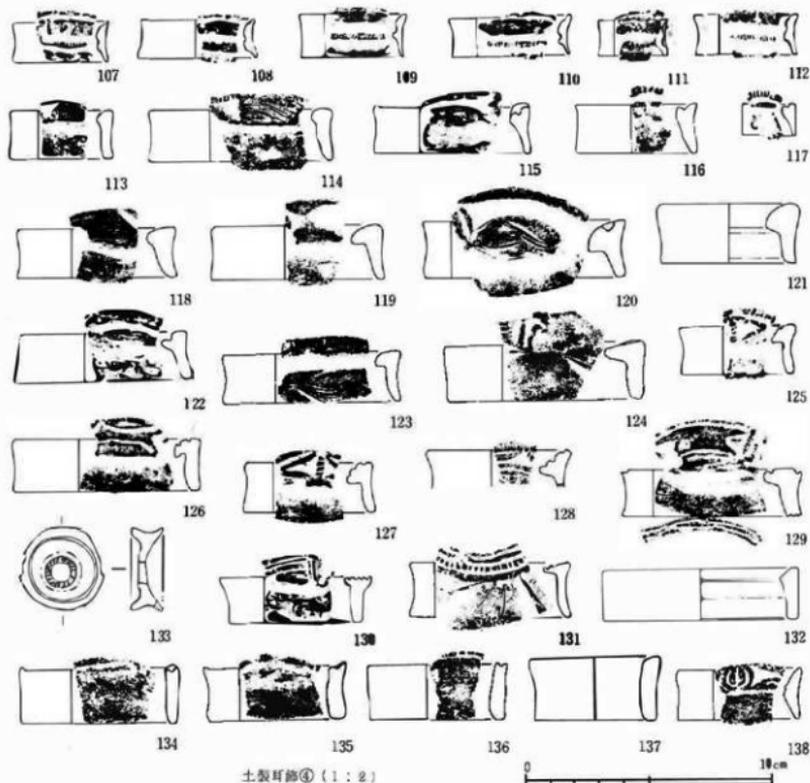
0 10cm





土製耳飾③ (1:2)





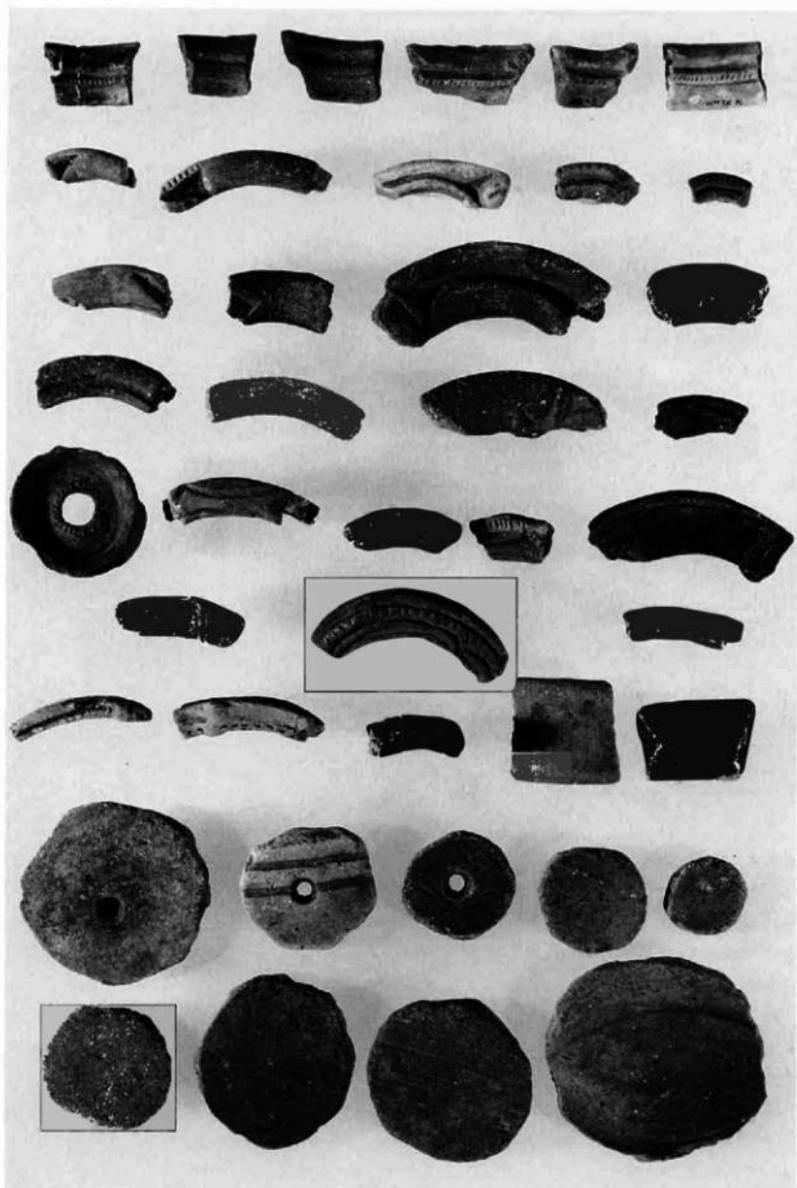
の増加は加飾を意識しているのであろう。有文のものが多くなり、また重量を考慮して中型のものが目立つ。69・70・88・97は三叉文又はそれを意図した文様が、沈線文を主体とする89・93・95・96・98・99には工字文が認められる。他は沈線文と列点文の組み合わせ文様になる。

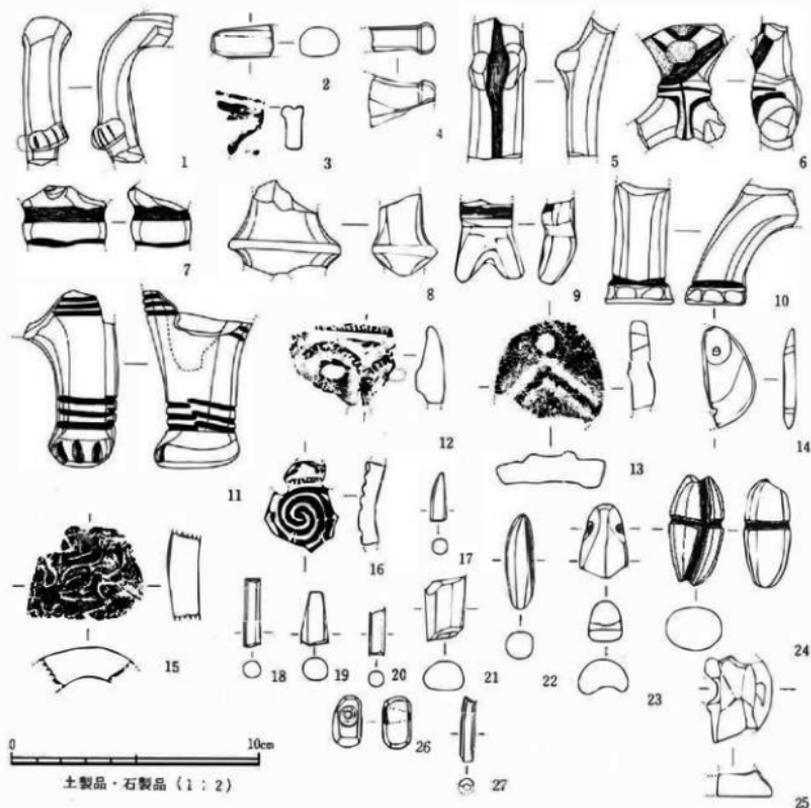
9・105～112は、薄手な作りで、内面中央付近に沈線文をめぐらし凸帯を形成することを特色とする。中型品が多い。他の文様は沈線文の他に口唇部と内面の凸帯に列点文をめぐらすものが多い。

113～132は表面口唇部が肥厚する一群で、有文のものには三叉文 (113～115・119・120・125・126) と工字文 (126・131) そして列点文を加えるものがある。

10・133は、耳朶受部両端が突起する形態で、内側は板状になり、中央に透し孔がある。

完形品及びそれに近いものの重量は以下のとおりである。()内は残欠量を示す。3・4 g・4・(8 g)・5・8 g・7・(8 g)・8・12 g・9・9 g・11・78 g・12・(25) g・21・7 g・22・10 g・23・(9) g・24・12 g・25・15 g・26・16 g・27・20 g・28・16 g・29・27 g・30・(36) g・31・36 g・32・30 g・40・26 g・41・16 g・42・7 g・43・24 g・44・13 g・46・12 g・47・3 g・68・8 g・133・11 g





土偶・土面・土版・垂飾 (1~16・23)

土偶 (1~11) はすべて破片で、形態は様々でない。腕 (1・3)・手 (2・4)・胸 (5~8)・足 (9~11) がある。11は中空になる。土面 (12) は1点、土版 (13・15) は2点、垂飾 (14・16・23) は3点出土している。16の表面は赤色塗彩される。

土製円板 (89頁下)

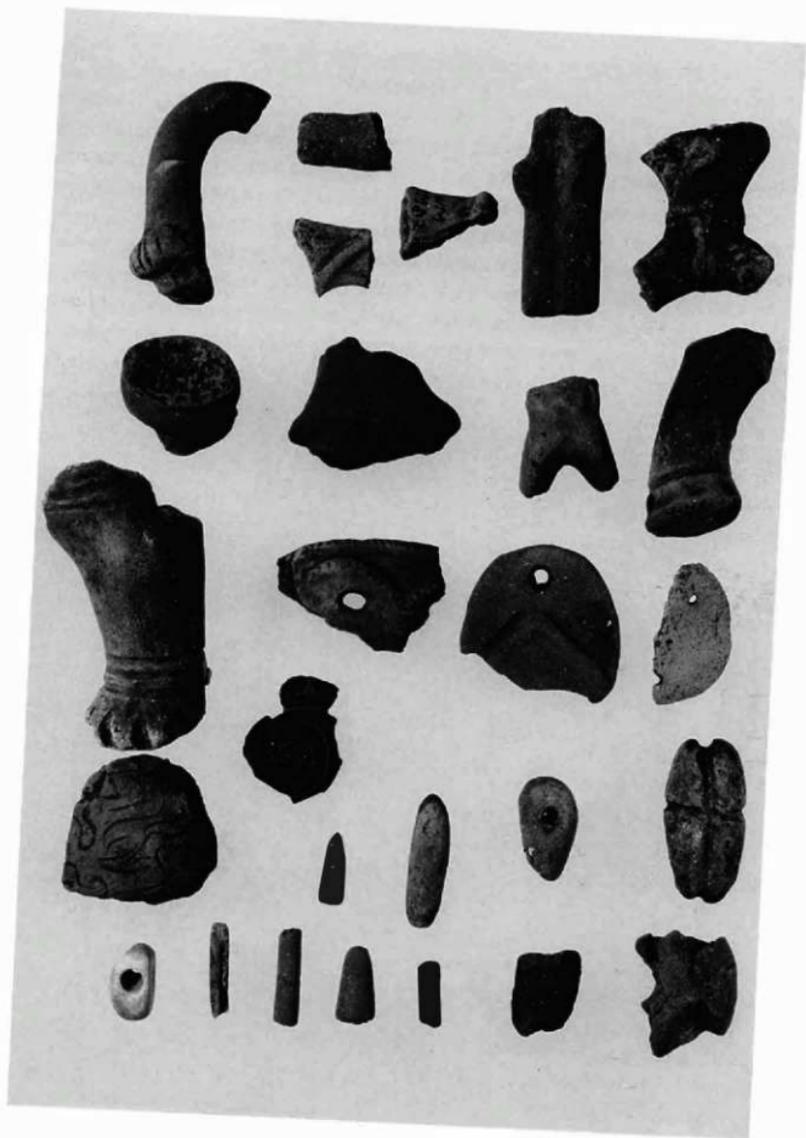
すべて土器片を円形に打ち欠いたり、磨いて作られている。総数92個が出土し、このうち有孔(穿孔)したもの(も含む)のものは11個ある。

生産用具 (17~22・24・25)

棒状刺突用具形態のもの (17~22) が出土しているが用途は不明である。このほか十字形に挟り込みがある土鍾 (24) が1点、古墳時代以降に見られる紡錘車 (25) が14トレンチから1点出土している。

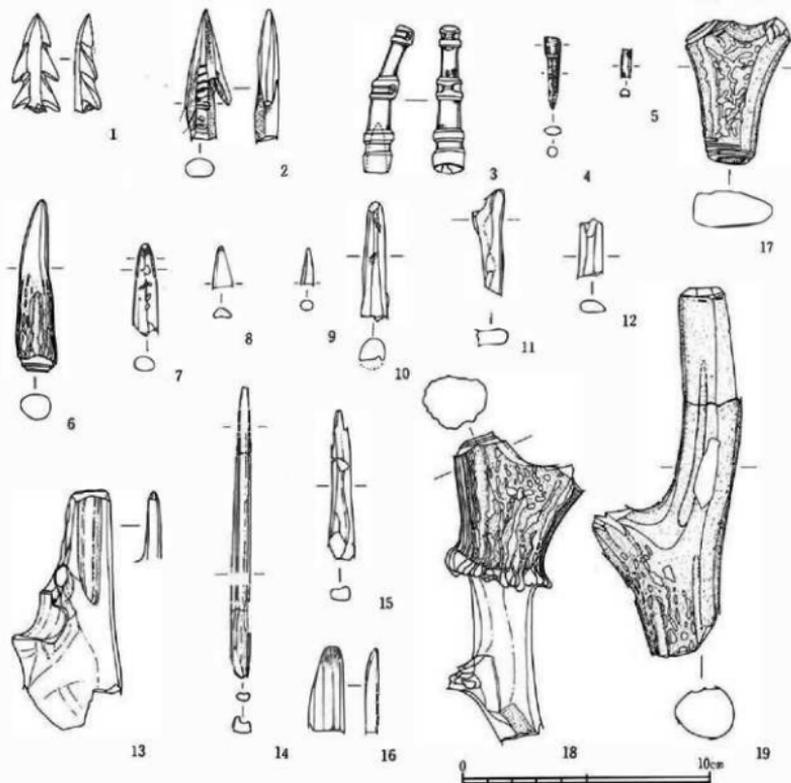
石製装飾品 (26・27)

ヒスイ製の垂玉 (26) が5号トレンチ、また滑石製管玉 (27) が16号トレンチより各1点出土している。



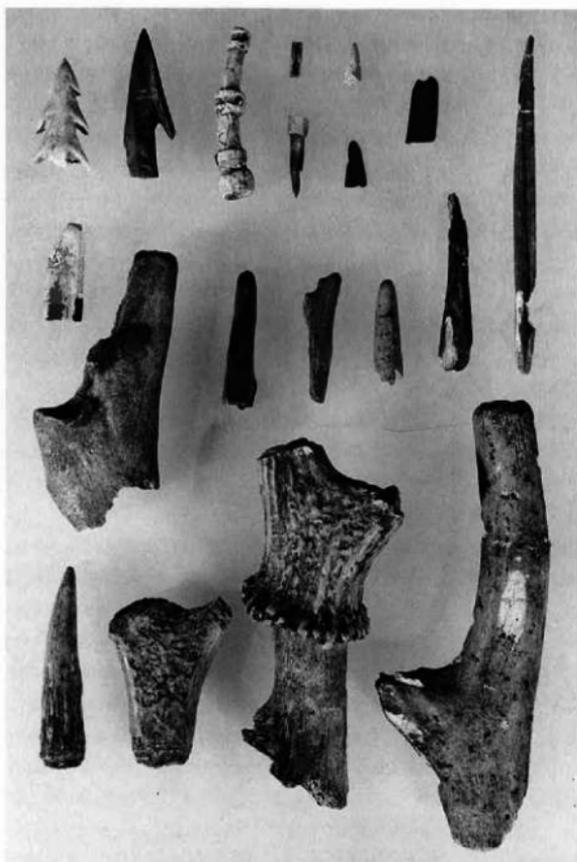
4 骨角製品

出土した地点は、第9トレンチ(1・4)・第5トレンチ(2・3・5・8-12)・第8トレンチ(6・7・17-19)の第4層及び1号墓壙の骨管上下面(13-16)に集中している。これらの出土層には、多くの獣骨片が包含されている。ここに図示したものは全て鹿の骨角を利用したものと推定している。1は角を半載したあと磨き上げられ、三角形の逆刺を相対にえぐり出している鉋頭である。先端は鋭利で全体に丸味を帯びている。現状では3対の逆刺が確認されるが、基部が欠損しているため、個定鉋か離頭鉋か不明である。現在長4.1cm・最大幅2.0cm・厚さ不明。2は1と同種の材質で作られた鉋頭であるが、逆刺は交互にえぐり出され、また逆刺部付近の輪部は偏平になるように加工される。先端部付近は縦方向の磨きか磨され、絶対角紙っているが先端部は丸味を帯びる。基部が欠損しているため着装方法は不明である。残存長5.3cm・最大幅1.9cm・最大厚1.0cm。3は角の先端部を利用して作られたもので、装飾品を思わせる。ただ下部に径8mm・深さ2.0cmの紡錘形の円孔がきり込まれ、また中



骨角製品(1:2)

位と上位の裝飾部に両側から紐通し用の円孔がうがたれている点からすると何かの付属品とも考えられる。ていねいにときとみがきか施され、3段のタカ状突帯を作り出し、中位と上部のものには円孔を伴う溝が一周している。平面長6.1cm・最大幅(厚)1.3cm。4・5は矢筈形の根ばさみの一部である。ともに角をとき上げて作られる。6-11は角部を原材料とする刺突具としての使用が予想される。しかし、8・11は未製品である可能性もある。8は半截片を利用している。12は肋骨片で、この破片からは加工痕が認められない。13・14は1号人骨腰部上面から出土し、15・16は下面からである。13は骨を折り、折断部先端をみがいた刺突加工具と考えられる。14・15は中足骨を半截した原材料から作り出された骨針(尖頭器)である。16は中手骨製の鏝で、先端は鋭利になり、ていねいな磨きか施される。17-19は角部で、原材料用又は角枝を切断した残欠であろう。ただ19の先端が磨耗していることからみると何らかの工具として使用された可能性がある。尚、18は角座骨で下面に前頭骨の一部を残す。



5 宮崎遺跡出土人骨および動物骨について

(西沢寿晃)

1 人骨

人骨は出土した時点では、各部位が比較的形を保ち、葬位などの観察も可能であったが、クリーニングの結果、骨質は脆弱で、崩壊消失した部分が多く、例えば頭骨では頭蓋冠や長骨の骨幹などの堅固な個所が主に残存する程度となっている。このため、計測・観察を通じての形質的な性状の多くを捉えることができなかったが、諸種の点で縄文人の特質を示す傾向が認められた。なお、埋葬人骨と密接状態で動物骨の検出が特徴的である。

以下、各人骨の残存状態と、その内容についての概要を記載する。番号は土壌番号と同じである。

1号人骨 埋葬位は伸展葬である。頭部を残し、胸・腹部の骨はすべて欠失するが、骨盤部は正常の位置で上方を向く。上肢骨は両側に揃えられ、手指は骨盤上に置かれている。寛骨に連結して下肢骨が平行に伸展する。頭骨：頭頂より後頭骨部分が主に残存。頭頂骨の骨壁はやや厚い。ラムダ縫合はすべての部分で癒着の痕はない。外後頭隆起は発達し、上頂線も膨隆する。上腕骨：遠位関節部(右)が残る。肘頭高は浅く広い。浴車上孔が存在する。尺骨・桡骨：すべて骨体(両側)が断片的に残る。尺骨の骨間棘は薄く鋭い。各骨体の表面滑沢で、繊細な形状を具える。指骨：中節・末節骨が7・8本残存。寛骨：左右の臼窩を中心に残り、大坐骨切痕の一部は浅く広い。大腿骨：骨体の上半部(両側)が残る。伸直。粗面は通常ないし弱度で、きしゃな感がある。骨体横断示数は中央部=108.00で柱状形成は弱度、同上部=75.00で広型に属する。胫骨：右骨体は出土時に約40cmの形状を保っていたが、以後、骨質はほとんど崩壊する。腓骨：骨体の一部が脛骨に並列して残る。全体的な形質から壮年の女性と推定される。

動物骨：人骨の各部に密着して、シカの骨が散見された。すなわち、人骨の頭部に距骨、骨盤上に下顎骨・肩甲骨・長骨片、左大腿骨上方に歯などである。その他、脱落歯、脊柱の刺突起が複数、上腕骨や指骨等も認められる。距骨は右・左一対で、1頭分のものと考えられる。

2号人骨 頭骨のみが残存し、左側方を向く。頭頂骨・後頭骨・下顎骨の一部が残るが崩壊がいちじるしい。ラムダ縫合は外面で痕跡的。右乳様突起は比較的に突出、外後頭隆起も発達がよい。上頂線・起平面のレリーフも強い。下顎骨：骨体(右)第一・二大臼歯の歯根が陥入して残り、第三大臼歯は空槽である。顎舌骨筋線の強い発達が予見される。骨体は厚く頑丈であり、壮年以上の男性と推定される。

3号人骨 頭部は残り、胸・腹部を欠くが、骨盤部、左右上肢骨、および下肢骨がそれぞれ自然位を保つ伸展葬である。胸部上に平石が抱石状に置かれている。頭骨：頭蓋冠と左右側頭骨の一部が残る。骨壁は薄く滑沢である。三主縫合はいずれも単純な鋸歯状を呈し、すべて離開するが、ラムダ縫合内板は癒合直前である。乳様突起(右)は丸く小型な小突起状で、外後頭隆起も弱い。頸椎：第3～6程度の椎体が連続して残る。上腕骨：骨体下半(左)は伸直で繊細な形状を呈し、外側上線は鋭い稜となる。前腕骨：各骨体の小部分が僅かに残るのみ。寛骨：臼窩から腸骨体(右)部分がやや大型で残る。両側大坐骨切痕は浅く広い女性型を示す。大腿骨：骨体(両側)は近・遠位関節部が接合では原型に近く復原できる。骨体は伸直で、殿筋粗面などは弱度の発達。粗線の外側唇は左側でやや強度。第三軀子は認められない。上・下関節は小型な感を与える。骨体横断示数は中央部(右)=115.38、(左)=124.00で柱状形成は中～強を示し、同上部(右)=82.76、(左)85.71で広型に属する。大腿骨最大長は43.6cmの長さであり、他部位の女性的な性状から算出した身長は157.65cmと推定され、縄文後・晩期人の平均身長を大きく凌駕する(ちなみに男性とした場合163.27cmと同様に高身長となる)。壮年のものであろうか。

動物骨：人骨と共伴して検出されたもので、シカの脛骨（右）遠位関節部分、距骨（左）、その他、滑車関節部、長骨片などがある。

4号人骨 頭部が残存するのみ。土圧により扁平となり、特に後頭骨のラムダ縫合各部が原位置で離脱状態となっている。外後頭隆起は極めて弱度で、平坦面も平坦、乳様突起は先端を欠くが大きい。下顎骨：骨体の左右大臼歯列部分が残る。翼突筋粗面、顎舌骨筋線は強く発達。残存歯は左第一・二大臼歯、第三大臼歯は歯のみであるが、各歯とも咬合面は、頬舌・近遠心的にほとんど水平に磨耗が連続し、歯壁は第二象牙質により充塞される。すべてマルテンの咬耗度2'に相当する。壮年・熟年であろうが、性別は不明である。

5号人骨 頭骨に連結して頸椎が残存し、寛骨に大腿骨が接合、脛骨・腓骨の骨体の一部がこれに屈曲する態位を示すが、全身的な葬位は不明である。頭骨：顔面部や脳底部を除き、ほぼ残存する。冠状縫合は連続する線状、矢状縫合は全域で痕跡的、ラムダ縫合は線状に残る。眉弓の隆起は明瞭である。側頭部（左・右）が残存し、乳様突起は大型でないが、尖端状を呈する。外後頭隆起は突出し、粗平面は粗粒。上顎骨の右歯槽と口蓋隆起が不完全ながら残る。中・側切歯・犬歯の歯槽閉鎖が生じ、歯槽線は薄い稜状となる。第一小臼歯は空槽。第二小臼歯は歯根のみ埋入。下顎骨：筋突起の先端を欠くが、ほぼ完形を保つ。顎舌骨筋線、顎下線窩は平坦で、顎舌骨神経溝も著明でない。下顎隆起が右側で特に膨隆。翼突筋粗面は粗状であるが、咬筋粗面は平坦。顔隆起は強く、下顎切歯は浅い。右第一大臼歯下部の骨壁に穿孔が生じている。歯：上顎残存歯の右第一・二大臼歯は咬耗がほとんど歯頸に達し、頰側へわずかに傾斜する一様な面が形成される。第三大臼歯は頰側・遠心への過耗がより強い。下顎の両側第一・三大臼歯は、それぞれ同一面をなす咬耗が進み、わずかに共通する頰側への傾斜を有する。この傾向は上・下顎を咬合せると、頰側へわずかながらクサビ状の空隙を生ずる結果となる。咬耗度はすべてマルテンの2'に相当する。第2小臼歯は右側空槽。左側歯根残存。両側前歯はすべて脱落するが、各歯槽線の一部を残す。両側犬歯・第一小臼歯の歯槽は、頰舌側にやや肥厚して閉鎖し、稜状に形成される。これらの性状は、上顎（右側のみ残存）犬歯、下顎（両側）犬歯・第一小臼歯が、それぞれ生前に抜歯された痕跡とみなされる。該期に盛行した風習による抜歯を有する一例であろう。

歯式

⑧	⑦	⑥	5	4	③	2	1		1	2	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
⑧	⑦	⑥	5	④	③	2	1		1	2	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧

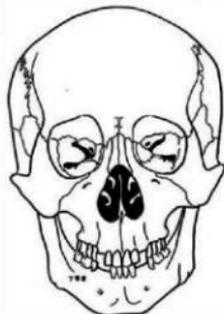
○：歯根
○：残存歯
数字のみ：空槽・歯根のみ
*：抜歯

大腿骨：骨体（左）上半分が一部を寛骨に接して残存する。骨体横断示数は中央部（左）112.00で中度の柱状形成をなし、同上部は76.67（左）で広型に属する。脛骨：骨体の小部分が残存。壮年ないし熟年の男性と推定される。

6号人骨 頭骨のみ残存する。上方からの土圧により極度に変形、後頭骨底部から、側頭骨左側がやや残存。下顎骨：両側枝を欠き、骨体の保存も悪い。永久歯である第一大臼歯は完成、第一・二乳臼歯が残存。中・側切歯が出根直前の時期で、6・7歳の年齢を示す小児骨と推定される。

7号人骨 頭骨のみが残存。すべて細片状であるが、後頭骨や底部の一部などがやや多い。ラムダ縫合から外れた部分のみられ、乳様突起（左）の膨らみは中等ないし小である。

8号人骨 頭部は顔面を右に向け、両眉峰から両側上肢骨が体幹にそって伸された姿勢であるが、骨盤部から下肢骨をすべて欠失する。伸展葬であろう。頭骨：側方からの土圧により、著しく変形し、左側頭が主に残る。後頭骨はラムダ縫合が強い鋸歯状を呈して離開する。骨壁は厚く頑丈で外後頭隆起も強く



5号人骨の抜歯例

突出し、担平面のレリーフも顕著である。下顎骨：側方からの圧迫で骨体中央から折損し、前方部分が多少の形状を保つ。右第一大臼歯は特異な摩耗を示す。咬合面は顎間へ最下位で歯根に及び、中央部が深く凹型に陥凹するため、歯冠周縁は鋭い稜状となっている。右第二大臼歯も歯冠が消失する水平状で遠心へ傾斜する咬耗をなしている。第三大臼歯は空槽。左側の歯はすべて脱落しているが、第二小臼歯の歯槽が滑沢な骨体の凹溝する稜状となる歯槽閉鎖が生じている。ほぼ全歯種の歯槽が不完全ながら観察されるが、歯槽閉鎖はこの1箇所のみである。頸椎：脳底部に連結して残存する。上胸骨：骨体（左右）のみで、三角筋粗面、大結節稜などは弱度であるが、形態は太く頑丈である。その他、肩甲骨（右・関節窩・肩甲顆など）、鎖骨の一部、肋骨、尺骨、脛骨、腓骨、手指骨などの骨体の小部分が残る。歯の咬耗や骨質からみて壮年男性と推定される。

動物骨：人骨の頸部・肩部などに散在して検出されたものである。すべてシカの各部位で、歯列を残す歯、大腿骨・中手骨などの破片、距骨（右）1個が認められる。性別・年齢は特定できない。

9号人骨 下肢骨のみであるが、両側が平行に揃い、伸展幕であろうか。大腿骨：骨体中央部（右）が残る。粗面や稜の形成弱度で、繊細な形である。骨体横断面数中央部=116.00で柱状形成中、同上部=79.31で広型に属する。脛骨：骨体の小部分（右・左）が残る。

動物骨：人骨の下腿部付近にシカの下顎骨（左、出土時にはほぼ充存）、脊椎骨、肩甲骨の一部などが検出されている。

10号人骨 骨体の長さ約27cmの細小な骨であり、小児の大腿部と推定されるが、骨表面の剥落激しく、形状は明瞭でない。同じく周径が異なり、並列する大・小の骨が存在するが、正確な部位は不明である。

11号人骨 頭骨：主に後頭骨の後頭平面から後頭隆起にかけて残る。外後頭隆起は強く突出、項面のレリーフは明瞭。側頭骨（右）岩部が残る。乳様突起は先端を欠くが膨隆は強い。乳突切痕は強く、後頭動脈溝は深い。歯：上顎右第一大臼歯・切歯1本、下顎犬歯・小臼歯・切歯が各1本遊離して残る。臼歯はいずれも咬合面は水平状に摩耗、歯髄が点状に現れている。他の歯群はすべて切縁が水平、下側へやや傾斜する歯頸に及ぶ過耗が生じている。すなわち、咬合面のエナメル質は消失し、露出した歯髄腔は二次歯骨により充填されており、咬耗が緩やかに進行した状況を示している。このような過耗は縄文時代人に特有の上・下顎の歯が毛抜き状に噛み合う臼子状咬合による発現とみられるものである。大腿骨：左右とも小部分を欠くが、ほぼ全体的に残存する。極めて長大・頑丈な形状を具えている。靱筋粗面や粗線の発達は強く、外側唇は下部に至り結節状になる。右側にのみ顕著な第三転子（長・18mm、幅・12mm、高さ6mm）が認められる。骨体横断面数中央部=110.71で中度の柱状形成、同上部=82.35で広型に属する。最大長は47.0cmである。脛骨：左右とも遠位関節部を欠くが、骨体はほぼ残存する。前稜は特に鋭くない。膝窩筋線なども発達弱度、外側・内側面とも平坦、鉛直線（第4稜）は特に認められない。最大上端幅76.0mmを測り、かなり大きな骨端を有する。骨体横断面数中央部=64.70、同栄養孔部=62.16で平型に属する。腓骨：極度に長大である。前稜は鋭くないが強度に発達、そのため内側面は広く、内側稜と骨間棘も強い稜状をなし、前稜より外側面もかなり広く、従って陥凹する種状を形成する。このため断面形は丁字形に近くなる。このような形質は種状腓骨と称し、巨大な形状のものも含めて縄文時代人腓骨に特有なものとして認められている。最大中央径=25.00mm、同最小径=16.00mm。大腿骨長よりヒアーンソン式による身長は169.67cmで縄文時代人男性としては極めて稀な高身長となる。

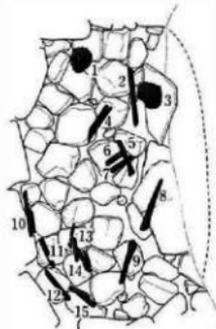
3号埋護下出土人骨 下顎の歯列のみがほぼ直立状態で残る。右犬歯・第一小臼歯近辺やや歯列が移動する。骨体はまったく残存しない模様である。第三大臼歯は萌出完了。全歯種において咬耗はほとんど認められず、全



体に小型の形態をなす。成人であるが未だ若年齢のものとみられる。

3号石棺蓋人骨 石棺の上方1個所に頭骨の破片が残る(耳殻を伴出)。側頭骨(右)の間節窩、頬骨弓部、外耳孔部分などで、他はすべて破片である。

8号石棺蓋人骨 石棺内の人骨は2個体のものとみなされる。ただし主に残存する長骨は骨体の一部に限られ、各個体の形質的な特徴や相違、位置も明確に観察できない。頭骨:①③(國中人骨番号)骨の表面が骨粉状となりそれぞれブロックとして採り上げられたが形態はまったく不明である。上腕骨:⑥⑦、各骨体の一部を残す。2本が交叉する位置にあり、比較的頑丈な形質で、同一個体のものとみられる。大腿骨:②左、④右、⑩左、⑫右。それぞれの位置関係が不規則である。石室の右側壁に近く②④がほぼ縦位置にあるが、上・下に大きく遊離する。②に密着して脛骨の一部とみられる骨体がある。②④は同一個体のものとみられ、強壯・頑丈な形質を具えている。これに対し左側壁に接する⑩⑫は骨体中央部、同上半部の残存であり、ややきゃしゃな形質は相似して、



8号石棺蓋人骨出土状態

1個体のものとみなされる。④骨体横断面示数中央部=117.24、⑩同部=111.54で柱状形成はともに中度である。

脛骨:●右、◎左、●左、◎左。④には腓骨が並列する。⑩骨体は頑丈であるが、ヒラノ筋線はさほど強くない。骨体横断面示数中央部=72.73で正經。腓骨が密着する。⑩骨体上部約10cm残存。⑬骨体の一部でやや細小な形態を示す。

以上の内容から、大腿骨、脛骨ともに形質的に相違が認められ、一方の強壯性(男性的)に対して、ややきゃしゃな異個体の合葬が推定される。ただし、各個体の埋葬位は、各骨がほとんど自然の連結状態を残さず、不規則な配置であり、何らかの意図による二次的な移動を勘考する必要がある。

8号トレンチ人骨 動物骨が一括出土した中から検出された人骨である。頭骨:板状の細片1個。手骨:第一中手骨・基節骨各1本。寛骨:右●部の周囲で、大坐骨切痕は浅く広がり女性人骨と推定される。大腿骨:右、骨体中央部から骨頭まで残存。骨体伸直、粗面などは弱度。骨体横断面示数中央部=111.11で中、同上部=83.87で広型に属する。脛骨:近・遠位関節部のみ。足骨:第四・五中足骨の近位端、基節骨2本。舟状骨1個。距骨:右、左。右側がほぼ完存。滑車前方の外側踏面が明瞭に存在し、脛骨腓骨前方縁辺は増殖による粗糙性の肥厚がある。踵骨:下・後方を欠くが、距骨と同一個体のものである。以上が成人骨のすべてであるが、寛骨の女性的特徴に他の部位が悉く帰属するか否かは不明である。

小児人骨一大腿骨:左、骨体の下部2/3程度が残存。粗面は明瞭でなく、断面は円型に近い。遠位関節部が骨端線から外れ欠失している。距骨:左、小型で大腿骨に伴うものであろう。他に膝蓋骨1個。

2 動物骨

8号トレンチ 本トレンチ出土の動物骨中には、人骨各部のものが含まれている。骨は多量で、すべて大型獣(シカ、イノシシ、カモシカなど)のもので、小動物の骨片はわずか2・3片混入する程度である。骨片は長骨の破砕片が大部分で、下顎骨や遊離歯も多い。シカの大腿骨や上腕骨、中手・中足骨などは、近・遠位関節部は横折されて原型を保つ例が多く、逆に骨幹は縦割されたり捻転状に打砕を被った不規則な断片として残されている。すべて骨質は堅緻で、腐蝕による崩壊の傾向は少ない。シカ:ツノの先端複数。基部を残すものは自然脱落でなく、頭骨を打砕しての折損の痕で上腕骨の骨頭が骨端線から外れた幼獣のもの。距骨右1点、左5点から最少5頭の頭数が推定される。イノシシ:下顎骨の吻端から左側、切歯・臼歯も残存。カモシカ:一箇のツノが完存する。

5号トレンチ 多量の骨片であるが、すべて破片で、内容もシカ、イノシシに限定されるようである。同一部

位で例数の多いものにシカのツノの基部・先端、上腕骨遠位関節部右1・左3点、距骨右1、左3点、踵骨左2点などがあり、頭数は最少3頭と推定される。他にイノシシの下顎骨と歯、上腕骨遠位端などが認められる。

以上のとおり、動物骨はすべて食料源として捕獲・解体の後、打砕された残滓物とみなすことができよう。骨片中に小量であるが火熱を被った焼骨が、黒色の炭化痕を残して混在する。

3 要約

縄文時代人の形質としては、頭骨をみると頭骨最大長が大で同幅も極めて大きく、頭型は中型（女性短型）に属し、顔の幅は現代人より著しく広く、高さは低い低型である。鼻の幅広く、高さは低い広型で、頬骨が前外方に張り出し、眉間から眉上弓への隆起は強く、鼻根が陥ち込むなどのプロフィールは、大頭ですづまりの幅広い顔とともに彫りの深い立体的な印象を与えることになる。本遺跡の出土人骨の頭骨は殆どが顔頭蓋部分に限られるため、これらの所見は不可能であるが、第5号人骨において眉上弓の明瞭な発達が指摘される。鉗子状咬合は上・下顎の歯が毛抜状に噛み合う咬合型で、現代人の鋏の刃のような鋏状咬合とは異なり、古代人特有の型である。第11号人骨の前歯の咬耗は、このような鉗子状咬合の結果とみなされるものである。また、歯の各例に見られるような年齢に比しての過度の咬耗や、自然の咬合とは異なる特殊な摩耗の痕も、生来の咀嚼機能以外に歯が道具として使用された事例と考えられる。

縄文時代後半から弥生時代にかけての風習による抜歯については、長野県内でも現在までに8遺跡の出土例の報告がある(西沢, 1982)。しかし、いずれも資料が小数不完全であり、抜歯様式や地域差などの検討は将来に残されている。第5号人骨における上顎側犬歯(右側のみ確認)、下顎側犬歯・第一小臼歯抜歯の様式は1例とはいえ、貴重な類例の一端となるものである。大腿骨の柱状形成も古代人の獲得形質の一つである。太い骨幹中央部の後面を縦走る骨稜(大腿四頭筋・内転筋の起始部)の発達は、骨幹に対してより強度の維持性を保ち、同時に広い附着面を筋に提供する必要性と考えられている。本遺跡の大腿骨をみると、この柱状性は計測可能(推定値も含む)な全例において、弱・強度各1例とともに中度の形成として現れている。また同じ骨体上部の断面形は全例が広型(扁平)に属する。また脛骨(2例)の断面型も扁平で、古代人においては柱状大腿骨に上部骨体の扁平性が伴ない、扁平脛骨に加えて、第11号人骨の巨大膝骨の存在など、縄文時代の特有な形質を多く具えている。

なお、該期の平均身長は男性159.1cm、女性147.17cm(津雲貝塚人)であるが、第11号人骨の169cm、第3号人骨の女性157cmはこれを遙かに凌駕する特異な体格を予想させる。また、性別では明確な判定部位の多くを欠くが、男女同数に近く、年齢も小児を含む壮年から熟年に及んでいることが推定される。

酸性土壌に覆われた中部高地での骨類の保存例は多くなく、本遺跡の場合も良好な遺存とは言い難いが、該期縄文人の形質を多くとどめる貴重な資料であるといえよう。

参考文献 西沢寿晃: 1982「中部高地の縄遺跡出土の抜歯人骨」『中部高地の考古学Ⅱ』長野県考古学会



おわりに

宮崎遺跡は、狭義の意味では縄文時代の遺跡として認識されている。しかし大きく見れば、この地を含めて層状地端部まで、従来より周知されている塚本遺跡・けいし場遺跡を含む弥生時代から平安時代の広範囲の遺跡内にあることも忘れてはならない。事実、9・11・17・19のトレンチから一部で遺構を伴う該期の遺物が出土している。

さて調査は、昭和60・62年度の2次に亘って実施された。その内容は、畑等灌漑用のパイプ埋設に伴うものであったので、幅1m程に限定されてしまったが総延長823m余に及び、遺跡範囲確認調査の性格を帯びている。この結果、東端はいま一步追求しなければならないが、調査地内では東西に延びる3本の微高地(14頁)が確認され、それぞれの幅及び西端が確認されて、その範囲内から縄文時代の遺構・遺物が検出されている。特にC丘陵は、遺物包含層が厚く、多種・多様な遺物が出土している。それも土層により晩期の土器型式である佐野式と米式を分離確認できたことは高く評価できよう。またこれらの微高地上で生活時期にも相異があり、C丘陵は晩期に主体があり、B丘陵には若干の中・後期の資料が含まれ、A丘陵には晩期後半の資料が認められなく、後期のものが多くなる。狭い遺跡内で生活の場の変遷があったことをうかがわせる。

住居址は、3軒確認され、そのうちの2軒(1・3号)はA丘陵の微高地上にあり、共に偏平石を敷いている。これらは中期～後期に比定される。尚、9号トレンチにも自然円礫を配置した遺構があり、柄鏡形の敷石住居址が予想される。1号住居址は、B丘陵の西端にあり、4分の3程を検出した。晩期前半の所産によるもので、県下で唯一の検出例であり、また特に粗製土器に見るべきものがあり、編年研究上における一等資料である。

石棺墓は、A丘陵微高地上から8基検出され、後期から晩期前半に亘る時期をあてる。その形態は3種あり、石囲いの内面底に小円礫を敷き詰めたもの(2・3・5・7・8号)、石囲いだけのもの(1・4・6号)そして控槽をしているもの(8号)である。このあり方は、生前の身分、時間差を表現しているか尚検討が必要である。

土壌墓は、C丘陵に10基、A丘陵に1基の計11基が検出されている。C丘陵のものは、明らかに墓域内に伸展埋葬されている。ただ頭部位置の方向が一定でなく、3～6号土壌墓のように数次に亘っていることから同時期埋葬ではない。また8号トレンチの人骨が獣骨と共に出土していることから微高地西端に集中してあるものと思われる。また1号土壌墓だけに筒形土器が副葬され、他にはない。また1・3・8・9号土壌墓の鹿骨の存在と1号土壌墓の骨角器は何を意味するのであろうか。

埋壘は、3か所で単独で検出されており、1号住居址内のものが黒曜石の保管用として用いられているのに対し、これらは3号埋壘に見られるように埋葬施設と考えられよう。3からの確認で晩期後半に比定する。

土器の出土量は多く、時期別分布、晩期の土器型式の分離等については前記した。ただ残念なのは、これらの出土土器全部を本報告書に掲載できなかったことである。何かの機会を得て提示したい。

石器の量も多く、石鏃にいたっては600点弱の数値になるのに対し、生産用具としての石斧類が少ないのが特色とする。該期の特徴である石棒・石剣も目につき、18点出土している。石器ではないが、赤色顔料の原材料と考えられる岩石の出土例も多く、多分これらを打ち砕き、磨り潰して、焼成後塗彩したのであろう。

着装品では土製耳飾の出土量が目立つ。総数138点出土している。この中には遺し彫りのある優品が7個含まれ、埼玉県高井東遺跡出土(『日本原始美術体系5』講談社)のものに近似するものがある。また3号石棺墓・5号石棺墓の頭部耳付近から着装状態のまま確認できたことは特記されよう。そして、墓域のある地区に集中する傾

向があることは、何かを暗示しているように思う。

人骨・獣骨の残存状態の良かったことも注目される。酸性の強い中部山岳地域の土壌では、生の骨は残りにくいとされてきた。ましてや乾燥化の著しい本調査地においては更に残りにくい要因が叫ばれるのにとどうゆう理由があったのであろうか。土壌を分析する必要があるだろう。

最後にもう一つの特記事項を記する。5号土壌墓の魚骨製耳飾と銚頭の出土である。耳飾は鯨と推定される海洋性大型魚の椎骨製のものであり、銚頭は海岸地域の貝塚から発見されるものに近似し、これらは何らかの形で、少なくとも海にかかわりのあった人々との交流を裏付ける資料であると考えられる。

銚頭は、2点出土しており、いずれも基部が欠損しているため、その使用方法は不明であるが、これを用い捕獲する淡水魚を想定すると、鯉及び秋に産卵のため遡行する鮭や鱒が考えられる。これらの魚類は、力の強い魚で、単なる箱(やす)としての使用方法ではしとめることは困難で、そこには紐をつけたり、箱を離したり等の工夫をしなければならない。こう考えれば、銚頭は離頭であった可能性が強いように思われる。ちなみに、本道跡に近接する赤野田川には、大正時代まで鮭が遡行して来たとの古老の話を付記しておく。

尚、今回の調査で検出した遺構は事業主体者・地主の皆様の好意により一部を除き埋め戻し現状で保存する措置をとった。

長野市の埋蔵文化財	第1集	「信濃長原古墳群」
〃	第2集	「浅川西条」
〃	第3集	「中村遺跡」
〃	第4集	「塩崎遺跡群」
〃	第5集	「塩崎遺跡群(2)」
〃	第6集	「三輪遺跡—付水内坐—元神社遺跡」
〃	第7集	「田中沖遺跡」
〃	第8集	「藤ノ井遺跡群」
〃	第9集	「四ツ屋遺跡(第1～3次)・徳間遺跡・塩崎遺跡群(3)」
〃	第10集	「湯谷古墳群・長礼山古墳群・駒沢新町遺跡」
〃	第11集	「箱清水遺跡・大峰遺跡・大清水遺跡」
〃	第12集	「浅川扇状地遺跡群—牟礼バイパスA・E地点遺跡—」
〃	第13集	「浅川扇状地遺跡群—迎田遺跡・川田条里の遺構・石川条里の遺構」
〃	第14集	「石川条里の遺構(2)・上駒沢遺跡」
〃	第15集	「箱清水遺跡(2)」
〃	第16集	「石川条里の遺構(3)・(付上駒沢遺跡)」
〃	第17集	「浅川扇状地遺跡群—牟礼バイパスB・C・D地点遺跡—」
〃	第18集	「塩崎遺跡群IV—市道松前—小田井神社地点遺跡—」
〃	第19集	「土口将軍塚古墳—重要遺跡確認緊急調査—」
〃	第20集	「三輪遺跡(2)」
〃	第21集	「芹田小学校遺跡」
〃	第22集	「吉田高校グランド遺跡」
〃	第23集	「横田遺跡群 富士宮遺跡」
〃	第22集	「長野吉田高校グランド遺跡」
〃	第23集	「横田遺跡群 富士宮遺跡」
〃	第24集	「塩崎遺跡群V 殿屋敷遺跡」
〃	第25集	「南川向遺跡」
〃	第26集	「東妻場遺跡」
〃	第27集	「小袋見城跡」

長野市の埋蔵文化財第28集

宮崎遺跡

—長原地区団体営土地改良総合
整備事業に伴う発掘調査報告書—

昭和63年3月15日印刷

昭和63年3月30日発行

編集 長野市教育委員会
発行 長野市埋蔵文化財センター

印刷 ほおずき書籍館